道の先には……

神山　備

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
道の先には……

【Ｎコード】
Ｎ１００６Ｒ

【作者名】
神山　備

【あらすじ】
何を思ったのか、異世界ファンタジーです。魔が差したとしか思えません。異世界にもし行けたらやってみたいことを、思う存分やる予定。

僕、宮本美久（みやもとよしひさ）と会社の先輩鮎川幸太郎（あゆかわこうたろう）は仕事で郊外に出掛ける途中迷子になって、運転している先輩と地図の読めない僕のどっちが悪いかで喧嘩を始めた。その時、車がものすごい光に包まれたかと思うと、すとーんと落下。？　何で？？　前に道あったと思うんだけ

ど……次に気がついた時、僕らがいたのはモンスターと魔法のある世界だった。
そんな僕と先輩とあっちの世界の住人マシューとのデコボコ珍道中。

※何気に、主人公チートかも。

４／２５、完結を一旦はずして幸太郎スピンオフ始めました。
９／１原稿をこことサイトの二箇所にしました。
１１／４ファンタジー抜きの小ネタはじめました。

序

「だぁーっ、もう！　やっぱりお前と来ると禄な事がねぇ、この疫病神！！」
そう言って車のダッシュボードを叩くのは、僕の会社の先輩鮎川幸太郎。
「そんなぁ、道に迷ったのは僕のせいじゃないですよ」
遠慮がちにそういう僕を先輩はぐっと睨んだ。
「宮本、お前のせいじゃないって！？　この状態のどこが都内で頻繁に迷子になる地図の読めないお前のせいじゃないって言うんだ。だから、ナビ付きの俺の車で行くって言ったんだ」
「でも、こんな山道で先輩の真っ赤なセリカちゃんなんて走らせたら、それはそれで何と言われるか……」
それで遠慮がちにそう言った僕に先輩は間髪入れずに、
「黙れ、ヘタレ宮本のくせに。確かにこんな道で俺のかわいいセリカWXに傷でもついた日にゃ、泣くにも泣けない。でも、こんな訳の解らないところで迷うよりは何ぼかましだろ」
と、返した。
「けど、今回は地図見てないし、僕のせいじゃないですって！」
「うるさいっ！　自分が地図見れないのを自慢するな！！」
そう言いながら不毛な言い合いをしているそのとき、ものすごい光に包まれたかと思うと、僕たち（正確に言えば僕たちの乗った車）はいきなり落ちたのだった。
何でだろ、たしかに前に道はあったはずなのに……

迷子　1

僕たちはしばらくそのまま気を失っていたらしい、次に気がついた時、森の中にいた。落ちる前も山道を走っていたのはそうなんだけど、木の種類が全く違っていた。落ちる前に走っていた周りの木はいかにも日本らしい杉木立だったけれども、今目の前にあるのは広葉樹。しかも、青々としている。それに、心なしか気温も高い気がする。

　それに、落ちてきたはずの切り立った崖とか斜面なんてものはなくて、緩やかな丘みたいなものが遙か向こうまで広がっている。アスファルトで舗装された道は石畳になっているし、なにより確かにかなりな高さを降りたはずなのに、僕たちはもちろん、会社の車（先輩に言わせれば廃車寸前のポンコツ）にもぜんぜん傷なんか一つも付いていなかった。

「おい、宮本、乗れっ」

それを確認した先輩は、そう言って車に戻る。慌てて僕も車に乗るとエンジンをかけ発進させた。

「ちゃんと走るみたいですね」

「ああ、ポンコツの割には上等じゃねぇか」

先輩はそう言ってさらに車を走らせた。

　しばらく行くと道ばたに大きなリンゴの木が見えてきた。真っ赤な実が所狭しとひしめき合っている。

「そう言えばお腹空きましたね。あのリンゴ食べましょうよ」

「宮本、お前の頭には食うことと寝ることしかないのか？」

「そんなこと言ったって、お腹空いたんですから。それに、こんな道ばたにぽつりと植わってるんだから絶対に野生ですよ。採ったって誰にも怒られないと思います」

呆れる先輩に僕は胸を張ってそう答えた。どう言ったって先輩は僕をバカにするだろうし、それなら開き直って空腹を満たす方が建設

的だと思わない？
「じゃぁ、お前勝手に行って採って来い！　俺は知らん」
先輩はそう言うと、僕をリンゴの木の端まで戻って降ろしてくれた。
　僕は僕の背でも届くところになっている実を三つ四つ採り、その内の一つにかぶりついた。
「うー、おいひい」
間違いなく完全無農薬のそれは、僕が今まで食べたリンゴの中で一番美味しかった。
　しかし次の瞬間、僕は
「ぎゃっ！！」
という、悲鳴を上げた。
「宮本、どうした？　やっぱり毒リンゴだったのか、それ」
その悲鳴を聞きつけて先輩は後から考えるとあんまりな台詞を吐きながらそれでも降りてきてくれた。
「違いますよ、ほ、ほらアレ……うわぁ！！」
そのとき、震える僕に向かって、そのゲル状の物体が突進してきたのだった。

迷子　2

先輩はとっさにその辺にあった木の棒を持って構える。某ド〇ク〇の初期アイテム『ひのきのぼう』っていうのがあるけど、さしずめこれは『りんごのぼう』ってところだろうか。何にしても再弱アイテムには違いない。確か剣道2段の先輩は格好に反して意外と素早いゲル状を、それでバンバンふっ叩いている。何をしても様になる人だと思う。

　そのとき、先輩がぶっ叩いているのとは別のゲル状が僕の足にまとわりついてきた。ひえ～っ、キモチワルイ！！　僕は全身総毛立ちながら、そのゲル状に自分の食べていたリンゴをぶつけた。そして自分の手でもげる範囲のリンゴを次々ともぎとって、ガンガンゲル状に投げつける。

「宮本、もういい。これ以上やったら、リンゴがもったいない」

しばらくして、そう言いながら先輩が僕の腕を抑えた。

「僕がどうなってもいいっていうんですか」

「どうなるって、どうもならんだろ。もうこいつとっくにノビてるし」

だって、こんなアンデットっぽい奴、またすぐ復活して動き出しそうな気がするんだもの。そう言おうとした僕に先輩は、

「でも、お前思ったよりもなかなかやるな。さしずめ技名は『リンゴ乱舞』ってとこか。ガキ大将に泣きながらめちゃくちゃな攻撃加えるチビガキみたいで、なかなか良かったぞ」

と言った。一応褒められているみたいだけど、そんな褒め方ってなんかウレシクナイ。

　とにかく、投げたリンゴを回収して（だって、そのまま放置したって腐っていくだけだし、それなら洗って食べた方が……）車に乗せると、先輩はそれを見て鼻で笑った。　その時、ちょっと離れたところから

「Ｈｅｌｐ　ｈｅｌｐ　ｍｅ！」
と、ちょっと訛った英語で助けを呼ぶ声が聞こえた。僕はその声を聞くと、自分のスキルなんてものは一切無視して、そこに走り出していた。
「おいこら、宮本！　待てよ！！」
それを見た先輩がやれやれと首を振りながら、今度はトランクを開けて車から修理用のスパナを取り出し、僕の後を追いかけた。

変な第一村人？　発見

僕たちが駆けつけると、声の主は茶髪で碧眼の男。大きな荷物を今度は犬？　みたいな（そう言うにはかわい気のない）奴らに取られようとしていた。その男自身結構がたいもデカくて一匹ぐらいなら振り切れるんだろうが、相手は４匹もいて、その中の一匹が指揮して集団的に動いているという、なかなか獣とはいえ賢そうな連中だった。

僕はそのときになってやっと、自分がリンゴを車の中に全部置いてきたことを思い出した。

「宮本、お前は下がってろ！」

僕がそのことに気づいてあたふたしていると、先輩はそう言って、スパナで犬もどきをボカボカと殴ってあっと言う間に退散させた。

【助けてくだすって、本当にありがとうございました。この中には王都にもって行かなきゃならんでぇじな手紙が入っていたもんで、焦ったですじゃ】

その男の人は何度も頭を下げながらで早口にそう言った。

【オウト？　オウトって何？】

【王都と言えば、王都グランディーナに決まってってでしょ？　おかしなことを聞かんでくだっせ】

「先輩、この人変です」

「さっきから出てきている変な化けもんと言い、この外人と言い、確かに妙だがな、俺に言わせりゃお前も変だ。大体俺には何を言ってるのかさっぱりわからん。そんな男とちゃんと会話できているお前っていったい何だ？」

「えっ、先輩わからないんですか。この人王様に届ける手紙を守ってくれたってお礼言ってるんですけど」

「お前こいつがしゃべってることわかるのか？」

ものすごく驚いてそう言う先輩に、僕は逆にビックリしながら頷いた。確かに早口だったし、ものすごく訛ってるけど、この人のしゃべっているのは基本英語だ。それがわかれば、時々くるう文法を少し修正すれば内容はつかめる。

「だって、この人のしゃべってるの英語ですよ」

「英語？」

「ええ、かなり訛ってますけど」

「宮本、お前帰国子女か？」

「いいえ。大学英文科でしたけど、外国なんて一度も行ったことないですよ、僕」

「じゃぁ、何で解るんだ？」

「僕授業ちゃんと出てましたもん」

外国に行ったことがないと言った僕に信じられないと目を瞠った先輩に僕は胸を張って答えた。

「……とにかくだな、この男が変なのかお前が変なのかもう少し行ってみれば判るだろ。おいそこの、お前も乗れ！　……Ｒｉｄｅ ｉｎ ｔｈｉｓ ｃａｒ」

先輩はひとしきり頭を抱えてから、そう言って男に車に乗るように強要した。

【この車に乗ってくださいと言ってます】

だけど、先輩に車に乗るように言われてもきょとんとしている男に僕が通訳する。

【コレに？　馬のない馬車に……ですかい？　勇者様方も、モンスターに襲われて馬を盗られたんですねぇ。それでおいらを助けて下さったんかぁ。ここでまず一休みしてから出発ってことですね。んじゃま、Ｌａｄｙ】

男はそう言って、先に僕が乗り込もうとしていた助手席のドアを開けると、僕の手を取った。そして、僕が乗り込むとおもむろにドアを閉め、自分は後部座席のドアを開けて荷物をドンと放り込むと自

分も乗り込んだ。僕は勇者様とＬａｄｙという単語にすごく嫌な予感がした。その部分だけは先輩も理解したらしく、僕の顔を見てぶっと吹きながら車に乗り込む。

【で、これからどうするんですかい】

それから身を乗り出しながら聞いた男に、先輩は答える代わりにエンジンをかけ、思いっきりアクセルを踏んだ。

【ば、馬車が……馬もないのに走って……　ぎゃぁ～　お助けを！！！】

続いて車の中には、僕たちが駆けつける時に聞いたよりさらにひきつった悲鳴が響きわたったのだった。

異世界トリップ決定

車の中には晴れやかに笑う先輩と、恐怖でゆがんだ顔の男。
やがて僕らの行く先に、見慣れないヨーロッパ風の田舎町が見えてきた。
【リルムの町だ！】
それを見て男はひきつったまんまでちょっと綻んだ。逆にそれを聞いた先輩の方が苦虫を噛みつぶした顔になって、車を停めた。
「やっぱり、さっきの光で僕たちの方がとばされたみたいですね。異世界トリップってやつですかね」
思案顔で僕がそう言うと、先輩は僕の頭を叩いて、
「何、冷静に分析してやんだ。ったく、やっぱりお前と一緒にいると禄なことがない」
とハンドルに突っ伏した。
「だぁからぁ、先輩が運転してたんだし、僕の所為じゃないですって！」
「うるさい、黙れ！！　なら俺の所為だとでも言いたいか」
「別にそんなこと、言ってないでしょ！」
だけど、僕たちがいつものように言い合いを始めた時、はじめは呆気にとられていた男がクスクスと笑い出した。
【おい、何笑ってんだ。それと、お前名前は？】
【マシュー、マシュー・カールっす】
すると先輩はむっとした顔のまま男に聞いた。
「先輩もこの人の言葉判るんですか？」
「お前がさっきこいつのしゃべってるのは英語だって言ったろ。お前にできることが、俺にできない訳あるか！」
僕が驚いて聞き返すと、先輩はそう言った。でも、よくよく考えてみると、名前聞いただけなんだよね。それだったら誰でもできる……なんてことは口が裂けてもいえないけど。

【で、勇者様方のお名前は】
【俺？　俺は鮎川幸太郎。あ、コータロー・アユカワ、わかるか？】
「ＯＫＯｈ，コータル、コータル」
「コータロー」
「コータロ」
「ま、これが限界か。ＯＫ」
マシューは頷くと今度は僕を指さしたので、
【僕は宮本美久。ヨシヒサ・ミヤモト】
「ヨッシャ？」
「ヨシヒサ！！」
「ヨッシャ？」
「よっしゃ、よっしゃそれでいい」
ヨッシャと言ったマシューに、先輩はうなづきながらＯＫを出す。
「勝手に決めないでください。よっしゃよっしゃって、何十年か前の政治家じゃあるまいし、良い訳ないでしょ！」
名前を聞かれてるのは僕なんですから。
「お前も古いな。じゃぁ、音読みでビクとでも呼ばせるか」
「音読み？　ヨシでもヒサでもあるでしょ？」
まぁ、ヨッシャよりはまし……そう言いかけた僕に、マシューはビクというワードに反応し、
「Ｏｈ，ヴィク！　ヴィクトリア！！　ＯＫ、ＯＫ」
と満面の笑みで理解？　を示した。
だけど、ヴィクトリアって……
【ダメです、やっぱりダメ！！　ヴィクトリアって言ったら女性の名前じゃないですか。ダメ、Ｎｏｔ　Ｖｉｃｔｒｉａ！　Ｉ，ｍ　ｎｏｔ　ｆｅｍａｌｅ！！】
「Ｎｏｔ　ｆｅｍａｌｅ！？」
慌てて訂正した僕に、マシューは目をまん丸にしてそう聞き返した。

ああ、こんなに美味しいものが……だなんて

【男ぉ！！】

【そんなにびっくりすることないでしょ！？　僕ちゃんとスカートなんか穿いてないじゃないですか！】

【そりゃ、勇者様の連れなんだから、お忍びの姫様なのかなぁとか……】

女性に間違われていたことに激怒する僕に、マシューが遠慮がちにそう言った。その目はどことなく傷ついた風。そして、

【バカ、こいつがそんな品のいい顔してるか？】

【確かに上品とは言えないかもしれないけど、かわいいじゃないですか。コータロと並ぶとお似合いです】

先輩がいつものように僕をこき下ろすのに同調して、何気に酷いことをさらっと言ってのける。ううっ、確かに１６５ｃｍの僕は、１８３ｃｍの先輩やほぼ変わりないだろうマシューからすれば小柄だけどね、

【げっ、こいつとお似合いだなんて言うな！】

すかさず先輩が言う。でも、それはこっちの台詞です。

【そうか、妙な光に包まれてこっちに運ばれてきたねぇ。あんたたちこれからどうするね】

　それから、僕たちはマシューにここに運ばれてきた経緯を掻い摘んで話した。マシューは僕たちが別に高貴な出自でもなく、歳もさして変わらないことが判ると幾分砕けた口調になっていた。だけど、元々敬語が曖昧（日本語が厳密すぎるのか）な英語では大して変化はないのだけれど。　それに、マシューが僕たちを高貴な出自だと勘違いしたのも、その口語というより、ブリティッシュイングリッシュな日本の英語教育が原因なのだろうし。

　大体、僕だって私だって、こっちじゃ全部Ｉ　ｍｙ　ｍｅだ。そ

れが間違いの根元だって気がする……って、英語に八つ当たりしても仕方ないのだけどね。

【とにかく、腹が減っていてはなんもいい考えは浮かばんて、リルムの町で腹ごしらえといくか】

マシューに促されて僕たちは町外れで車を降りると（馬のない馬車なんかに乗っていたら、絶対にドン引きされるとマシューが言うので）リルムの町に入った。

【お、良いぞ。今日は市が立ってる】

見ると町のショボいメインストリートにはいくつかの屋台が出ていた。

「プリンだぁ！」

その中に僕は『Ｍｏｎ　Ｐｕｄｄｉｎｇ』という看板を見つけて色めきたった。車のないこの世界には当然プラ容器なんてものはないらしく、極小のブリキっぽいバケツに黄色いプルプルが収まっていた。

【それ三つ】

すると、その声を聞いたマシューがプリンを買って僕たちに手渡してくれた。

【助けてくれた礼だ、食え】

【うわぁ、ありがとう】

僕はそれを受け取ると、添え付けの木の棒で掬い取って口に入れる。予想通りと言うか、予想以上の美味しさ。

「んまい！　幸せだぁ～」

思わず日本語でうなってしまう。

「相変わらず、おまえの幸せはお手軽だなぁ。ま、なかなかいけるがな」

先輩もまんざらではない様子。

【旨いか】

【はい、とっても】

味を聞いてきたマシューに僕はぶんぶんと首を縦に振ってそう答えた。でも、僕の頷きにニコニコしながらマシューが言った

【そうだろ、そうだろ。ここいらは本当に良いスライムがいっぱいとれるからな】

の一言で、僕と先輩は互いの顔を見合わせて固まってしまった。

「す、スライム！！？」

「お、おえ～っ！」

僕が素っ頓狂な声を上げるのと同時に先輩が吐いた。あんなに美味しかったプリンの原料がほんのついさっき戦ったあのゲル状だっただなんて……

「ショックだ……こんなに美味しいものがスライムでできているなんて……」

「っていいながら、お前まだ食ってんじゃねぇか。一体どんな神経してんだ」

ショックだと言いながらどんどんと食べ続ける僕に、先輩は蒼い顔をしながらそう言った。

「だけど、こんなに美味しいんですよ。それに、途中で捨てるなんてもったいないです、そんなこと僕にはできません」

そのあとも僕は、

『何でこんなに美味しいものがスライムからできてるんだ』と繰り返しつぶやきながら、先輩の分のプリンも平らげたのだった。

食堂にて

それから気を取り直して、僕たちは町で唯一の居酒屋兼食堂らしきところに入った。さすがにちゃんとした店構えならそんなに妙なものは出てこないと……信じてマシューに注文してもらう。ただ、先輩は料理と一緒にちゃっかりビールを注文していた。

「先輩、これからまだ車に乗るんだったら、飲酒運転はダメですよ」と僕が窘めると、

「うるさい、これが飲まずにやってられるか。それに、車の存在していない社会で飲酒運転もクソもあるか」

と逆ギレした。言われてみればそうかも。たくさんあるからルールができてくるのであって、僕たちが乗っている車一台しかなければ、そんなものできる訳がない。

やがてやってきた料理を僕たちは一切聞かずに食べた。もし聞いて、その材料にさっきマシューが襲われていた『犬もどき』やその他の妙なモンスターなんかが使われていることが判ってしまったら、僕たちは餓死しかねない。僕はともかく、先輩はその可能性大だ。その証拠に、先輩はさっきからベジタリアンに宗旨替えしたのかと思うほど野菜しかつっついていない。

それでも何とか食事らしいものを終えると、先輩は徐にタバコを取り出して、ライターで火をつけた。それを見てマシューが驚く。

【コータロ、あんた剣の腕もあるのに、魔法も使えるのか？】

【は？　ああ、これね。まぁちょっとな】

先輩はマシューがまじまじと見ている、今度の新商品につける予定だったロイヤリティーのライター（つまりタダもらいの品物）を手のひらで転がして不敵な笑みを浮かべた。

「先輩っ！」

「何だ、宮本。お前何か言いたそうだな」

「先輩、コレって要するにおまけじゃないですか。そんなんで魔法

使いごっこなんかしてると後でイタい目に遭いますよ」
「堅いこと言うなって。あっちが勝手に勘違いしてんだから」

やがて、先輩が一服し終わり、僕たちは席を立った。
【あのぉ、お代は】
【はい、７５ガルドになります】
そして料金を尋ねた僕に、店のおかみさんは愛想の良い笑みを浮かべてそう答えた。そうか、７５。ずいぶん安いな。えっ？　７５……７５ガルドぉ！！
「先輩、通貨単位が違う……」
「そりゃそうだろ。言葉が通じない世界で、金が一緒なわけないだろ」
持っているお金が使えないことに気づいて慌てる僕に、先輩は平然とそう返す。
「じゃぁ、どうして払うんですか！　マシューにばっかり払わせられないでしょ？」
「何なら、お前が身体で払う？　お前なら高く買ってもらえそうだぞ。何せビクだもんな」
続く僕の言葉に、先輩はそう言って高笑いした。

……やっぱりこの人、鬼だ……

敏腕営業マンの錬金術？

【旦那、お困りですかい？】

その時、店の奥から、ひとりの男が僕たちに近づいてきた。こぎれいな身なりをしていて、隙がない。旅人なのかかそれとも王都あたりの商人で、この町に来ているのか、何にしてもこの田舎町には似つかわしくないギラギラとした目つきをしていた。

【良けりゃ、あっしがお出ししやすよ】

と、続ける目線の先には先輩が握っているライターが……えっ、それがお目当てなの？

【ふっ、あんたもこれが目当てか。安くはないぞ】

一応、先輩の名誉のためにライターとか言ったけど、実はアウトドアグッズの販促品であるそのチ〇ッカマンを握り直して、先輩はそう言ってニヤリと笑った。そうやって見てみると、あの形はマジックロッドみたいに見えないこともないし、『キャンプのお供に……ファイアメイト』のロゴは、日本語なんて知らない彼らには何かの詠唱呪文を刻んでいるようにしか見えないかも。けど、安くはないって……元々タダでしょうが！　先輩、どんだけふっかける気なんだろ。

【数は用意できないでしょうかね。そしたらそれ相応の物はこちらも用意させてもらいやす】

【わかった、じゃぁ５つ６つ用意しよう。ただ、貴重品だからな、しかるべき所に隠してある】

車の中に問題のマジックロッドもどきは１００個以上あるって言うのに、先輩はそう言って、一人先に店を出た。僕に日本語で、

「つけられないように、お前はここにいてあいつを見張ってろ」

と言い残して。

魔女様降臨……！！　1

先輩が戻って来て、僕たちはリルムの町の旅館の男が泊まっている部屋に行った。そこは回復系の木の実やら、石化防止のペンダントやらがいっぱい。僕が興奮しっぱなしで、一つ一つ眺めているのを先輩は些か冷めた眼で、マシューは幾分呆れた顔で見ていた。だって、これってリアルＲＰＧのオンパレードじゃない！　これが興奮せずにいられますかって！！

僕はその中に古ぼけた本が一冊あるのを見つけた。何が書いてあるのか見ようと開いた僕に男は言った。

【止めときな、そいつは持ち主を選ぶんだ。大抵の奴は読めもしねぇよ】

先輩にはへつらっているクセに、随分と僕にはタメ口なんじゃない？　なんて思いつつ、

【へぇ、そうなの】

と返しながら、僕はパラパラとページをめくって、

「火に関する呪文かぁ……ｆｉｒｅ　ｂａｌｌ＜火の玉＞って、笑えるぅ」

と声を出しながらその本を読む。それを聞いて男はおろか先輩やマシューまでもがギョッとして僕を見た。そして僕はその本の冒頭部分にあった『注意書き』を参考に『こめかみに意識を集中』して、もう一度、

＜火の玉＞「ｆｉｒｅ　ｂａｌｌ！」

と詠唱した。胸の前に広げた手にぽあっと赤い玉が生まれる。だけど、起こったことにビックリして気がそげちゃったのか、それはすぐに消えちゃったけど。

「うわっ、これってますますリアルＲＰＧ！」

と一人はしゃぐ僕に、後の３人の大の男は完全にフリーズしてしまっていた。

【お前、魔女なのか……】
しばらくしてから、やっと気を取り直して男がそう言った。僕は『魔女』というワードにちょっと『またか』と思いつつも、
【そうみたいですねぇ、僕、超ド級の初心者ですけど】
と男に返した。

で、目立たないようにこっち仕様の服とか、ちょっとした武器などをチ〇ッカマン計１０本で購入。その中にはちゃんとさっきの『魔道書』（チ〇ッカマン３本相当）も含まれている。
僕はホクホクでその本を読みながら宿屋を出た。先輩はマシューに先に小声で耳打ちしてから僕に、
「こら、読みながら歩くな。転ぶぞ。それにな……」
とそこからぐっと声のトーンを落として、
「町のはずれまで来たら、一気に車まで走るぞ。その本を俺に渡すか、小脇に抱えてろ」
と言った。別に声のボリュームを下げなくたって日本語なんだから、ここの人は誰も解りゃしません、とか思いながら僕は小脇に本を抱えた。
そして、町外れに来た僕たちは、一瞬３人で顔を見合わせると、車に向かって一気に駆けだした。

―＊－＊－－＊－

僕たちが走り出した途端、慌てて追いかけてきた一団があった。総勢１０名ほどか、さっきの商人が差し向けた者だろう。目的はたぶんあのチ〇ッカマンだ。先輩が一人で取りに行ったのを見て、まだ隠し持っていると思ったに違いない。確かに希少価値と言えばそうかもしれないけど、なんだかなぁ。

そんなに足は遅い方じゃないはずだけど、彼らは普段車なんか乗らずに生活してるんだろうから、かなり早くて少しずつ間合いを詰められている気がする。このままじゃ、車に乗って発進するためのタイムロスで追いつかれてしまう。何か彼らの足を止める方法は？

その時僕が小脇に抱えている本がきらりと光った気がした。『君、持ち主を選ぶんだよね。僕を持ち主だと思ってくれているなら、助けてくれない？』と僕は本に囁きかけると、走るのを止め、追っ手の方に向き直ると『魔道書』をばっと開いて、そのページを見る。

やった！　停止魔法だ！！　僕は、

＜汝の影よ、その大地に貼り付け！　ＳＴＯＰ！！＞と唱えて、彼らをじっと見据えた。追っ手はまるで『だるまさんがころんだ』で鬼に見られた時のようにぴたりとその場で動きを止めた。

「宮本何をしている。早くこっちに来い！」

その様子に、先輩が慌ててそう叫ぶ。

「だ、ダメです。僕の今の集中力では、一瞬でも眼を離したらそこで術は切れます。だから、先輩が車を取ってきてここまで回してください」

「お、おう分かった。待ってろ」

先輩は僕のその言葉にそう言って、マシューに車に向かうように促した。そして車に乗り込むと、先輩は旋回しながら僕の前にピタリと車をつけた。その間約２０秒。僕が眼を離すとすぐ、金縛りが解けた追っ手が慌ててまた走ってきたけど、僕が乗り込むのがわずかに早かった。先輩は僕が乗ったのを確認するとドアを閉める前にアクセルを全開で踏み込んで……一気にリルムの町を後にした。

魔女様降臨……！！　2

【ここまでくりゃもう大丈夫だろう、ふえぇ、助かった】
しばらく走ったところでマシューがそう言ったので、先輩は車を停めた。
【それにしてもビク、お前すごいな。いきなり魔法を使いこなすか？】
【えへへ、あれは何でもいいから相手の動きを止められたらって思ってページを開いたら、たまたま停止魔法のページだったってだけです。偶然ですよ】
ビクと呼ばれるのは幾分不満だけど、褒められるのはなんだか悪い気はしない。そしたら、隣に座っていた先輩が
僕の髪をわしっと掴んで
「いい気になるんじゃねぇ」
と言ったので、僕はふくれっ面で先輩をにらんだ。
「大体、俺に命令するなんざ、１００年早いんだ。ヘタレ宮本のクセに」
「でも、あの時には敵の動きを止めなきゃ……」
「だからって、できるかどうかも判んない魔法で乗り切りろうと思う奴があるか。まったく、寿命が縮まるかと思ったぞ」
先輩はそう言いながら、髪を掴んだままあらっぽく僕の頭をなで続ける。ああそうか、先輩心配してくれてんだ。
「先輩、ありがと」
「ま……解ればいいんだ、解れば」
その時、マシューがうん、と一つ大きな咳払いをして、
【俺に判る言葉でしゃべってもらねぇかな。どうもさっきから自分が邪魔者みたいな気がして、しょうがない】
と憮然とした表情でそう言った。
【邪魔者って……ただ、いきなり魔法を使ったのを叱られているだ

けです】
【コータロが怒ってる？　言葉が解らない俺からすれば、見つめあって愛を語り合っている様にしか見えなかったぞ】
【マシュー、気色悪いこというな！　何が悲しくて男に愛を語らなきゃならん】
それは、こっちの台詞！
【いや、愛があれば性別だって乗り越えられるのかなと……】
【マシュー！】
ぼそっと小声でそう言ったマシューを僕はキッと睨んで、パラパラと『魔道書』のページをめくる。
【さぁ、どれにしようかな】
その言葉に、マシューはもちろん先輩まで蒼くなる。
「おい、止めろ宮本。こんなとこで魔法なんか発動したら、このポンコツが爆発しちまう！」
【えっ、それがどうしたの？　どうせポンコツでしょ？】
それに対して僕は笑顔でそう返しながら手を胸の前に繰り出す。その仕草を見て、先輩とマシューは同時に叫んだ。
【ひえーっ、魔女様お助けを！！】

……だから、魔女じゃないってば！！

魔女様降臨……！！　3

僕は指をこきこき鳴らしながら笑みを浮かべていた。でも、魔法を使おうとした僕は急にめまいがして目の前が真っ白になった。
次に目覚めた時、僕はちゃんと宿屋のベッドに寝かされていた。
「目、覚めたか。急に目を回すから心配したぞ。マシューが言うには、魔力の使い過ぎだそうだ。初心者が時空系の停止魔法なんつー上級魔法をいきなり複数にかけるなんぞ、今まで聞いたことがないってよ」
そうか、ＭＰ切れって訳か。元々ほとんどＭＰ自体が少ないのだろうし、
「あ、ありがとうございます。ちゃんと運んでくれたんですね」
「感謝してくれよ、マシューはあんな図体してるのに、実はちっとも力がないしで、結局俺が一人でここまで運んだからな。それにしても、おまえ重いぞ。抱き上げた時、腰が折れるかと思った」
「すいません、重くって。でも、僕は先輩がいつも抱いているような、女の人みたいに軽くはないですよ。なんせ男ですから」
『男』というワードに力を込めて僕が言う。
「うそうそ、重かなかったよ。ははは、魔女発言をまだ根に持ってんのかお前」
「当たり前でしょ？　それよりマシューは？」
そう言えばマシューがいない。マシューが居たら、『また俺の分からない言葉で二人こそこそしゃべってる』と拗ねられかねないほど、日本語で会話している。
「あ、さっきなんかぼそぼそと訳の分からないことをつぶやきながら出かけるって言って出てったが」
そんなことを話していると、マシューが戻ってきた。
【ビク、気が付いたか】
【うん、たった今】

【ほい、コレ】
マシューはそう言うと、真っ赤な実を僕の手の上に乗せた。
【何なのコレ？】
【これは、ガザの実だ。魔力の回復に効果がある。食え】
【買ったの？】
【いや、そこの森で取ってきた】
【わざわざ取ってきてくれたの？　うわぁ、ありがとう】
【あ、いや、礼なんかいい】
僕が、お礼を言うと、マシューは赤い顔をしてもじもじしている。
【何？　僕何か変なこと言った？】
「おい宮本、お前がそんな殺傷能力のある笑顔なんかしてやるからだ。しまいに押し倒されるぞ」
それを見ていた先輩が、ぶっと吹き出しながらそう言った。うー、何考えてんだか、この先輩は。
　でも、真っ赤な顔をしているマシューのこと、ちょっとかわいいとか思ったりして……

　僕、ちょっとヤバいかもしれない。

僕、視力検査が必要ですか？

自分のそんな感情を振り払うかのように、僕はガザの実をがりっと大きな口で齧った。酸っぱい！　それも梅干しなんて目じゃないくらい目から星が出てきそうなくらいの酸っぱさで、思わず口が歪んだまま固まる。

「ふ、ふっはい！」

真っ赤な色からは想像できなかったその味に驚いて、僕は思わず噛まずに飲み込んでしまった。

【あ、ごめん。不味かったか？　俺、味は知らなかったもんで】

その様子に、マシューが慌ててそう言う。そうだよな、見るからに体育会系の（その割には非力らしいけど）マシューが魔法系の回復アイテムを食べることなんてないんだろう。よく、こんな実の事を知っていたなと思った。まぁ、こっちの方では食べなくても基本のアイテムなのかもしれないけどね。

【ううん、ちょっと（実はかなりなんだけど）酸っぱかっただけ。心配しなくて、えっ？……！！】

それに対して心配しないでと言おうとした僕は驚いた。目の前にいたマシューがいきなりかわいい女の子になっていたのだ。歳はたぶん、１０歳前後。同じ茶髪で碧眼なんだけど、髪は長くて緩やかにウエーブがかかっている。

【ど、どうした？　そんなに穴のあくぐらい見つめられると、いくら俺でも照れるぞ】

だけど、そう見えたのは一瞬で、そう言った彼は相変わらずいかついおっさんだった。

【ぼ、僕疲れてるのかな。一瞬マシューが女の子に見えた……】

【は？　どこをどう見たらこいつが女の子にみえるって！？　おっさん丸出しだろうが】

それに対して、先輩は息も絶え絶えに笑っている。マシューも

【昨日の仕返しか、俺のどこが女だ。しかも女の子？】
と、怒ってはいるが、どことなく焦っているような気もする。
「使ったことのない魔法を使って、頭いかれたんじゃねぇか？　もうこのまま飯食わないで寝ろ」
「えーっ、ご飯は食べますよ。僕ＭＰ切れで倒れたんですよ。食べなきゃ回復しませんよ」
先輩のご飯抜き発言に、僕は猛抗議した。でも、日本語のわからないマシューは心配そうに僕たちを見つめる。それに気づいた先輩は、
【心配すんな、大丈夫だよ。この食い気バカが簡単にくたばるか。飯抜いて寝ろってったら、怒ってんだよ】
と説明している。その説明も説明だけど、それに対して大きく頷いて納得するマシューもマシューだ。

うー、僕病人なのに……みんな大っキライだ！！

文系のガソリン捻出大作戦　1

しっかり食べてぐっすり眠った僕は、翌日すっかり元気になった。魔力が完全に回復したかどうかは全然判んないけど、何だか今朝はどんどんと力が湧いてくる気がする。あのガザの実って、実は強壮剤？　マシューがいきなりかわいい女の子に見えちゃったりするしね。

朝食を食べ終えた僕は、先輩から“悲しいお知らせ”を聞く。どうやらあの通称ポンコツ（正式には社用車だけど）のガソリンがもう残り少ないと言う。

【たぶん、次の町までは保たないだろう。だから、ここに置いていく】

自家用車は、ガソリンなければただの鉄くず……よりまだ性質が悪い。中途半端なところでエンストしてしまえば道を塞ぐし、車を知らないこの世界の人の好奇の目にさらされる。悪くいけば山賊あたりにバラバラに解体されてしまうかもしれない。先輩の言うことはもっともだけど、気楽に着替えなんかの荷物は載せておけるし、何より僕らは営業と言ったって普段は電車や車を利用しての間つなぎの徒歩だ。そんなに長い距離を歩いている訳じゃない。あまり急な山道なんかはないみたいだけど、次の町まで歩き切れるのか？

【仕方ないかぁ……】

僕はそう相槌を打ちながら、ふと道端の屋台に目が行った。その屋台は、軽く干した魚をフリッターにして売っている。

「宮本、お前朝あんなに食ったのに、まだ食うつもりか？」

屋台の揚げ用の大鍋を凝視している僕に、先輩は呆れ顔でそう言ったけど、僕はそれに返事をせず、逆に店のおばさんに

【この揚げた後の油ってどうされるんですか？】

と聞いた。するとおばさんは、

【えっ、コレ？　捨てるだけだけど。カスは肥料にもなるけど、油

は使いようがなくっていつも困るのよ】
頭を抱えるようなポーズをしてそう答えた。
【じゃぁ、僕がソレ、いただいていいですか？】
【持っていってくれれば、こっちも助かるよ。そこの樽がそうだから、好きなだけ持ってきな】
おばさんはそう言って、路地の隅に置いてある樽を指差した。
【じゃぁ、樽ごと頂いていきます】
【樽ごと！？　いったい何に使うんだい。言っとくけど、もうそんなのじゃ何も食えるもんは揚げられないよ】
【別に食べませんから、大丈夫です】
驚いてそう言うおばさんに、僕は笑顔でそう答えると、
【さぁ、樽をひっくり返すのを手伝ってください。転がしていきますよ】
と、先輩とマシューに言った。先輩は慌てて
「お前、まさかこれをあのポンコツに入れるつもりじゃねぇだろうな」
と言った。
「ええ、そのまさかです」
僕は、先輩にそう言うと、先輩は憮然とした表情で
「確かにそういう車が一時話題にはなってたが、あれはソレ用に改造してるはずだ。お前、完全に壊す気か？」
と返す。それに対して僕はマシューに、
【マシュー、ここから王都グランディーナまではあと５０マイル（８０ｋｍ）くらいって言ってましたっけ】
と聞くと、マシューは
【ああ、あと町３つだからそれくらいだろうな】
と言った。
「何もそのままで入れるつもりはないですよ、先輩。まぁ見ててください」
僕はそう言って、首をかしげながら樽を押している二人の男の前を

鼻歌交じりで先導していった。

文系のガソリン捻出大作戦　2

車の前まで樽を運んでもらった僕は、その樽を凝視し、中身だけに集中する。
「よし、ロックオンっと」
「何をやるつもりだ」
「先輩、石油っていうのは、太古の生物が化石になって液状化したものですよね。僕、文系だから詳しくしらないですけど」
「は？　俺も文系だしよく分かんねぇけど、そうだったかな」
「じゃぁ、それ再現しちゃえば良いんですよ」
「再現って……」
どうやったら再現できるってんだ？　と頭の中に疑問符を一杯蓄えているのが丸分かりの先輩と、日本語で会話しているので、意味が分からず（もっとも英語で説明したってこの世界のマシューには内容が理解できるとは思えないけど）僕の出方を見守っているマシューを後目に、僕はもう一度樽の方に向き直って、
＜汝その営みを止め、石となれ。Ｓｔｏｎｅ！＞
と、中身を石化させ、
＜Ｐｒｅｓｓ＞
と圧縮させる魔法を発動させる。それから、
＜時の流れよ、汝の中で光陰の如く駆け抜けよ。Ｓｔｉｌｌ！＞
と、樽の中身の時間だけを一気に進ませた。
「さてっと、一億年ぐらい進んだかな」
「一億年！！」
「先輩、中身が液状化してるか確かめてください」
僕は一億年という途方もない数字に驚いている先輩にそう指示した。
先輩は、
「宮本の癖に、俺に命令なんかするな」
と言いつつ、素直に僕の指示に従う。樽の栓を抜くと、嗅いだこと

のある揮発性の香りがあたりに広がった。
「う、ウソだろ？　ホントにガソリンが出来てんのかよ」
「じゃぁ、入れましょう」
僕はそう言うと、車のガソリンタンクの栓を開いて、高く手を挙げると、
＜汝その重さを天使の羽の如くし、我の手の動きに従え。Ｍｏｖｅ！＞
と唱えると、樽は軽々と空中に浮き、自分からガソリンタンクにその中身を注ぎ入れた。こぼれてしまわない程度で僕は手を下におろす。樽はゆっくりと元の位置に戻った。
「はぁ、終わった」
その途端、達成感と共に、急激な疲労が襲ってきて、僕はその場に膝をついて崩れた。
【ビ、ビク！】
そこでかかっていた魔法が解けたかのように、今まで固まっていたマシューがものすごい勢いで駆け寄ってきた。
【ねぇ、大丈夫？　頼むから無茶なんてしないで！】
と、涙目で叫ぶその声は、いつもの低い声ではなく、高く透き通ったかわいい声だ。
【マシュー、やっぱ、かわいい。でも、その顔で、オネエ、言葉は、ちょっと、キモチ悪い、かも】
それに対して僕は肩で息をしながらそう言ってグッジョブポーズで微笑んだ。目がかすんで体が傾ぐ。
　その時、いきなり僕の唇に何かが触れた。強引に口に押し込まれる。えっ、まさかマシューが？　キス？？　と思った瞬間、目も覚めるような酸っぱさが広がる。
　それは、
【誰がオネエだ。ごたごた言ってないで、コレを食え！！　死んじまうぞ】

と言いながら、真っ赤になって怒っているマシューが手にしている
ガザの実だった。

文系のガソリン捻出大作戦　3

【まだ持ってたの？】
僕は酸っぱさで口を曲げながらそう聞いた。
【ああ、一つでもいくつでも手間は変わらんだろうが】
そりゃそうだろうけど、どうもこの強烈な酸っぱさは慣れない。『良薬口に苦し』とは聞くけど、『良薬口に酸っぱし』なんて反則技だ。まぁ、一晩ですっかり回復してまた魔法が使えたんだから、かなりの妙薬だってことは認める。でも、脳まで痺れる酸っぱさはどうにかしてほしい。
おかげで何とか倒れずに済んだんだけどね。

せっかくガソリンを満タンにしたんだから、一気にグランディーナまで行こうと言った僕に、マシューは、
【王都は都会だ。こんなもんどこにも隠しておく所がない。リルムの町でもそうだったんだ、欲に駆られた連中にまた狙われるぞ。一つ手前のガルダモで降りて歩こう】
と言った。僕はそれに対して、ため息を一つ落として、
【そして、マシューは一人で行くんですよね、違う？】
と返す。マシューの肩が図星という感じで揺れる。
【俺には　……】
【大事な手紙を運ばなきゃいけないってことは解ってる……】
そして僕が言おうとしていることを聞きもしないで、
【解ってない、ビクは全然判ってない！　俺の正体も知りもしないでのこのこ付いて行こうなんてするな！！　それに、お前にはコータロがいるだろ。コータロはコータロの考えがあるだろうが】
と怒鳴リ気味に先輩に尋ねる。それに対して先輩が、
【いや、俺は別にマシューとグランディーナに行くのには異論はないぞ。大体、この世界じゃ右も左も判りゃしないしな。ってことは、

俺たちはどこに行こうが何をしようが自由ってことだ。それに王都ならひょっとして俺たちが元の世界に戻る方法を知ってる奴もいるかもしれないしな。俺たちにとっても全くの無駄足じゃないと思ってるんだがな。それとも、お前の方が一緒に行ってまずい理由でもあるのか？】
と聞き返すと、
【い、いや……まずいことなんて……ない】
と、なんだかしどろもどろで答えた。
【じゃぁ、問題ないだろ。『袖擦り合うも多生の縁』ともいうし、な、宮本】
【はい！】
ニヤリと笑いながらそういう先輩に、僕が元気に返事をする。それから、先輩が少し声をひそめて、
【それにな、こいつを敵に回したら怖いぞ。本気で怒らせてあの『一億年』の魔法なんかかけられてみろ。一瞬で塵だぞ】
と付け加えた。それを聞いたマシューはぎょっとして僕を見る。そして、ぼそっと
【そうだよな、魔女様を怒らせると禄なことがないよな】
と、つぶやく。次の瞬間、
【誰が魔女様だって？】
と薄笑いする僕に、二人は完全に固まった。でも、
【冗談はそれくらいにして、早く行きましょう】
と、言って一歩足を出したところで僕は目の前が真っ暗になってその場に蹲る。結局、二人に支えられて車に乗り込む始末だ。
　これじゃ、メガンテを連発するミニデーモンと変わらない……かも。

王都へ　1

やがて、僕らの前にグランディーナの城郭が見えてきた。お城だけではなく、町自体も堀で囲まれていて、その端には警備の兵が常駐している。マシューが言うようにのんきに車で乗り付けられる雰囲気ではない。よくよく考えてみれば、城下町にそう易々と入れるようではそれこそ問題なのだ。

僕たちは街道筋の外れに車を置いて歩き始めた。車に乗っている間に僕はマシューから口にねじ込まれたガザの実を身震いしながら完食してはいたけど、たかだか2～3時間のインターバルでは失ったダメージは回復しておらず、足下はおぼつかない。本当なら肩をかしてもらう所だけど、マシューも先輩も背が高すぎてそういう訳にもいかず、僕は蝉みたいにマシューにしがみついて歩いた。何故マシューかと言えば、先輩にそんなことをしたら、絶対になぐられると思うから。

だけど、町に入るための跳ね橋の手前の所で、僕らに突進してきた一団があった。ちゃんとこの世界のトレンドに着替えてあるんだけどな、それでも『不審者』がバレた？

思わず三人で顔を見合わせる。そして、半ば引き気味の僕たちの前に息を切らせながらやってきた老人は、先輩の前で膝を折り、

【殿下、殿下、よくぞご無事で。フローリア姫様が到着されてもお帰りにならないので、心配しましたぞ】

と臣下の礼をとった。で、殿下！？　電化じゃなくって？

（もっとも英語じゃ全く違う単語なんだけど）

老人はポカンとしている先輩にお構いなしに、今度は立ち上がって僕の手を取ると、

【セルディオ卿もお役目ご苦労様でございました。はて、そこの御仁は……】

握手を求めながらそう言う。えっ、僕も誰かと間違われてるの？

その中でマシューだけがそっくりさん？　がいないらしく、老人が胡乱な表情で彼を覗き込む。それに対して、マシューが
【わ、私はガッシュタルトのマシュー・カールと言う者です。フローリア姫に火急の文を届けに参りました】
つっかえながら老人に挨拶をした。
【なんと、ガッシュタルトのお使者であられるか。私め、このグランディール王国の家令を仰せつかっておりますクロヴィスと申します。さぁ、殿下、陛下も心配されておられます。一刻も早くお城へ】
と、先輩を促す。
「お、おいここは付いて行くべきなのか？」
それで慌てた先輩がこそっと僕に耳打ちをする。
「とにかく、マシューが手紙を渡すまでは、このまま付いて行った方が良いんじゃないんですか？　でないと、マシューまで疑われて、手紙届けられなくなりそうです」
「分かった」
僕の答えに先輩は頷いてから、クロヴィスさんに続いて、城下町に入って行く。僕もそれに続いて歩きだしたけれど、まだ体に力が入らなくてマシューに寄りかかってゆっくりしか歩くことができない。それをクロヴィスさんに見とがめられた。
【やっ、これはセルディオ卿、いかがなされました。】
【あの、えっと、これはガス欠……いえ、ちょっと……】
ガソリン作ったから電池切れですなんて言えないしなぁ。僕が答えられずにもじもじしていると、
【長旅で体調を崩されましたか。それは大変】
クロヴィスさんは勝手に体調不良と判断して（この人ホント自己完結型だよねぇ）、一緒にいる騎士らしき人に目で合図を送る。
すると、見るからに屈強な男の人が、
【失礼します】
と頭を下げると、いきなり僕をお姫様だっこして歩き始めた。

王都へ　2

【あ、大丈夫です。僕、ちゃんと自分で歩けますから】
男が男にお姫様だっこされているというとんでもなく恥ずかしい状況に僕は真っ赤になって抗議したが、だっこしている方の騎士は顔色一つ変えず、粛々と歩みを進めていく。
【ねぇ、降ろしてって言ってるでしょ！】
そして、なおも抗議を続ける僕に、少し前を歩いていた先輩がいきなり僕の方に向き直ると、
【そんなに気を使うな、セルディオは私を守るためにちと力を使いすぎた。ここまで戻ってきたからにはもう案ずることはないではないか。陛下の御前までは楽をさせてもらえ】
と言った。げっ、いきなり王子なりきりですか、先輩。確かに、みんなのためにガソリン作って力使い果たしましたけどね。そんな迂闊な発言して、もし偽物だってバレたらどうするんですか！　僕の顔が恐怖でひきつる。それを見た先輩はつかつかと僕の耳元まで戻ってくると、みんなに分からないように日本語で、
「こらっ、王子のフリしろってったのはてめぇだろうが。とにかく今はなりきって、お前の体力が回復し次第何か理由付けてばっくれりゃ良いんだよ。今のお前の体力じゃ到底逃げきれないからな。がんばってそのなんたら卿になりきれ！」
と言ってから、
【本当に、私に忠誠を尽くすのは良いが、自分の身も労ってくれよ】
とわざと大きな声でそう付け加えた。
【では、このように帰還が遅れたのはやはり殿下に……】
クロヴィスさんがそれを聞いて慌てて先輩に尋ねる。
【ああ、命も危うかったが、セルディオの力で何とかな】
調子に乗って先輩は王子の演技を続ける。それにしても、セルディオさんのキャラも知らないのに、そんなテキトーなこと言って良い

わけ？　でも、その発言に、みんながおぉという感嘆の声が挙がり、クロヴィスさんがにこにこしながら、
【殿下の危急を救われたのですか。さすがは希代の魔術師と謳われたお方。私も見込んだ甲斐があったというもの】
と返した。良かった。そのセルディオさんって言う人もやっぱり魔法使いらしい。顔が似るとキャラもにるんだろうか。ホッとした途端、全身から汗が噴き出す。
【陛下との謁見が終わられたら、一旦城で休んで行かれると良ろしいでしょう】
あ、セルディオさんは一応お城の人じゃないんだ。
　先輩さえ何とかできれば、僕は体調さえ回復したらここを出られる。僕は少しは希望を持てる展開に胸をちょっとなで下ろして、ふとマシューの方を見た。マシューの方も僕を見ていたらしく目があったが、何とも複雑そうな顔をして目を逸らした。マシューは日本語が解らないから、先輩は本当は王子様で、騙されていたとでも思っているのだろうか。
　マシューに本当のことが説明できないまま、僕たちはグランディール城内へと入っていった。

謁見の間

城に入った僕たちにまるで卒業式みたいに両側に人の垣ができる。卒業式と違うのは彼らのほぼ全員が男性で、拍手の代わりに臣下の礼をとっている所だろう。

人の波を進んで、広い部屋（謁見の間）に入ると、僕はやっと床に降ろしてもらえた。そしたら、マシューがさりげなく、僕に脇（肩じゃないのが本当に悲しいけど）貸してくれた。王様に謁見するのに座ったりはできないもんね。

すると、王様が謁見の間につく前に、一人の女性が入ってきた。彼女はまっすぐ先輩のところに来て、

【コータル様ご無事で何よりです。本当にわたくし、心配いたしました。良かった】

と言った。王子様の名前ってコータルなの？　僕はびっくりする反面、マシューが幸太郎という名前をコータルと言ったことに納得した。こっちではコータルという名前が結構あるのかもしれないと。

だけど、その女性を見てまたびっくりする。

「か、薫！」

先輩が思わず素っ頓狂な声を上げた。だって、そこにいたのは総務の谷山先輩のそっくりさんだったからだ。

谷山先輩というのは、総務の女子社員で、先輩と売り上げの伝票のことなんかでつば迫り合い繰り返している、先輩とは犬猿の仲って感じの人だ。確か、谷山先輩のお祖母ちゃんがイギリス人で、どことなく日本人離れした顔（先輩はそれを『人間離れした顔』なんて茶化すけど）だから、この外人っぽい異世界集団にいても、僕らよりもっと違和感ないんだけれども。

そのとき、谷山先輩もどきの体が傾いだ。先輩がとっさに彼女の肩を抱いて支える。

【フローリア姫様、大丈夫ですか】

それを見てお付きの侍女が慌てて彼女に近づいたが、先輩はそれをやんわりと制して、そのまま彼女を抱いたままでいた。そうか、谷山先輩もどきが、ガッシュタルトからきたフローリア姫なんだ。状況から考えると彼女はコータル王子の婚約者みたいだから、ふらつく婚約者をさっさと侍女に預けちゃうのはまずいもんね。

【姫様は殿下が消息を絶たれてからほとんど眠っておられませんでしたから】

侍女がそう補足する。

【だって、わたくしコータル様ともう会えなくなってしまうのではないかと不安で……】

【もう心配しなくて良い。私はこうして無事だ】

それを聞いた先輩は、そう言って彼女の頭を撫で始めた。そんな先輩の顔を横目で見ると、先輩はものすごく照れくさそうで嬉しそうな顔をしている。その顔はとても演技だとは思えない。もしかして先輩、本当は谷山先輩のこと好きだったの？　いつもケンカばかりしているけど、よくよく考えてみればじゃれあっていたような……

「そっかぁ」

僕がぷっと吹き出してそう言うと、

「宮本、何を変な妄想してる」

と、先輩は横目で僕をにらんだ。僕は、

「何にも。あ、お姫様の手前、あまり日本語でしゃべらない方が良いですよ」

と返した。

　そのことで改めて僕の存在を思い出したみたいの（ホント、２人の世界だったもんねぇ）お姫様、

【セルディオ卿も、今度は誠にご苦労さまでした。あら、そちらの方は……】

とマシューを覗き込む。手紙を届けなきゃならないご本人登場で、しかもかなりの美人だから緊張しているのかもしれないけど、マシューは目を泳がせて明後日の方向を見る。

【ほらマシュー、ガッシュタルトからの手紙渡さなきゃ。本人が出てきたからって固まってどうすんのさ】
貸して貰っている脇を突っつきながら、僕はそう言った。日本語が通じるんだったら、彼の名誉のために日本語で囁いてあげたい位だ。
【手紙ですか？　お父様かお母様に何か？】
僕の発言を聞いてフローリア姫がものすごく不安そうな顔になる。そりゃそうだろう、婚約者がやっと戻ってきたと思ったら、今度は親が……なんてことになれば、マジで倒れるかもしれない。でも、マシューは手紙を取り出すどころか、ますます明後日の方を向く。
それを見たお姫様は、何かを気づいた顔になり、
【まぁあなた、なんて格甲をしているの？　正体をあらわしなさい！】
と、マシューに向かって一喝したのだった。
マシュー！　君ってば何？　実はラスボスだったとか言わないでよね。

謁見の間　2

フローリア姫に一喝されたマシューは唇をかみしめて立ち尽くしていたが、姫様が

【エリーサ！　分かっているのよ】

と言うと、マシューははぁっと大きなため息を吐いた後、それこそしゅるしゅるという擬音が聞こえてきそうな勢いで、どんどんと縮んでいき、あっと言う間に子供の姿になった。それは、僕がガザの実を初めて食べたときに見たあの少女だった。ガザ実を食べることで、一時的に魔力が上がって、マシュー（エリーサちゃんと言うべきなのかな）のかけている魔法を見破っていたのだろう。でも、僕は経験値が限りなくゼロに近かったから、一瞬だったんだろうな。

それに、日本語と違って英語は言葉尻で性別を特定するのは難しいし、僕にとっては外国語だからマシューの体格で低音の声音で話されたら、僕の頭は無意識のうちにそれを男言葉として認識していた。だから、マシューのことを本当は女の子だったなんて微塵も思わなかったのだ。

【お姉ちゃま、なんで分かっちゃったの？】

エリーサちゃんは、フローリア姫にふくれっつらでそう尋ねた。

【分からない訳がないでしょ、あなたが家出したってことはとっくにソルグが知らせてきてるし。あなたがお城を出て、向かうとしたら、私の所しかないだろうって、おじいさまもね】

【そう、バレてたの……それにしてもあのバカ烏、速すぎるよ】

フローリア姫の答えに、エリーサちゃんが舌打ちをする。

【あら、あなたが遅すぎるのよ。大体、空を突っ切って飛んでくる烏に、徒歩のあなたが勝てるわけないじゃない。途中からは、コータル様たちの馬にでも乗せてもらえたの？　先触れの者からは、あなたたちが歩いていたと聞いたけれど】

ソルグというのは、伝書鳩みたいなもんなんだろうか。烏だと、

届けるのは不幸の手紙みたいな気はするけどね。
　それはともかく、この世界の魔法使いが箒に乗って空が飛べるかどうか僕は知らないけれど、あの魔道書にも、空を飛ぶ項目はなかったし、飛ぶ魔法とかはないのかもしれない。
　と言うことは、この幼い少女はなりを大人に変えていたとしても、たった一人で車で何時間もかかる道程を行こうとしていたってことだ。
　パシンッ、次の瞬間、広い謁見の間に平手打ちをする音が響く。いや、正確に言えば響かせる。僕が、エリーサちゃんの頬を打ったのだ。
「なっ、宮本！」
【ビク！！　】
フローリア姫をお姉ちゃまと呼ぶのだから、エリーサちゃんは間違いなく隣国のお姫様。国際問題に発展しかねないその状況に、周りは一気に青ざめた。だけど、僕は怯まずに、
【エリーサ様、あなたは何という無茶をなさるんですか。魔法で大人のフリをしたからと言って、それはあくまでもフリでしかないんですよ。あのときもたまたま殿下と私が通りかかったからよかったものの、そうでなかったらどうなっていたことでしょう。そうなったときに、お悲しみになる陛下やお后様のことを考えなかったんですか！】
と言った。
【だって……】
【だってじゃないです。知り合って3日と経たないこの僕が、それを知ったらこんなに苦しいんですよ。何もなくて本当によかった】
僕はそう言いながらエリーサちゃんの頬を撫でた。すると、エリーサちゃんは泣きながら僕にしがみついてくる。やっとこで立っている僕はちょっとよろけたけど、何とか踏ん張って、彼女を抱きしめた。その様子に、安堵のため息がそこかしこからもれてくる。
【お、おっほん、そろそろ陛下が参られます。お控えください】

その時、奥の方から出てきた人が僕たちをちらりと横目で見てそう言った。僕は慌ててエリーサちゃんの身体を離し、臣下の礼をとって、王様を待った。

謁見の間　3

しばらくして奥の扉が全開になり、王様が徐に大臣やらお付きのものを大勢引き連れて現れて玉座に着いた。人々は概ね遅ればせながらの王子のご帰還に喜びと安堵の表情を浮かべている。でも、若干名そうじゃない者もいるようだ。特に大臣らしき小太りの中年のおっさんは、顔こそ笑ってはいるが、目が笑ってはおらず、なんとなく心の中で舌打ちしているのが聞こえてきそうな気がした。

【コータル、ようやく帰って参ったか。あまりに遅いので、無法者に襲われて命を落としたという者まで現れてな、心配したぞ。いくらこちらでの挙式がまだだからとは言え、セルディオとたった2人でなく、姫の馬車と同行する形で帰っても良かったのではないか？】

王様は先輩にそう言った。やっぱりフローリア姫は王子の婚約者だったんだ。王様の言ってることを考えると、一応、ガッシュタルトでの結婚式は終わっているみたいだけど。

【いいえ、今度のことは私が不注意だっただけのこと。そのためにセルディオを大変な目に遭わせてしまいました】

王様の労いの言葉に、先輩がさっきのクロヴィスさんへの発言とも辻褄を合わせるように報告する。

【そうだ、セルディオ、コータルの命を救ってくれたのだとな。このバルド、高い壇上からではあるが、心から礼を言うぞ】

【とんでもない。私は殿下に仕えるものとして、当然の責務を果たしたまでのこと。そのようなお言葉、もったいのうございます】

王様の感謝の言葉に、僕は低くしている姿勢をなお低くしてそう答えた。というより、一旦膝をついてしまったら、もう元に戻せなくなっているのもある。ホントのところをいうと、僕の額にはうっすらと脂汗が浮かんでいる。

【して、その美しい少女は？】

続いて、王様は僕の横でそんな僕の様子を心配げに頭を下げているマシュー改めエリーサちゃんに眼を向けた。
【ガッシュタルト王女、エリーサ様にございます】
僕の紹介にエリーサちゃんは、王様にお辞儀をした。その仕草はとても優雅で美しい。こんなにちゃんとしつけられている彼女があの大男マシューと同一人物だったなんて信じられない。
【ごめんなさい、お姉ちゃまのご成婚がどうしても見たくて、コータル様を追いかけて、強引に付いてきてしまいました】
ここにいる理由をそう言ったエリーサちゃんに、
【そうか、やはり小さくても女性は女性ということか。姫の婚儀をそれほどまでに見たかったか】
と、目を細める王様。でも、結婚式を見るために男になりすましてまで、たぶん、２００ｋｍ近い距離は歩かんでしょう、普通。本当は違う理由があるんだろうけど、そこは今聞けないし、これは乗った方が良い。
【謝るのは私の方です。遅れた分、一刻も早く城に戻ろうと、あなたを先にお送りせずに、連れ歩いてしまいました。その上、リルムの町では危ない目にも遭わせてしまいましたし、そんな私をあなたはわざわざガザの実を取りに行ってまで看病してくださったじゃないですか】
と、熱くエリーサちゃんを見る。
【殿下と姫様のご婚儀が終わり次第、ちゃんとガッシュタルトまで私がお送りしますからね 】
【セルディオ様……】
エリーサちゃんがうるうるの眼で僕を見つめた。これで、僕はこの城を出られる。先輩は……このままグランディールの王子様になってもらおう。
　たぶん、僕の推測では王子様とセルディオさんはもうこの世にはいない。もしいたら、今頃きっとお城に帰って来れなくても何らかの連絡はしているはずだ。それがないってことは……そう言うこと

なんだと思う。

【それでは、婚儀は明後日に執り行う。国中に触れを出せ】

一通り話を終えた後、王様は高らかに結婚式の日程を宣言した。しかし、その時、慌てて

【王よ、お待ちください。騙されてはなりませんぞ。こやつらは、殿下とセルディオ卿を騙る偽物でございます】

そう進言したのは、一人眼の笑っていなかった小太りのおっさんだった。

ラスボス登場……なのか？

【テオブロ、いい加減なことを言うでないぞ】
小太りのおっさん改めテオブロ（胡散臭いので、敬称略！）は眉にしわを寄せてそう言う王様に、胸を張ってこう言った。
【いい加減ではございません。よくご覧ください、殿下の髪や肌はもっと淡かったはず、セルディオはこれほど小さくはなかったと思いますぞ。
それに、こやつは殿下が襲われたのがリルムの町だと言っておりましたが、私がその報を聞いたのはトレントの森。話が違います】
大臣クラスの自信満々の発言に、騎士たちがさっと身構える。
　確かに先輩はちょっと染めていて真っ黒ではないけれど、それはあくまでも日本のビジネスライフにひっかからない程度の茶色だ。肌はこの色が生まれつきなんだから仕方ない。……にしても、どーせ僕はチビですよ！　改めて言うことないじゃないですか！！　でも、これで僕はこのテオブロって奴が王子とセルディオさんを襲った真犯人だとわかった。
【ふぅーん、テオブロさん、王子たちが襲われたのはトレントの森だった訳ね】
【そうだ、リルムの町ではないわ。トレントの森奥で殿下らしき者が魔物に切り裂かれていたと報告が……】
【なにっ、確かに、トレントの森と言えば街道沿いを行くよりは近道で、あの在のセルディオとならば行っても不思議はなかろうが、わしはその様な報告は聞いておらんぞ！】
テオブロの言葉に王様の声が裏返る。へぇ、セルディオさんってお城に住んでないとは聞いていたけど、森に住んでるんだ。いかにも魔法使いっぽい。
【へぇ、王様も知らないことを知ってるんだ、テオブロさんってば】
【何が言いたい！　わしは余計なことを耳に入れて王に心配をかけ

まいとだな……】
【ふふふ、確かに僕たちは本物の王子と魔法使いじゃない、日本って国から飛ばされてきた、なんてことない異世界人ですよ】
ちょっぴり歯切れの悪いテオブロの答えに、僕は軽く笑いながらそう返す。
【び、ビク！】
「宮本、自分で言ってどうする！」
その答えに、エリーサちゃんも先輩も一瞬で青ざめた。
【ほほう、取り繕ってもボロが出ると解ってあっさり認めおったか。この偽王子たちをひっ捕らえよ！！】
テオブロはしてやったりという表情で騎士たちにそう命じた。だけど、それがウソだったら、とんでもない不敬罪だし、本物のセルディオさんは『希代の魔法使い』と呼ばれるくらいの人だから、何か術を仕掛けてくるんじゃないかと思って騎士たちはゆっくりしか近づけない。
【何をしておる、早く捕らえぬか！】
【ちょっと待ってくださいよ。確かに僕たちは本物ではないから、王子様たちが襲われた状況は全く知らないです。
でも、あなたは僕たちが偽物だって最初から判っていた。どうしてですか？　本物の王子様はもうこの世にいないと知ってる、そういうことですよね】
【な、何が言いたい！】
【あなたが王子様がいないと断言できるのは、あなたが……いえ、あなたが直接手をくだしたのでは勿論ないでしょうが、あなたの手の者が王子様たちを闇に葬った、そういうことことなんじゃないですか？】

そして僕は……

僕の爆弾発言に謁見の間の空気が一瞬固まる。

【えい、ええい、何を言うかと思えば！　王子になりすますことがかなわぬと知れば、今度はわしを犯人扱いにするなど、言語道断。わしを王弟テオブロと知っての狼藉か！！】

テオブロ一人が沸騰した薬缶みたいになってがなり散らすけど、騎士はぴくりとも動かない。そっか……テオブロは王様の弟な訳ね。じゃぁ、王子がコータル様一人なら、それで次の王様は自分のモノって訳だ。充分な動機あり過ぎで、僕と彼の言うことのどちらが真実か量りかねているのだろうし、騎士は基本的に王様に従うもの。テオブロは王様じゃないもんね。

【な、何をしておる。この大悪人を早く捕らえぬか！】

【テオブロよ……お前よもやコータルを手に掛けたとは言うまいな】

その時、王様が沈痛な面もちでテオブロにそう言った。

【王よ、王はこの血を分けた弟の言うことより、素性も分からぬ輩の言うことを信じるおつもりですか！】

【わしとて信じとうはないが、かねがねあまり良くない噂も聞いておるのだぞ】

【……】

王子様の暗殺計画は今回に始まったことじゃないらしい。テオブロは、王様にそう言われて、拳を握りしめ、唇をかんで黙っていたけど、

【なぜじゃ、なぜわしの言うことを聞かん。もういい、ならばわしがこの大罪人を成敗してやる！！】

と、逆上し、先輩にいきなり切りかかった。ダメだ、王子様だけじゃなくって、先輩まで殺される！　僕は、やっぱり自分のスキルなんて一切無視して、テオブロと先輩の間に割り込んで……

僕はテオブロに、あっさりばっさり切られた。スローモーションで視界が横に流れていく。その時に床に飛び散った血が見えて、意外と血ってよく飛ぶもんだなと思う。
切られたところは痛いと言うより熱かった。それに、心臓がふたつになったみたいに、切れたところから動悸を打つ。それくらい血が流れているんだろうか。一旦、床に転がってしまうと、頭を上げることすらできなかった。
その後、なおも先輩を切ろうとするテオブロは、王様が騎士に取り押さえるよう命じて、あっと言う間に取り押さえられた。テオブロが、
【なぜわしがこのような仕打ちをされねばならん。罪人はこやつらじゃ！　離せ、離さぬか！！】
と、大声で叫びながら暴れるのを数人ががりで抑えて謁見の間の外に連れ出されていくのが見えた。

「宮本、しっかりしろ！」
騒動が収まったあと、先輩が慌てて僕を抱き起こす。すると、僕の目に、超どアップのエリーサちゃんの泣き顔が飛び込んできた。
【エリーサちゃん、せっかくの、ドレス、汚れちゃうよ】
僕はそう言って、彼女の頬の涙を掬った。
【ビク！　ドレスなんてどうでも良いよ。ねぇ、あたし　お父様の言う通り、ビクのお嫁さんになる。だからお願い、死なないで！】
？　なんでお父様の言う通りにするとどうしてエリーサちゃんが僕と結婚しなきゃなんないのか、その辺が全く分からない。でも、切られてすぐはとっても熱かった身体は、ずいぶんと血が抜けてしまったのだろうか、今度は急激な寒さがやってきて、ふるえで口が上手く動かくなってきはじめた。
【なに？　お嫁さん】
というのがやっとで、それもものすごく小さい声しか出なかった。

【ヨシャッシャ、ヨシャッシャ……】
すると、エリーサちゃんは懸命に美久と発音しようとした。それを聞いて先輩が、
【一度に言おうとすると発音できないんなら、区切ればいい。ヨシ、ヒサ。さぁ、言ってごらん】
と助け船を出す。
【ヨッシー、ヒッサ……ヨッシー、ヒッサ】
エリーサちゃんは一文字ずつ区切って僕の名を呼ぶ。でも、ヨッシーなんていったら長い舌で卵を飲み込まなきゃならなくなりそうなんだけどなんて、つっこみを脳内ではいれつつ、それでもかわいいから許すと僕は思っていた。
【な…に】
【好きだから、大好きだから！　しないで、お願いずっとあたしのそばにいて！！】
　実は僕も君が好きだよ。君がいかついおっさんのときから、たぶん。自分が同じ男に惹かれる意味が解らなくて戸惑ってしまったりもしたけれど、きっと僕はマシューの中にちゃんと君を見つけていたんだと思うよ。
　だけど、僕はその想いを彼女に伝えることはできなかった。『Ｉｌｏｖｅ　ｙｏｕ』と言った言葉は、荒い自分の息にかき消されて、そして……僕の意識は深い闇の中へと沈んでいった。

い、生きてるっ！！

僕は、闇の中でセルディオさんに会った。闇の中なのに、セルディオさんだけが、ぽかっと浮かび上がっていた。
そして、確かによく似てはいたけれど、魔道士が着るようなローブを纏った彼は、僕より数段落ち着いて見えた。
「美久、巻き込んだ上に痛い思いまでさせてしまって、どうもすいませんでした」
僕は彼が日本語で語りかけてきたので、驚いた。ああ、でも、ここは天国なんだろうから（いや、真っ暗だし、もしかしたら地獄？悪いことはしてないつもりなんだけど）そんなのもアリなのかなと思う。僕は、
「セルディオさん、あなた方の仇はとりましたよ」
と言った。そしたら、セルディオさんは、くっくっくと笑うと、
「仇ですか、じゃぁ、そう言うことにしておきましょうか。では、私はこの辺で」
と言ってボワーンと消えた。なんかどこまでも魔法使いっぽい人……
そして、僕はその途端、闇の中からいきなり光の中に放り出された。あまりの眩しさに、一旦目を開けたもののまた閉じなきゃならないほど。そして、次の瞬間お腹に強烈な痛みが襲ってきた。テオブロに切られたところだ。生きている、僕まだ生きているんだ！！
僕が再度目を開けると、そこは謁見の間ではなく、白い壁に囲まれた、小さな部屋だった。僕はベッドに寝かされていて、隣のベッドには先輩が。その手をフローリア姫が
心配気に握っている。テオブロはもう捕まったはずなのに、どうして先輩までベッドに寝かされているんだろう。
「せん……ぱい……せん」
僕が先輩を呼ぶと、フローリア姫は弾かれたように、僕の方を見て、
「宮本君、気が付いたの！！」

と日本語で言った。あ、じゃぁ、この人はフローリア姫じゃなくって、谷山先輩？　そう思って、先輩の方をもう一度見ると、先輩には、あっちではお目にかかれそうもない管やら機械に囲まれている。ああ、ここは日本だ。僕たち、戻れたんだ。そう思ったら痛みは尚更現実化してきて、たまらずに、

「ううっ」

と僕は呻き声を漏らした。その声を聞いて、

「痛いの？」

と尋ねる谷山先輩への返事の代わりに、僕は切られた所を庇うように身をすくめた。その様子を見て彼女があわててナースコールを押す。

　程なく、病室に看護師がやってきて、僕の着ていた布団をひっぺがすと、

「大変だわ！」

と叫んでだだだっとまた慌ただしく病室を飛び出していった。それからしばらくして、その看護師は他の看護師やら医師やらを引き連れてどやどやと戻って来た。

「大変だ、しかし、何で今更縫合部分が外れたのか。とにかく、緊急手術の用意！！」

僕を看た医師が、首を傾げながらそう言う。縫合部分？　僕はこっちの世界でも怪我をしてたのか。痛みでぼんやりとしてきた頭でそう思った僕は、こっちの世界に戻ってきたばかりだというのに、またすぐ麻酔で眠らされてしまった。

夢のあとさき　1

僕は眠らされても、さっきまでの世界に行くことはなかった。どうでも良いような取り留めのない、ホントに夢らしい夢を何個か続けて見てまた目覚めた。その時、

「お兄ちゃん、大丈夫？」

と僕の顔をのぞき込んだのは……なんとエリーサちゃんだった。彼女を見て、あ、僕はまた異世界に戻ってきてしまったんだと思って嬉しくなってしまっていた。現実逃避といわれても仕方ないかな。

「お兄ちゃん、本当にごめんね」

枕元で、エリーサちゃんが申し訳なさそうに頭を下げる。

「エリーサちゃんがどうして謝らなきゃならないの」

そうだ、エリーサちゃんが謝る必要なんてない。本当は大男に変身できる位の魔女だった訳だから、もしかして魔法を駆使して僕を強引に呼び戻しでもしたとか？　でも、彼女から帰ってきた答えは僕の予想とは全く違っていた。

「英梨紗が道路に飛び出したから」

「道路に飛び出した？　エリーサちゃんが？」

グランディーナのどこの道路に飛び出したからって、どうして僕に叱られなきゃならないと思うんだろう。あ、隣国まで家出したことで、平手打ちにしちゃったんだっけ、僕。あれが、トラウマにでもなってる？

ううん、なんか違う。さっきから彼女はエリーサじゃなく、エリサって言ってるし、僕をビクじゃなくお兄ちゃんと呼んでいる。それに、よくよく考えれば（よくよく考えてみなくても）彼女がしゃべってるのは紛れもない日本語。僕や先輩や谷山先輩のそっくりさんがいたように、エリーサちゃんのそっくりさんもいたって訳か。もっとも、僕の側から言えばエリサちゃんのそっくりさんがエリーサちゃんというのが、正しいのだろうけれど。

あの日僕たちは、アウトドアでの調理器具を展示するために、幕張に行く予定だった。先輩がセリカちゃんに乗らなかったのは、何のことはない、見知った道だったからで、そもそも迷子にもなってなんかいない。

で、真相は、会社近くの道路に飛び出してしまったエリサちゃんを避けようとして先輩がハンドルを切り損ね、ガードレールに激突した、そういうこと。

しかも間の悪いことに、僕たちはあの時、ロイヤリティーのチ〇ッカマンを大量に乗せていた。事故後そのチ〇ッカマンに引火し車は大破。僕たちは瀕死の重傷だったという。

「エリサちゃんはどこも怪我してないの？」

「うん」

「なら、良かった。謝ることなんて何もないよ。僕は君が無事でいてくれればそれで充分だよ」

僕はそう言って、エリサちゃんの柔らかくて細い髪を撫でた。エリサちゃんの頬がぽおっと薔薇色に染まる。

「でも、どうして、お兄ちゃんは英梨紗の名前を知ってるの？　最初変なとこ伸びてたけどさ」

そして、不思議そうにエリサちゃんはそう聞いた。

「うん？　何でかな、エリサちゃんの夢を見てた。君が僕をここに連れて帰ってくれたんだよ」

「ひぇ？？」

当然だけど、エリサちゃんは意味が全く解らないだろう。でも、僕はこの展開に運命すら感じているんだけどね。夢の中で言えなかった『Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ』をきっと言えると確信したから。

「僕のことは、夢の中みたいにビクって呼んでくれる？」

そう言った僕の言葉に、エリサちゃんは薔薇色を通り越して、茹で蛸になりながら、ブンブンと首を縦に振った。

僕の耳に、相変わらず眠ったままの先輩が夢の中で言った、『お前、しまいに押し倒されっぞ』の言葉が聞こえた気がした。

先輩、僕このままじゃ押し倒される前に、押し倒しそうですけど。
それって、犯罪……ですよね。

夢のあとさき　2

僕の傷は順調に回復していった。先輩も傷は大分良くなっていて、もう命の心配はないという。だけど、先輩は僕が目覚めても一向に目覚める気配がなかった。

とんでもない大事故だったにも関わらず、僕にも先輩にも脳に損傷はないという。なのに目覚めることがない先輩……僕はある一つの思いにどんどんと心が苛まれるようになっていった。

僕たちがいたあの世界はもしかしたら僕の夢の世界なのではないだろうか。そして、本来なら先に先輩がテオブロに切られてこちらの世界に戻り、それから僕が戻る。あるいは、僕が本当はもうこっちの世界には戻ることができなかったのかも。

だけど、僕は先輩を押し退けてテオブロに切られた。そのために先輩をあっちの世界に閉じこめてしまったんじゃないのかと。

長い間眠ったままの先輩の肌は抜けるように白くなり、少し痩せてしまっている。でも、まだちゃんと生きていることを主張するかのように髭が少しずつ伸びる。その髭をまるで壊れものを扱うように優しく丁寧に剃る谷山先輩を見ていると、僕は胸が詰まりそうだった。先輩、こんな戦闘不能の状態から早く抜け出してきてくださいよ。マシュー曰く、先輩は勇者様なんでしょ？

先輩の髭を剃り終わった後、谷山先輩がぽつりと、

「宮本君、どうしたら鮎川は目を覚ますんだろうね」

と言った。

僕はＲＰＧの戦闘不能なら、死者蘇生の呪文を唱えればそれで良いのになと思った。実はあの魔道書を最初に見た時、ゲーマーの僕はそこを真っ先にチェックしていて、その詠唱文言もちゃんと覚えていた。だけど、現実世界でそれが効くとは思えないし、死者蘇生の魔法は、ランク的に最上級に属するはずだから、よしんば僕にまだ魔力が残っていたとしても、全然ＭＰ不足だろう。でも、あっち

の世界では超初心者の僕が結構ぽんぽんと上級魔法唱えていた。後で、ぶっ倒れるおまけ付きだけど。それでも、唱えてみるだけの価値はある？

もし効いたらガザの実のないこの世界では、僕の方が今度は寝たきりになってしまうかもしれない。ちょっとそんな考えが頭を過ぎって、僕はかすかに震えながら谷山先輩に、

「谷山先輩、僕ね、眠っている間すっごくチートな魔法使いだったんですよ。案外死者蘇生の魔法を唱えたら、復活したりして」

とわざとおどけてそう言った。

「ぷぷっ、なにそれ。チープなコミックスじゃあるまいし」

案の定先輩はそう言って笑った。

「でも、やってみる価値はありますよね。何もやらないよりは良い」

僕はそう言って、やっとくっついたばかりのテオブロに切られた傷を庇いながら立ち上がり、背筋をピンとのばすと、

＜黄泉の世界を統べるものよ、我の声に応えてこの者の魂を現し世に呼び戻せ、Ｒｉｓｅ ｄｅａｄ＞

と高らかに詠唱した。

先輩の頬が上気したような気がした。でもそれだけで、先輩はやっぱり目を覚まさない。当然と言えば当然だけど、魔法なんてありはしないのだから。

「ヤダ、それもしかしてラテン語？　イヤに本格的じゃない」

谷山先輩が目を丸くした後、バカ笑いする。ひとしきり笑った後、小声でありがとうと言って、

「じゃぁ、お姫様がキスでもしたら、目覚めるのかしら。眠り姫ならぬ、眠り王子は」

と、言った。彼女は全くの冗談のつもりだったんだろうけど、僕が

「それ、アリかもしれませんよ。僕の夢の中では谷山先輩はお姫様で、先輩は王子様だったんです」

と、マジ顔で返すもんだから、ちょっぴり引き気味だったけど、

「じゃぁ、やってみよっか。やらないよりはマシかもね」

と、笑うと、照れながら先輩に顔を近づける。そして、二人の口びるが重なったとき……

窓も扉も全く開いていない病室に一陣の風が吹いた。驚いて、窓を確認した僕の耳に、

【う……ん、フローリア愛してる】

と言う先輩の声が聞こえる。ギョッとして先輩の方をみると、先輩はがしっと谷山先輩を腕の中に閉じこめて、キスをしている。谷山先輩が突然の事態にあたふたしていた。

唇が離れたあと、谷山先輩に、

「あ、鮎川っ！　いきなり舌を入れてくるなんて、どういう了見？　ホントはいつから意識があったの？　このエロ親父！！」

と言われてグーで殴られたことは言うまでもない。

夢のあとさき　3

「フローリア」
「はい？」
先輩がお姫様を呼ぶ声に、谷山先輩は疑問形で語尾を若干上げて応える。
【フローリアってんだぞ】
先輩は今度は英語でそう聞く。
「だから何だってのよ」
谷山先輩はそれに対して若干ウザ気にそう返す。
「お前薫だろ、何返事してんだよっ！」
「鮎川こそ何言ってんのよ、フローリアは私の英名！　薫は日本名！！」
「は？　英名とか日本名とかセレブなこと言ってんじゃねぇよ、薫のくせに。お前、ばーちゃんがイギリス人なだけだろ」
「イギリス人だからよ。私ね、教会で幼児洗礼受けてるの。フローリアはその洗礼名なの！　だけど鮎川がなんでその名前を知ってんの？」
「俺の夢の中に出てきたお前にそっくりな女がその名前だったんだよ」
谷山先輩の思わぬ発言に、先輩は舌打ちをしながらそう答えた。えっ、じゃぁ……
「もしかして、先輩も僕と同じ夢を見てたんですか？」
「僕と同じ夢って……お前、王都グランディーナとか言うとこに行ったか？」
やっぱり、先輩もグランディーナにいたの？
「はい、車ごとおっこちちゃいましたよね」
「スライム食ったか？　しかも俺の分まで」
「はい。でも、ちゃんとスライムプリンって言ってくださいよ。な

んかそれじゃ僕がスライムのおどり食いをしたみたいじゃないですか」
「似たようなもんだ。じゃぁ、マシュー・カールは？」
「はいっ！エリーサちゃんですよね」
やっぱり、僕たちは同じ異世界にいたんだ！
「俺と同じ夢見てたってのか？」
首を傾げながら先輩がそう言う。
「そうです。二人で同じ夢をみてたんですよ！」
「信じらんねぇ。まぁ、そこまで一緒なんなら、同じ夢だったのかもな」
そして、先輩は半信半疑ながらそのことを認めた。
「そうですよ。僕が目を覚ましても先輩ずっと目を覚まさないし、もしかしたら同じ夢の中にいるのかもって、戦闘不能を治す呪文唱えたんですけど、それでも起きてこないし、途方に暮れてたんです。そしたら、谷山先輩が『王子ならお姫様のキスで目覚めるんじゃないか』って。いやぁ、ホントにお姫様のキスが効くとは思いませんでした」
でも、先輩の生還劇を喜々として話す僕に先輩は、
「余計なことしやがって」
と言った。
「は？」
「お前が余計なことしなきゃ、今頃はその夢の世界で、お姫様と甘い新婚生活の真っ最中だったんだ。何が悲しくてこの凶暴女のキスで戻らなきゃなんねぇんだ」
「何ですって！！　宮本君、あんたまだ魔法使える？　お姫様として命じるわ、こいつを瞬殺して」
先輩の凶暴女の発言に谷山先輩は思わず暗殺（あ、大っぴらに殺すのは暗殺とは言わないのか）命令を僕に下した。
「しゅ、瞬殺って、物騒な。でも、谷山先輩すごく心配してたんですよ。それなのに、そんな言い方するなんて。海より深く反省して

ください」
と、言いながら僕は手を前に繰り出す。
「お、おい何の呪文をかけるつもりだ。宮本？　まさか、あの『一億年』とか言わないでくれよ。ホント、ゴメンあやまるからさ」
その動作に、先輩は完全に怯えきっている。あれは夢の中のことで、僕が現実世界で魔法が使えるはずもないのに。でも、事故からの谷山先輩の気持ちを考えると、ちょっとお灸をすえないとねと僕も思ったし、かっこうだけしてみる。
　だけど、手を振り上げた途端、僕にまたあの上級魔法を使った後のような激しいめまいがして、僕は
「なーんちゃってね」
と言いながら意識を失ったのだった。

道の先には……

意識を回復した先輩は、まるで怪我なんかしてなかったかのようにバカみたいに元気になった。一方、僕の方は意識を失った後原因不明の高熱が出て、点滴生活に逆戻り。

「急変するのはよくあることだが」

と言いながらも、どこか腑に落ちないという表情で担当の医師は僕を看た。

結局、退院は先輩の方が先で、僕はその3日後。その週いっぱい自宅療養して（一人暮らしの僕はというより、居なかった分ほこりのたまった部屋の掃除とか、たまった洗濯をするとか、事後処理に明け暮れていたのだけど）、週明けにお久しぶりの出社をした。正直入社して半年そこらで事故で長欠した僕の席がまだあるのか不安だった。

深呼吸して、営業部のドアを開く。

「おはようございまーす」

「お、宮本、やっと元気になったみたいだな」

声をかけてくれたのは、兵藤さん。

「はい、おかげさまで。本当に長い間ご迷惑おかけしました」

そう言いながら、僕がデスクにつこうとすると……

「宮本、そこもうお前の席じゃないぞ」

と、兵藤さんが言った。や、やっぱりもう僕の席はどこにもないの！　不安が的中して頭が真っ白になってしまった僕に兵藤さんは笑いながら、

「お前、掲示板ちゃんと見たか？　辞令が降りてんだよ、配置換え。わかったらさっさと見て、新しい部署に出社しろ。早く行かないと、大目玉くらうぞ」

と言った。は、配置換え？　はぁ、辞めなくて済んだのは良かったけど、それでも窓際行きかぁ。僕はのろのろと掲示板を見に行って、

そこにかかれてある辞令に……
マジでひっくり返った。そこには、

宮本美久

上記の者平成〇〇年〇月〇〇日付けで秘書課勤務とする。

以上

と書かれてあったからだ。秘書課ぁ？　この僕が？？　何かの間違いでしょ！

だけど、いつまでも呆けてはいられないし、僕はとりあえず今度は秘書課のドアを叩いた。
「どうぞ」
と言われて中にはいると、そこにはなんと先輩がいた。
「先輩！」
「遅いぞ宮本。社長より遅れてきたら洒落になんねぇんだからな」
先輩はそう言って僕にデコピンを食らわせた。
「なんか悪い冗談なんですかね、秘書課なんて」
「ああ、そう思いたいよ。お前はなんかまだ良いぞ。俺なんか頃合い見て取締役会に出席のおまけ付きだぞ」
取締役会？　完全に予想外のワード連発に頭がついていかない。
先輩はため息を落として、
「俺さ、お前が倒れた後薫にその……プロポーズしたんだわ。んで、退院した日に薫の親に挨拶に行ってさぁ、そしたらこうなった」
と言った。まぁ、夢の中でまで奥さんにするくらいだから、本気で惚れてることを自覚してちゃんと向き合ったんだろうけど、それがどうして取締役会やら僕まで秘書課勤務になるんだろう。
「へっ？」
「薫、この会社の会長の孫。正真正銘のお姫様」

「げっ。でも、それじゃなんで僕まで秘書課なんですか」
「あれ、気づいてねぇのか？　薫とあの子、英梨紗はこっちの世界でも、姉と妹なんだよ。お前、あの子口説いただろ。薫と俺が結婚するって言ったら、あの子もおまえと結婚するんだって駄々こねてさ、ほんじゃま様子見ってことで社長のそばに置くって事になったわけ」
「はぁ」
その言葉に今度は僕からため息が出た。
「ま、英語も呪文も使いこなす『語学マスター』なんだから、案外おまえって、向いてんじゃねぇの、この仕事」
向いてる向いてないは解んないけど、エリサちゃんと再会したとき、運命を感じた僕の予感は当たっていたのだろうな。それが良い運命なのかどうかは別として……

谷山先輩とエリサちゃんは本当は姉妹ではなく、会長の長女の娘の谷山先輩と、最初の奥さんが亡くなった後、３０歳年下の奥さんと再婚した会長の娘のエリサちゃんは実は姪と叔母の関係であることが分かるのは、また後日の話。

道の先には……Ｈａｐｐｙ　ｅｎｄが転がっていた。なーんてねっ！！

ーＴｈｅ　Ｅｎｄー

道の先には……（後書き）

以上をもちまして、本編終了となります。

あとは、あの性格の悪い魔法使いの視点のみ。本編だけではちょっと不完全燃焼だったところも、これで完璧に分かる……はず。

よろしかったら引き続きお付き合いのほどを。

アンデッドマン？　登場

僕たちが現実に戻ってきてたった一つ気にかかっていたのは、僕たちが居なくなった後のフローリア姫とエリーサちゃんのこと。そのことをおそるおそる先輩に聞くと、先輩は、
「お前知らねぇんだったな。あの後、なかなかケッサクだったぞ」
と言って、僕がこっちの世界に戻ってからのことを話し始めた。

―＊―＊―＊―＊―＊―

【ねぇ、ビク。目を覚まして。あたし、ビクのお嫁さんになるから、約束するから】
エリーサちゃんが大泣きで僕の身体を揺すぶるのを、みんながもらい泣きしていたときのことだった。僕がいきなりぱちっと目を開いて、
【本当に？　本当に今度は逃げないで私の妻になってくださいますか？】
と言うと、すっと立ち上がって優雅にお辞儀したのだそうだ。
【○×△□※！　マミー、あ、包帯してないからマミーじゃないわ、グール！！】
エリーサちゃんはそれを見て、恐怖にひきつった顔をしてありったけの言葉で僕をアンデッド宣言。
【ひどいな、私はまだ腐ってはいませんよ】
【もうすぐ、腐るわ】
死体だもの、とエリーサちゃんは小さな声でそれに付け加えた。
【それは困ったな。私はまだ、あと１００年は腐らないつもりなんですが】

それに対して僕は、いたずらっぽい笑みを浮かべてそう返す。
【マシュー、腐らねぇぞ。第一死んでない、こいつ宮本じゃねぇんだから】
【さすがは鮎川さんですね。では、ちょっと失礼します】
何かを気づいた先輩に僕はそう言うと、王様の前にひれ伏し、
【王よ、ビクトール・スルタン・セルディオ、ただいま戻りました】
と言った。
【うむ、よくぞ戻った。で、コータルは無事なのか】
【ビク、ビクトールって？】
エリーサちゃんが僕と言うか、僕もどきのセルディオさんのファストネームに妙な反応する。あれっ、セルディオさんの口振りではエリーサちゃんはセルディオさんのプロポーズを振り切って逃げ出したみたいなのに、どうして彼のファーストネームを知らないんだろう。
【エリーサ様、王にご報告申し上げたら、いくらでもご質問にお答えしますからね、少々お待ちください】
セルディオさんはエリーサちゃんに向かって、人差し指を口に当てながらそう言うと、王様にこれまでの顛末を話し始めた。

失策

【まずは、殿下の安否についてですが、殿下は確かに生きておられます】
セルディオさんの王子の生存宣言に、王様以下城のみんなから安堵のため息が漏れる。
【生きてはおられますが、今とても動かせる状態ではなく、とある場所でご静養いただいております】
【それはトレントの森か。しかし、そなたたちの捜索に当たった者たちが、トレントの森のそなたの屋敷にも行ったが、誰もおらなんだと聞いておるが】
【はい、ご静養いただいているのはトレントの森ではございません。それどころか、このグランディールでもガッシュタルトでもありません。
それは、この鮎川様の世界である、“ニホン”と言う所でございます】
謁見の間にざわめきが起こる。

―＊―＊―＊―＊――＊―

殿下が何者かに命を狙われているということは、私もよく理解をしておりました。何しろ、普段トレントの森に引きこもって研究三昧の私にその任の白羽の矢が立ったのはまさに、そやつの攻撃から魔法面で殿下をお守りするという意味合いでしたから。
恙無（つつがな）くガッシュタルトでの婚儀を終えた私たちは、姫様と別行動を取りました。敢えて敵方に連絡させる隙を作り、私たちは姫様の下を離れました。

そして、私たちは二人だけでトレントの森を突っ切る道を選択したのです。よしんば敵に襲われたとしても、一個小隊程もある姫様の花嫁道中よりは身動きもとれるし、被害も少なくて済む。なにより姫様に被害が及ぶことがない。

それに、トレントの森は私の庭とも言うべき場所です。敵方は私と同じように動き回ることはできないでしょう。あまり凶暴な魔物も棲息してはおりませんので、私たちは姫様よりかなり先に城にたどり着き、姫様をお出迎えできると算段していたくらいです。

しかし、敵方は私たちのそんな行動を予想してたかのように、森に最適の刺客――魔物使いを送り込んできたのでした。

何とかその魔物使いを返り討ちにしたものの、数多くの魔物たちによって私たちは満身創痍、特に殿下は一刻も早く治癒しないことには、お命も危ない状態。しかし、ここは辺境の森で、私より他に治癒できる者はなく、如何に私の魔力が高いといっても、一人で治癒術を繰り出すのには限界がありました。

私はとんでもない間違いを起こしてしまったのかと、頭を抱えました。

しかし、窮すれば通ずと言うのでしょうか、一旦は肩を落とした私は、とある場所のことを思い出していました。

（あの場所ならば、そして彼らならば……上手くいくかもしれない）

そして私は、その禁断の呪文の扉を開いたのです。

失策（後書き）

いきなり、セルディオ語りにスイッチしました。彼、美久より性格暗いみたいで、いきなり語り口が硬くなってしまいました。

次回、そんなセルディオの王子救命大作戦です。

並行世界

この世界には私たちの住むこのオラトリオの大地とは別に、いくつかの大地があるのです。その世界ー仮に並行世界ーと申し上げておきますが、その並行世界には私たちとそっくりな人々が違った生活を営んでいます。

実は私は１１歳の頃、偶然ニホンに飛ばされたことをきっかけに、そのニホンのことを研究し、ニホンが魔法を介さずに病や怪我を治してしまう治癒技術を持っていることや、私の映し身の美久に私が殿下に仕えるようになった同じ時期に殿下にそっくりな男、鮎川幸太郎氏と職場で出会ったことを知っていました。

最初、私はこんな強引な方法を採らず、ただ出かけていって、幸太郎氏に殿下との交替をお願いするつもりでいました。

しかし、界渡りの呪文を唱えて私がニホンに現れたとき、彼らは道に飛び出してきた少女を避けて彼らの乗っている自動車という大きな鉄の塊を急旋回させてまさに道の端にぶつかろうとしていたのです。

私が殿下に仕える時期に美久が幸太郎氏と出会ったように、この並行世界では、環境の違いで出来事は違ってはいますが、こちらが危険になればあちらでも似たような事が起こるようでした。私は、とっさに時間を止める魔法をかけました。

私はどうしたものかと思いました。このまま時を進めても彼らは無機質な道具にぶつかっていくだけで、彼らもまた治癒が必要になるのは目に見えています。

とりかえばや物語

私はまず、彼らの乗っている自動車のレプリカを作りました。内部などは全く分からないので適当ですが、結果壊してしまうので、何ら問題はないと思いました。そこに彼らが持っていた火の属性をもつ魔道具（美久はそれをチャ〇カマンと呼んでいましたが）を少量もらい受け、その上で、彼らを自動車ごとグランディールへと送りました。

場所の特定まではする余裕はなかったのですが、結果街道筋近くにたどり着いたようです。ただ、時間を止めた反動なのか、私たちが襲われてから約一月も経ってはいましたが。

一方、私はそのままトレントの森に戻って殿下をニホンにお連れし、レプリカを障壁にぶち当てた後、魔道具に炎系の魔法をぶち当て、大破させました。

そして私は、殿下とともにその大破した張りぼての中に倒れ込み、時を戻したのです。私自身も無傷ではありませんでしたし、高度な魔法を連発した衰弱も相まって、ほっとした途端私も一旦は意識を手放してしまいました。

―＊―＊―＊―＊―

【しっかしまぁ、よくそんなんで……お前が王子は無事だって言うからには、ちゃんと王子は俺として病院で治療受けてんだろ？　日本の警察はいったい何やってんだって感じだな】

【ええ、しかし幾分衝突と言うには不可解な傷が多々あるにしても、私たちはあなた方の身分証明書を持参していますし、生存している間は治癒師の領分ですから、警備隊はそこまで関われないようです

し】
【まぁな。医者が必死こいて助けようとしてる時に、警察が茶々入れても医者が怒鳴ってそれで終わりだろうけどよ。それでもなんぼなんでも、王子目が覚めたら全部ちょんばれだろうが】
私の説明に、幸太郎氏は半ば呆れながらそう返しました。
【ええ、ですから殿下にはこちらにお連れする目途が経つまで眠りの魔法をかけてあります】
【は、至れり尽くせりなことで。ドッペルゲンガーなのに、宮本とはえらい違いだな】
幸太郎氏は、手を肩の所くらいまで挙げてつぶやくようにそう言いました。

二人の共通点　ｂｙ幸太郎

【王子の容態も日に日に良くなり、後数日もすればこちらにお連れしても大丈夫かと存じます】
【解った。セルディオ、そなたの今度のコータルの救護、まことにご苦労であった】
【いえ、それが私の任でありますれば、この命に代えましてでも】
俺は、そう言って王様に頭を下げる事件の立役者の顔を見た。結局こいつは王子だけじゃなく、俺たちの命も救ってくれた訳か。

王様への報告が終了した後、俺は一番気になっていることを聞いた。
【で、宮本はどうなってんの。あいつ、切られたけど】
【あ、急所は外れていたはずですし、帰したところが治癒専門の場所ですから、治癒師が迅速に対応してくだされば、何の問題もないでしょう】
それに対して、クリソツ魔法使いはそう笑顔で答えた。まぁどうでもいいが、さっきからこいつ、宮本に結構冷たいのな。ホントならお前が切られてたかも知んないのによ。するとこいつは、
【美久には悪いことをしたと思っていますよ。ただ、私ならばむざむざとあのようには切られたりしないと思いますが】
俺の頭の中の声が聞こえたかのように、そう付け加えた。その表情は依然笑顔のまま。顔はそっくりなのに、あの天然ボケとは違って性格悪っ！　お前口だけじゃなくってホントに悪いと思ってんのかよ。

そうやって改めてこいつの顔をよくよく見てみると、同じ顔なんだけど持っている雰囲気は全然違う。片や入社したてで怒鳴られまくっているペーペーのサラリーマンと、片や希代の魔術師と呼ばれた男。ま、同じ雰囲気を持ってる方が不思議か。こいつら、顔以外

に共通点なんかないかもな。あ、けど……
【あのさ、ちょっと気になったんだけど、そもそもお前が１１の時日本にすっ飛ばされた理由って何？】
【な、何でもよろしいではないですか】
俺がそう聞くと、それまで余裕こいていた魔術師は明らかに不機嫌になった。
【もしかして、気に入った女に同性呼ばわりされて、ブチ切れた？　お前女顔だし、ファーストネームのビクトールをビクトリアに間違われてとか】
これって、モロ宮本がマシューと最初に会ったときのシチュエーションだけどな。そしたら、あいつは真っ赤な顔をして、
【そ、そんなことある訳ないじゃないですか！！】
とあからさまに取り乱して怒った。おいおい、図星ってか。ま、宮本にはこいつみたいに魔力はないだろうから、飛びようなかっただけだけどさ、まるで一緒じゃん。『〇〇子！』って女名で呼んだとたんに怪力になる、ものすごく昔に流行った刑事ドラマみてぇ。
　バカウケしまくる俺を、女顔の魔術師はものすごい形相で睨んだ。なまじ、女顔なだけに、怖ぇーっ（爆）

【それにしても、本当にニホンの治癒術はすごいです。あの規則正しく薬湯が体に送られてくる管！　誰もいないときに起き出して何度細部まで調べる誘惑に駆られことか！！】
　しばらく不機嫌全開だった奴が、次に言って来たのがそれだった。それからしばらく奴の日本の医療器具褒めちぎりトークが続いた。ん？　これもどっかで見覚えがあるような……
【なんか、リルムの町のビクを見てるみたい】
とそのときぼそっと、マシュー改めエリーサがそう言った。そうか、どっかで見たことがあると思ったら、リルムの町の胡散臭い商人の品物を見せてもらったときの宮本の顔だ！！　ＲＰＧと医療器具の

違いこそあれ、それはまさしくオタクの証明。

やっぱり、こいつは正真正銘、宮本のドッペルゲンガーだと俺は思った。

ハッピーエンド？　ｂｙ幸太郎

【さーあて、殿下をお戻ししたらグランディールまで責任を持ってお送りさせていただきますからね、エリーサ様。ところで鮎川様、ニホンではあの自動車なるモノは壊れている訳ですから、頂いても差し支えありませんよね】

自分の都合の悪いことから目を背けさせたいのか、女顔の魔法使いは元非力な大男にそう言った。今は、ちびっ子に戻ってるからあれだが、はじめの状態なら絶対にポジション逆だろ。

【ああ、今更あのポンコツが道端に現れでもしたら、それこそミステリーだからな。一応、助けてもらった礼代わりにでも持ってけ】

俺は、それに対して頷きながらそう言った。壊れたはずのポンコツがいきなりゾンビみたく現れても、俺、説明なんてできっこねぇし。

【ありがとうございます】

【なんなら、あのポンコツの後ろに缶空……そんなもんこの世界にないか。ああ、リルムの町のあのゲテモノプリンの入れもんがあった……あれでも、つり下げて走るか？】

それならいっそのことハネムーン仕様にでもすりゃぁいいんだと思ってそう言うと、あいつは首を傾げながらむっとした表情で、

【は？　それは魔除けでございますか？　そのようなものなどなくとも、十分私がエリーサ様をお守りできますが】

と言った。

【魔除け？　んな訳ないだろ。ま、こいつは俺のもんだから手を出すなって意味ってっちゃそうだろうな】

【じゃぁ、何のために】

【こっちじゃさ、結婚式が終わった後、式場から出る新郎新婦がどてっ腹にさ、『Ｊｕｓｔ　Ｍａｒｒｉｅｄ』とか書いた車で走んだけど、後ろのバンパーにあーいうのをつり下げんだ】

とはいえ、俺もそれは外国映画でしか見たことないけどな。

【そうなのですか、それは素敵です！　まるで私たちを祝福する鐘を鳴らしながら走るようではありませんか！！】
けど、それを聞いたロリコン魔法使いはにわかに色めき立つ。ま、本来もそーいう意味合いだっけか。にしてもお前、どーでもいいけど、この世界には存在しない車が鳴り物入りで走れば、とんでもなく目立ちすぎるぞ。それでいいのか、おい。確かに本物の魔物は寄ってこないだろうが、人も逃げるぞ、たぶん。
【ヤダ、あたしセルディオ様と一緒には帰らない】
ほら、まず嫁が逃げた。
【どうしてですか！　エリーサ様ははっきり私と結婚するって言ってくださったじゃないですか】
【あれは、ビクに言ったんだもん、セルディオ様にじゃないわ】
【ビクって……彼の名前は美久、私の名はビクトーリオ。私の方が本当のビクじゃないですか】
【でも、どうして？　あたしがお父様からきいたセルディオ様のお名前はスルタン・セルディオだけだったわ】
【そ、それは……】
【どうせ、その顔でビクトーリオって名乗ったら『女みたい』って言われるのがいやだっただけだろ。お前どんだけ、顔と名前にトラウマもってんだ】
【悪いですか？　ですが、あなたのように体格にも名前にも恵まれた方に私の気持ちが解るものですか】
すると、コンプレックスの塊魔法使いは、そう言って逆ギレした。
あ、女顔・女っぽい名前に加えてチビもその要素だった訳ね。そう言やぁ、宮本もそれ、気にしてたな。
【お前、そんなこと気にすんなよ。お前にはそれにあまりある位の魔力があるんだから。お前日本に居ながら、リルムの町とかで、俺たち助けたりしてくれてたんだろ】
【いいえ。私はもう一度殿下とあなた方を戻さないといけませんから。体力を回復するべく極力静養に努めておりましたよ】

【じゃぁ、あれはマシュー、いやエリーサか？】
【ううん、あたしじゃない。あたしはマシューの体になってるだけで精一杯で、余分な魔法なんて使えなかったもん。別人になるのって、すごく大変なのよ】
【んじゃ、一体誰が】
【あれは正真正銘、美久が一人でやったんですよ。使ったことのない魔法をぼんぼん連発するからすぐ体力切れ起こしてましたけれど。鮎川様、美久に魔法を使いたいのなら、もっと体を鍛えなさいと言っておいてくださいね。いかに魔力があっても、それに見合う体力がなければ、最悪命を落としますよって】
は？　あれは宮本がやったって？　だるまさんがころんだも、ガソリンも？？　もし魔女発言の後、あいつが電池切れしてなかったらと思うと、俺は血の気が全部引いちまう気がした。
もしあの、ゲーオタにそんな芸当ができると分かってみろ、嬉しがって何が起こるか分からん。
（言わない、絶対に言うもんか！！）
俺はそう堅く心に誓った。

そして数日後、無事日本に戻った俺は、宮本が（こっちでは）初対面の英梨紗にいきなり口説いたと知った。あっちの世界じゃともかく、この日本じゃ犯罪だぞ、おい。

俺には若干1名（あっちとこっちで2名か）悲劇のヒロインが生まれたような気がすんだが……
ま、それでもとりあえずハッピーエンドっつうことで。
ー小さなお姫様は小さな魔法使いといつまでも幸せに暮らしましたとさー

ん？？

あとがきに代えて

以上で、「道の先には……」完結とさせていただきました。

このたびの3月11日の未曽有の大災害の中、このようなお気楽な異世界ファンタジーを書き続けることは、被災された方に失礼だと、お叱りを受けるかもしれないと思い、一時は執筆しても公開は自粛しようと思ったりもしました。

ですが、本当はこの作品は昨年11月末までに完成しておかねばならぬものでした。（仲間内のイベントのため）

それより前の10月中に、友人に見せると約束していたものでした。

それが、9月に父が亡くなり、自分の中の勢いがなくなってついつい不得手な異世界ファンタジーより「エロ空（切り取られた青空シリーズのことをブログでそう呼んでます）」や「バニポイ」など自分が書きやすいものを優先して後回しにしてきました。

で、年末個人的にそのことを激しく後悔させる出来事が起き、私自身「明日の自分は自分にも分らないのだから、できることは今しておかねば」という気持ちで今回リアルタイムで公開に踏み切りました。

このおばさんから妄想を取ったら何にも残らないからです。今できることはこれしかなかった。ごめんなさい。

もしよろしければ、このバカっぽい話で一時だけ大変なことを忘れて元気になってくだされば と思います。笑ってください。そんな気持ちで今日エンドマークをつけました。

なお、このお話を大好きな大好きな友人、祈君（仮名）に捧げます。

役者が揃った？

やがて、長い昏睡状態がとけたことになっている俺と、逆にぶっ倒れた宮本とで、やってきた医者やら看護師やらは騒然となった。

倒れている宮本はもちろんのこと、俺の状態まで検査される。ビクトールは、

『たぶん、身体は調べられると思いますので、形だけ付けておきますね』

と、傷（本人がいないので、よく保って一週間くらいだろうと言っていたが）を魔法で作り出した。こんなもんが作れんなら、張りぼてじゃなくって本物の車も作れそうなもんだ。あんなポンコツよりもっとマシな奴をさ。ま、全く同じものしか作れないかもしれない。俺はオラトリオだっけ？　あの世界にあのポンコツと同じ車がぞろぞろと並んでいる姿を想像して、笑うのを堪えたら、痛みを堪えたのと間違われて、

「痛みますか？」

と看護師に言われたんで、

「あ、ちょっと」

と痛がるフリをしなきゃならなかった。ビクトールにあっちに飛ばされてなきゃ、生きてないのかもしんないけど、何だかな。

そして、いつの間にか完治してる俺と、病院で寝てるだけなのにあり得ないほど疲労してる宮本に医者は首をひねりまくっていた。

理由を知っていた俺は内心ビクビクもんだったが、日本の医療機関にその真相が分かる訳きゃない。結局その晩熱を出した宮本は、どこかが炎症を起こしているのだろういうことで、抗生物質を点滴されている。

本当ならガザの実があれば一番いいんだろうが、よもや俺は宮本がこっちに帰って来てまで大魔法を使うなんて思わなかったから、エリーサに残ってんならくれとも言わなかったしな。

翌日、三時の面会時間を待ちかねたようにエリーサがやってきた。いや、正確に言えば絵梨紗。二人は俺が隣にいることなんてものともせず、

「ビク、大丈夫？　お姉ちゃまにビクがお熱出したって聞いて、あたし心配で」

「大丈夫、心配しなくていいよ。ちょっとね……慣れないことしただけだから」

それに対して、宮本はさすがに魔法を使ったともいえず、そう答える。

「ホントに？」

「うん、ホントに大丈夫。それに、エリサちゃんがきてくれたから、すごく元気出ちゃった。ありがと」

ってな具合に、いちゃついてる。

ま、俺と宮本と薫のドッペルがいたんだから、エリーサのドッペル？（絵梨紗のドッペルがエリーサが正解か、まぁどっちでもいいが）もいても別におかしかないが、こいつらいつの間にこんなラブラブモードに発展してんだ？　俺なんか薫にキスして殴られて、そこから何も話進んでねぇのに……

―なんか先越された気分だ。

ええーっ、こっちも！？

宮本と絵梨紗とのいちゃいちゃが見てられなくなって、俺が病室を出たら、そこに薫が来ていた。
「目が覚めたからって、とっととほっつき歩いて大丈夫なの？」
薫は口を歪めてそう言った。
「ああ、医者が首を捻るくらい完全元通りだぜ」
ホントのことを言えば、最初から怪我なんかしてねぇんだけど。それを説明できないし、説明する気もねぇけど。
「また、いい加減なことを言う。ちゃんと寝てないと、宮本君みたくぶり返すわよ」
というと、薫はやれやれといった表情でそう返す。
「いい加減じゃないさ。薫、今あの灼熱地獄に戻れなんて言うなよ。自分の病室なのにいたたまれないったらありゃしねぇ」
「ああ、宮本君と絵梨紗のこと？　確かにあれはね。ホント、いつの間にあんなに仲良くなったんだか」
どうせあの単純な宮本のことだ。オラトリオで惚れた女のドッペルに、運命でも感じるとか思って迫ったんだろ。それに、今んとこ１０歳の絵梨紗は宮本よりチビだからあいつのコンプレックスは刺激されないだろうしな。
「薫、小学生はは夏休みだからともかく、お前仕事は良いのか？」
そのとき、俺は今日が平日だってことに気づいて、薫がなぜ今ここにいるんだろうと思った。。
「うん？　今日は有給……ってか、もう私職場に戻れないかも」
それに対して薫は口ごもりながらそう答えた。
それにしても辞めるっぽい発言なんて聞き捨てならない。「何でだ」
「うん、ちょっとね」
びっくりして聞き返した俺に、薫の口は重い。
「俺のせいか？」

「違うよ、鮎川のせいじゃない！」
「じゃぁ、何だよ」
「言わなきゃダメかな」
「言わなきゃ解んねぇだろ。それに俺に言えないっつーことは、直接じゃなくても俺らの事故が関わってるって思って間違いないんだろ」
事故の一言に、薫の頬がぴくっと動く。
「じゃぁ、結局、俺のせいじゃねぇか」
「違うよ！！」
それでも、違うと言い張る薫は、泣きそうになっていた。お前、何隠してんだ？
「じゃぁ何だってんだよ！！」
俺はだんだんいらいらしてきて、そう怒鳴った。
「鮎川、声デカい」
薫はいきなり急に声のトーンを落として小声でそう言った。ハッとしてあたりを見ると、声を荒げて言い合いをしていた俺たちはいつの間にか他の患者や面会者に遠巻きに見られている。
「お前が、ちゃんと理由を言わないからだろ」
だから、俺も内緒話みたいに、薫にそう耳元で囁いた。
「バレたの」
すると、薫はぼそっとそう言った。
「誰に？　何が？」
主語も述語もかっ飛ばしてしゃべんなってんだ。何が何だかちっとも解んねぇと思っていると、薫は意を決したようにその理由を口にした。
「会社に、私が」
「会社に、お前が？」
「櫟原（くぬぎはら）宗十郎の孫だってことがバレちゃったの」
櫟原宗十郎ったら、ウチの会社の会長の名前じゃん。
「へぇ、お前、会長の孫だ……ええーっ、か、会長の孫！！」

「だから鮎川、声デカいって……」
思わず俺が挙げてしまった素っ頓狂な声に、薫はこめかみに手を当て、口をへの字に曲げてそう言ってため息をついた。
ええーっ、あっちは本物の姫だが、こっちも姫級かよ。俺の方は向こうは王子でも、こっちは完璧フツーのリーマンなのにさ。

あの日

「ちょ、ちょう、薫、外行こう、外」
俺はそう言って強引に薫を病院の中庭みたいなとこに連れ出した。

「そう、私は櫟原宗十郎の長女の娘、ホントは身内の会社になんて勤めたくなかったんだけど、許してくれなかったのよ。いくら武（たける）（社長の名前だ）叔父様に子供がいないからって、私にあそこで婿見繕おうなんて、前時代すぎよ。そんなの絵梨紗がいるじゃないって思ったし、この前デビくんも生まれたから、やっと解放されたと思ってたのに」
　観念して薫は事情を説明し始めた。とはいえ、いまいち話が見えないが、薫は社内のだれかと結婚して、跡継げって言われてた。でも社長んとこに待望の（デビくんっつーくらいだから男だろ）跡取りが生まれて、すべて丸く収まったと、そんなとこだな。
「私は長女の娘だから櫟原（くぬぎはら）じゃないし、武叔父様に『私が絶対に櫟原家の縁者じゃだってことをバラさない』ってことを約束させて会社に入ったのよ」
じゃないと、思いっきり仕事できないじゃない？　と薫は続けた。
確かに使う側としちゃ使いにくいだろーな。
「で、何でバレたんだ？」
「うん……それなんだけどさ、あの日絵梨紗と一緒に私もいたのよ」
あの日と言われて、俺はゴクリとつばを飲み込んだ。って言うと、俺たちが事故った日のことか。
「出かけたのが久しぶりだったんで、絵梨紗が妙にはしゃいじゃって……道の向こうにほしかったものを見つけて、思わず飛び出しちゃって……そこに来たのが」
「俺らの乗ってた車って訳か」
俺の言葉に首だけで頷いた薫は、

「間一髪のタイミングで絵梨紗を交わした車は、ガードレールに吸い込まれるようにぶつかって火を噴いたの。私、慌てて車の中をのぞき込んでびっくりしたわ。乗ってたのが鮎川と宮本君だったから」
薫はとっちらからりながらも何とか１１９番に連絡し、やがて救急隊員が来て、俺たちを車から引きずり出した。そしてその途端、車は再度爆発し、木っ端微塵になったという。
「後少し救出が遅れてたらと思うと……」
薫はそのときのことを思い出して震えながらそう言ったが、大方それはビクトールが車の張りぼてをごまかすために魔法で吹っ飛ばしたんだろう。満身創痍とか言う割に、えらく派手な演出じゃねぇか。あいつ、どんだけ魔力があるんだか。
一方、衝撃的な事故を目撃してしまった薫は、ショックでぶっ倒れ、一緒に病院に運ばれたらしい。俺たちが全然知らない奴らなら、ただ事故を目撃したで済んだんだが、事故の当事者が俺たちだったため、当事者が一本の線でつながって、薫が会長の孫だということが一気に社内に広がったみたいだ。
それから、上司は薫の顔色を伺いながら仕事を持ってくるし、女たちからは今まで気楽にグチってきた会社への不満やら悪口やらを薫が会社にチクっている様に思われて、シカトを食らうようになった。確かに、薫は会社の悪口は言わなかったさ。けど、こいつは誰の悪口だって言ってやしねぇぞ。
「ゴメンな、俺らのせいで」
「ううん、鮎川たちのせいじゃないよ。鮎川は絵梨紗を助けてくれたんだし」
「なぁ、薫……会社行きにくいんだったら、辞めて俺んとこくるか」
俺は、手に汗をびっしょりかきながら、薫にそう言った。　地球とオラトリオがパラレルワールドってんなら、オラトリオで王子と姫が結婚するんなら、俺たちも結婚するのが流れってもんだろ。
「俺んとこって、鮎川も一緒の会社でしょうが、何変なこと言ってんのよ」

だけど、薫は俺の言葉をプロポーズだと思わなかったらしく、ゲラゲラと笑いやがる。
「違う違う」
違うよ、鈍感女めが。
「何が違うのよ」
「だから、鮎川薫になれってんだよ」
回りくどく言って解んねぇんならストレートに言ってやる。
お前、俺にキスするぐらい好きなんだろ？　だが、それに対して薫は、
「イヤだ！」
と、間髪入れずに即答しやがった。なんだ、一発玉砕かよ。
何でだ？　オラトリオはパラレルワールドじゃねぇのか！？

ここはいっちょ、踏ん張ってみますか

「じゃぁ、何で俺にキスなんかしたのかよ。宮本のバカ話にホイホイ乗せられる様な歳じゃねぇだろ、薫」
２４歳でおとぎ話のお姫様を地でいくとしたらイタすぎだろ。
「うっ、そんなの当たり前じゃん。でも今はヤダ。今辞めたら逃げたって思われる。鮎川だって、きっと会長の孫って分かったから迫ったって言われるよ」
今辞めたら、今までこいつが頑張ってきたことなんてすっぱり忘れて、『それ見たことか、やっぱりお嬢様だ』とか言う奴が必ず現れるか。俺も逆玉狙いだって言われるだろうな。
「俺は、そんなもん何とも思わねぇよ」
「周りが一夜にして変わっちゃっても？」
「仕事が変わる訳じゃねぇし、全員が敵になる訳でもないだろ。そんなもん、仕事で跳ね返してやるさ。お前も、負けたくねぇんなら辞めないで一緒にいればいいさ。けどさぁ」
「けど？」
「俺と一緒に闘おうや。1人で抱え込むのお前の悪い癖だぞ」
俺は薫の今にも泣き出しそうなほっぺたに手を当てて、そう言った。どんな奴が相手でも、怯まずつっこんで行くところがお前の良いところだけどな。切り込み隊長にも、疲れたら帰る場所があってもいいんじゃねぇか。
「鮎川ぁ、それってかっこ良すぎだよ」
薫は、そう言って口をとんがらせて鼻水をすすった。
「そうそう、俺ってホントカッコいいだろ」
「あんた、自分が言う？」
あきれた、と薫。
「おお、言うぞ」
俺は胸を張ってそう答えた。こんなの、自分が言わなきゃ、誰が言

うんだ？　他人にこんなこと言われたら、どんな裏があるのかと思って逆に気色悪いだろうが。
「薫、お前いつ目が覚めるか分かんねぇ俺をずっと看てくれてたんだってな」
　それから俺はマジな顔になって薫にそう言った。
「うん……」
薫は照れながら頷いた。
「もし俺が、この先ずっと寝たまんまだったとしても、そうしてくれたか？」
「たぶん、ね」
俺の頭ん中には、昨日の夜の宮本の説教じみたうわごとだか報告だか判んねぇ、俺が寝てる間の薫の話が渦巻いていた。さっきはそっこーでふられたけど、ここはいっちょ踏ん張ってみますか。
「俺、起きちまったけど、これからもずっと俺の傍にいてくれねぇかな。ってか、夢の中でもお前は俺の嫁だったし、なんか他の奴考えられねーんだよな、だからさ」
俺は、そう言うと、異世界よろしく臣下の礼をとって、
「谷山薫さん、俺と結婚してください」
と一昔前の合コン番組みたく右手を差し出した。
　薫は、ぼろぼろ泣きながら黙って俺のその手を握った。

ここはいっちょ、踏ん張ってみますか（後書き）

何だか、完全にラブコメになってます。ファンタジー要素皆無。

でも、この2人をまとめないと、先のファンタジーに進まないんです（涙）

もう少し、ガマンしてくださいね。

退院

元々怪我なんかしてなかったから、検査したってボロなんて出なくて、とっとと病院から解放されることになり、俺はちょっとビビりながら、会計に行った。何気に豪華なあの二人部屋に５０日あまり、カードの限度額超えなきゃ良いけどな。

しかし、俺たちの支払いはもう済んでいると言う。

「ええっ、済んだってどういうことだよ」

「支払いの方は全部櫟原さんの方に回すようにとここに書かれてますが」

びっくりした俺に、会計の女は事務的にそう答えた。俺は後ろにいた薫を振り返ると、

「武叔父様が」

と言った。

「社長が？」

「絵梨紗の……そう、絵梨紗の命の恩人なんだからって払わせるなって」

と、薫が答えた。だが、それはなんだか奥歯にものが挟まったような言い方だった。

「そりゃ、確かに助けたことには違いないんだろうけどさ、一つ間違ゃ轢いてたかも知んないし、たまたま運が良かっただけだ。それにそこまでしてもらう筋合いはないと思うけどな。だけど、突っぱねて金額聞くにもあの部屋じゃなぁ。ごくふつうの大部屋にしといてくれりゃ良いのに」

「う、うん、そうだね。じゃないと気、遣うよね」

俺の言葉頷く薫の返事は相変わらず歯切れが悪い。

「礼を言わなきゃと思うんだが、こんな個人的な事会社で言うわけにもいかないんだけどよ、電話で済ますのも失礼だし、お前5分でいいから時間取ってもらえるように頼んでくれねぇか」

「ううん、お礼なんて良いよ。叔父様がしたくてしてることなんからさ」
「そんな訳にはいかねぇだろ」
「気、気にしないで。あ、そうだ、鮎川明日ウチにくるでしょ？その時顔出し手もらうように言っとくよ」
「げっ、社長呼ぶってか？」
薫と一緒に闘うと言ってプロポーズした手前、俺が次に出社する前にとっとと薫の親に『結婚を前提にお付き合い』の挨拶をしとこうと言うことになったのだ。まぁ、一緒に聞いて認知してもらってる方が風当たりは弱いかもしれないが、父親だけじゃなくて、叔父さんまでに値踏みされるんかよ。頭痛ぇ……
「うん、武叔父様には早めに会っておいた方が、いいと思うのよ。そうよ、その方がダメージが少ないわ」
その後、薫がつぶやくようにそう言ったのが聞こえた。

それにしても、ダメージってなんだ？　受けるのは社長？　それとも俺？？　俺は、何だか分からないプレッシャーやら不安をひしひしと感じ始めていた。

熱烈歓迎？　1

翌日、俺は薫んちに行った。ナビが示すのは、超ド級の高級住宅街。都内に住んでても一回も行ったことがないとこだ。

そして、俺は薫んちの前で盛大にため息を吐いた。何が、叔父様の家より小じんまりしてるだよっ　白亜の豪邸じゃんかよ。じゃぁ、社長の家はどんなだってんだ！

それもそのはず、薫の父親の谷山紀文は画家で、一枚書きゃ、ん千万だっつー話だ。うええ、ますます俺、場違いじゃん。一回振られた時点ですんなり諦めとくべきだったか。

ま、いつまでもビビってる訳にも行かないんで、とりあえずインターフォンを押す。はーい、という返事の後薫が玄関のドアを開いた途端……

家の奥の方から巨大な物体が俺に向かって突進してきた。

「うわっ」

体当たりしてきたそれを、俺は転びそうになりながらも何とか受け止めた。

「げっ」

動く毛玉、いや犬、確かボルゾイってやつだ。そいつは、俺の肩をがっしり掴むと、俺の口元を……

ペロペロと舐めだした。そのままディープキスされそうな勢いだ。よく見ると笑顔っぽいし（犬の感情なんて判んねぇけど）尻尾振ってやがる。肩掴まれて首元にこられたときには、殺られるって本気で思ったぜ。一応、ここん家の家族を分捕ってくアウェイな訳だし。獣は人間よりそういうことに数段敏感らしいからな。

「ミランダ、こらっ止めなさい！　Ｓｉｔ！！」

薫にそう怒鳴られて、巨大な毛玉もとい、ミランダは渋々と薫の前にちんと座った。しかし、熱烈歓迎の意志は示したいのか、はぁはぁ言いながら尻尾だけはまだ振っている。

そこに薫の母親らしき女性が玄関に現れた。薫の外人度をさらに上げた感じで、小紋をを小ぎれいに着こなした姿は、どっかの旅館の名物女将っぽい。彼女は、
「あらぁ、ミランダちゃんも女の子ねぇ、イケメンはわかるのね」
と言ってミランダの頭を撫でた。
「顔じゃないわよ、鮎川あんたサラミ食べたでしょ」
「ああ、正確に言えば、サラミの乗っかったピザをな」
50日も留守にしてるんだ、冷蔵庫にあったもんは調味料をのぞけば全滅、かろうじてフリーザーに残ってた冷凍ピザだけしか食うもんがなかったんだよ。昨日帰りがけにうっかりと買うのを忘れたんだ。でも、何でそれがサラミだって判るんだ？　薫は
「ママ、彼女は鮎川の胃の中のものに反応してるだけよ。ミランダ、いくら好きだってあんたサラミに反応しすぎ」
と言いながら俺を見上げてニヤリと笑うと、
「モテたんじゃなくて残念だったわね。この子サラミに目がないのよ」
と言った。バーカ、犬にモテたって嬉しかねぇよ。サラミに惚れてくれて結構だ。
まぁ、そのバカ犬のおかげで幾分緊張感が取れて、俺は通されたそれこそそこだけで俺のアパートの部屋の何倍あるんだっていうリビングで薫の父親を待った。
「やぁ、お待たせ。君が鮎川君？」
そして現れた薫の父親は、一人娘がかっさらわれるのだというのに、さっきのバカ犬も顔負けの満面の笑顔だ。
「初めまして、鮎川幸太郎です。」
俺は一旦座っていたソファーから立ち上がって深々とお辞儀をする。
「谷山紀文です。退院おめでとう」
「ありがとうございます」
俺は、礼を言った後、咳払いをして、いきなり本題をきりだした。
「今日はですね、お嬢さんと結婚を前提におつ……」

しかし、紀文氏は俺の口上が終わらない内に、
「そんな堅いことは抜き抜き。鮎川君薫と結婚したいんでしょ。どうぞどうぞ、こんな面倒臭いので良かったら、是非」
と、さっさと俺たちの結婚を承諾してしちまったのだ。それにしてもノリ軽っ！　しかもトドメに、
「いやぁ、君がずっと眠ったままだったらどうしようかと思ってたんだよ。それでも生きてるんだから、そちらのご両親に承諾もらって病床で式だけ挙げようかとか」
とまで言う。こっちが言い出す前に親公認なのも何だかなんだが、意識のない奴と結婚させようだなんて、どんだけ薫を追い出したいんだか。ホントに血つながってんのか？　母親の外人的要素の方が際だって、いまいち判んねぇぞ。
「パパ！！」
さすがにその発言にブチ切れて薫が思いっ切り父親を睨む。
「じょ、冗談だよ、薫。さすがに眠ったままの人間を後継者にするなんてお義父さんが許さないさ。でもね、私は嬉しいんだよ。大事な娘を絵描きになぞやるんじゃなかったって、そりゃ肩身の狭い思いをしてきたんだから」
まぁな、父親としちゃいくら金取れるってったって、絵描きなんて次売れるか売れねぇか分かんねぇヤクザな商売認められねぇよな、当の会長は結構でけぇ会社のＴＯＰな訳だし。解るよ、何か一カ所聞き捨てならねぇ事聞いた気もするけど、取りあえず薫の親の反対はないってことだな。

―ピンポ～ン―
その時、インターフォンがなったかと思うと、だだだだっと廊下を走る音がして、
「間に合った？　僕間に合った？？」
と飛び込んできたのは、我が社の社長、櫟原武氏。しばらくして、もそもそっと絵梨紗も入ってきた。

じゃぁ、ここからご挨拶第二ラウンド突入ってか？

熱烈歓迎！　2

「間に合った？　僕間に合った？？　紀文（きぶん）ちゃん」
と薫の父親に聞く社長。それに対して、当の紀文ちゃんは、野球のアウトサインをしながら、
「うーん、ギリギリアウトってとこかな」
と笑顔で言う。
「じゃぁ、日取りとかも決まっちゃった？　いつ、いつ？」
日取りって結婚式の日取りか？　っつか、なんだこのぶっ飛び具合は。社長せっかち過ぎねぇか？　俺は今日、薫と付き合う宣言しに来ただけだぞ。そう思ってると薫が、
「武叔父様、飛びすぎ。まだ、そこまで行ってない」
と言って社長を睨む。おお、会社では絶対にあり得ねぇな。
「じゃぁ、僕のサポートの件は？」
「まだ！」
「じゃぁ、取締役会の件は？」
「それもまだ！！」
「じゃぁ、全然間に合ってるんじゃん、僕」
矢継ぎ早に俺の解らないことを質問した挙げ句、そんな話はしてねぇことを知ると、社長はホッとむねをなでおろしていた。
「そういうのは、ウチには関係ないからね、タケちゃん」
「ひどいな、櫟原（くぬぎはら）には大事な問題なんだよ」
そして、紀文ちゃんのその言い分に、社長改めタケちゃんはむくれながらそう返す。タケちゃん、普段とぜんぜんキャラ違うくないですか。その日本人離れした顔で小首を傾げると愛くるしいっちゃそうだけど、歳考えるとカテゴリー：かわいそうな子だよなぁ。
「あ、社長。入院中はいろいろありがとうございました。ホントあんなすごい部屋にずっといさせてもらって恐縮です」
俺は、そんなタケちゃんの変わりっぷりに面食らいながらも、忙し

い中折角来てもらったんだからと、お礼の挨拶をする。
「いーのいーの、気にしないで。可愛いベスの命の恩人に窮屈な思いをさせたら、僕がパパに叱られるもん。それにさ、未来の社長の部屋としてはチープな方だよ」
ベスーエリサベツーエリーサー絵梨紗か。けど、未来の社長ってなんだ??
「俺、話が見えないんですけど」
「えっフロリーから聞いてないの？　フロリーの旦那様には漏れなく櫟原がついてくるって話。
とは言ってもさ、ぜんぜん櫟原に関係ない子が来ちゃったらどうしようかって思ってたんだけど。でね一応、調べさせてもらったよ、鮎川幸太郎君。で、合格！　文句なしだよ。フロリーちゃん、グッジョブ。うぅん、見る目あるよ」
社長は今にもとろけ出しそうな満面の笑みだ。そんで、フローリアでフロリーか……イヤイヤ、問題はそこじゃないっ、未来の社長だ。聞いてない、聞いてないぞそんな話！！
「社長！　どうして俺が社長やんなきゃなんないんですか！！」
「じゃないと、僕が辞められないもん」
俺の問いかけに、社長がウルウルの瞳でそう答える。
「社長ってまだ４０代でしょ」
「うん、４８。今年４９になるよ」
だから、アラフィフ男が小首を傾げてしゃべるんじゃない！
「まだ、引退するような歳じゃないじゃないですか！」
思わずそう叫んだ俺に、タケちゃんは徐に一冊の本を取りだした。

熱烈歓迎！　2（後書き）

ううっ、まだ終わらない。濃すぎる薫の身内たちに、作者まで圧倒されてます。

社長改めタケちゃんが会社を辞めたがる理由は次回。

熱烈歓迎！？　3

タケちゃん（もう、社長と呼ぶ気がしねぇ）が差し出したその本は最近話題の市原健（いちはらたける）の恋愛小説。作者の経歴おろか性別さえも（ただ、名前からして男性だって思うが、何年か前に本〇大賞を取った作者は男っぽい名前だけど、女だったりしたしな）不明な謎の作家の作品だ。タケちゃんはその本の名前の部分を指さして、

「これ、僕」

と言った。2歳児みたく2語文じゃ、何言ってんのか解んねぇ。

「へっ？」

「一応音だけは本名なんだよ。だけど、誰も僕だって気づいてくれないから、寂しいんだよね」

タケちゃんがそう言ってため息を吐く。

「市原櫟原（いちはらくぬぎはら）、ぜんぜん違うじゃないですか」

どこが一緒だ。

「あのね、櫟の木はいちいの木とも呼ばれていてね、みんなが読み間違えるから社名はくぬぎはらにしちゃったんだけどね、元々の読みはいちはら」

それに、櫟って画数多いから面倒だし、本名で書くのもね、とタケちゃんは続けた。

「僕の書いた文章に紀文（きぶん）ちゃんが絵をかいてさ、一緒にやろうっていってたのに……紀文ちゃんたら、一人で絵を描いて勝手に有名になっちゃうんだもんなぁ」

タケちゃんが文章を書いて紀文ちゃんが挿し絵か。それとも二人で漫画家にでもなろうとしていたんだろうか。

「タケちゃんには、会社があるだろ。タケちゃんまで引っ張ったら俺、お義父さんに殺されるよ」

まぁな、嫁にやってその上跡取りを別の仕事に持ってかれたら……思いっきり立場悪くなるよな。

「紀文ちゃんも描きながら会社手伝ってくれたらいいじゃない」
「片手間でできるこっちゃないだろ。会社潰して良いんだったら手伝うけど？」
タケちゃんの言い分に紀文ちゃんはしれっとそう返す。
「ふん、紀文ちゃんは僕よりエミナちゃんを取ったんだ」
普通そうだろ、嫁より嫁の弟取ってどうする、という紀文ちゃんにタケちゃんは口をへの字に曲げて黙り込む。なんつーか、まるでガキの会話だよ。
「ま、そう言うことだから、タケちゃんのこと手伝ってやってくれないかな。君にも譲れない夢があるのなら別だが」
　そんなタケちゃんを生温かい目で見ながら紀文ちゃんが父親の顔に戻って俺に言う。
「俺にそんなご大層な夢なんかありませんよ。社長なんてガラじゃないですけど、サポートってことなら構わないですよ」
「やったぁ、ありがとう！！」
取りあえず承諾した俺に、タケちゃん破顔で俺の手を握りブンブン振り回した。うー、なんだかなぁ。早い遅いに関係なく、俺ダメージ大きいかも。
「それじゃぁ、早速僕の見習いってことで、秘書課に異動かけとくから。今まで君がしていた仕事、入院中に全部ほかの社員に振り分けられてるからね。そのまま異動できる。ほんとラッキーだよ」
げっ、すぐに異動ってか？　それも秘書課かよ。
「後は、結婚式だね。櫟原の社長の結婚式として恥ずかしくないものにしなきゃね」
タケちゃんは、会社から足抜けができると決まったからか、上機嫌でそう言った。この分だとあっと言う間に会社投げてこられそうだな。安請け合いして良かったのかな、俺。そう思っていると、今まで黙っていた絵梨紗が、
「お姉ちゃまは結婚式かぁ、いいなぁ」
と盛大にため息をつきながらそう言った。けど、続けて言った、

「あたしも、ビクと結婚したいな」
という言葉にその場にいた全員の動きが止まった。

繰り上げ当選？

「ベス、ビクって誰？」
タケちゃんが聞き捨てならないと絵梨紗にそう聞く。それに対して、
「ああ、本名宮本美久（みやもとよしひさ）、彼女の命の恩人その２ですよ」
俺が代わってそう答えた。
「じゃぁ、幸太郎君と一緒に乗ってたっていう？　ビクって言うから、ベスの学校の友達かと思っちゃった。日本人んでしょ、何でビク？」
学校の友達って言うから聞いてみると、絵梨紗はアメリカンスクールに通っているらしい。
「ええ、ベタベタのネイティブ日本人ですよ。よしひさってのは、美しいに久しいって書くんですよ。つい最近ちょっと外人と知り合いになって、そいつがよしひさって発音できなくてヨッシャにしか聞こえないから、それなら俺が音読みでビクって呼べば良いってそいつに教えたんです」
正確に言えば、外人じゃなくて、異世界人だけどな。そう言えば、ビクって呼ぶ元になったマシュー改めエリーサは、宮本との別れ際、泣きながらよしひさと発音しようと懸命に頑張っていたっけ。そんなことを思い出していると、タケちゃんは俺をリビングの隅に連れて行くと、小声で、
「ねぇ、宮本君の方はベスの事どう思ってるの？　ベスの独りよがりとかじゃない？」
と聞いた。絵梨紗はまだ恋に恋する年頃、命の恩人に優しくされて、その気になってるようなことを心配しているのだろう。
「いいえ、残念でしょうけど、しっかり両想いですよ」
寧ろ、宮本の方がお宅の姪御さんに夢中です。
「ふーん、そうか……ベス、ホントにビクくんのお嫁さんになりたいの？」

「うん、なりたい！」
なれるの！？　とその一言に身を乗り出す絵梨紗。
「でもね、ベスが結婚できる歳になるまでまだだいぶあるし、それまでに気持ちが変わるかもしれないからさ、一応仮押さえってことで、宮本くんも一緒に秘書課に異動させるよ。このままうまく行くようなら、君の補佐をしてもらう。その方が君も気分が楽でしょ？でね、最初は君が僕のところにきてもらうつもりだったけど、絵梨紗の彼氏をパパにつけるのはちょっとさすがにアレだから、君がパパの方に回ってくれる？
思ったより、僕早く辞められそうだね、君は痛い思いをしただろうけど、僕としてはホントに良かったよ」
タケちゃんは嬉しそうにそう言うと、まだ仕事があるとさっさと帰って行った。まったく、自分が言いたいことだけ言って行っちまったぜ。

その後……

タケちゃんはそれから半年も経たない内に青木賞にノミネートされてしまった。受賞後呆気なく素性をカミングアウト。社内は蜂の巣を突いたような大騒ぎとなる。それで、タケちゃんが未だ独身であることが発覚。
「じゃぁ、デビくんは一体誰の子なんだ？」
と聞いた俺に、
「あれ？　言ってなかったっけ？」
と、薫。そこで俺たちは、デビくんこと本名櫟原英雄（いちはらひでお）（英名デビッド）は会長の３０歳年下の再婚相手、クラウディアさんとの間にできた、タケちゃんにとっては義弟だった。ちなみに絵梨紗は英雄の姉。つまり、タケちゃんの義妹。
「じゃぁ、絵梨紗は義理の叔母？　ってことは、あの二人がくっつきゃ宮本は俺の義理の叔父になっちまうってか！？」

それを聞いたとき、俺がそんな雄叫びを上げてしまったことは言うまでもない。

繰り上げ当選？（後書き）

以上で、番外幸太郎編、一段落です。

次回よりオラトリオ組の話に戻ります。わーい、やっとファンタジーだよ。

てな訳で、次は「希代の魔術師」の方でお会いしましょう。

綺麗なお嬢さんは好きですか？（前書き）

本編から、一年後位。新章の少し後くらいのお話です。

綺麗なお嬢さんは好きですか？

今日は久しぶりのお休みで、絵梨紗ちゃんとデート。
待ち合わせに現れた絵梨紗ちゃんは小花柄のチュニックに白いレースのミニ丈のティアードスカートに、編み上げサンダル。まるで絵本から出てきたみたい。僕は鼻血が出そうになって、思わず鼻を押さえた。
行き先はビルの森の中にある水族館。海の生き物には本当に癒される。特に、勇壮に勢いよく泳ぐマグロの大群は本当に……旨そう。そう思ったら無性におなかが空いてきた。それもそのはず、そろそろお昼だ。
マグロを見た後だったんで僕の口はどっちかと言えばお寿司を要求していたんだけど、とりあえず絵梨紗ちゃんの意向を聞いてみる。
「何か食べたいもの、ある？」
すると、
「うーん、ケバブ食べてみたい。確かこの辺においしい店があるって聞いたんだ」
という答えが返ってきた。ケバブというのはトルコ料理。平ったく言えば焼き肉みたいなものだ。まだまだ小学生の絵梨紗ちゃんは、ご両親か谷山先輩としかこの街にきたことがなく、歩きながら頬張るようなその店のケバブは、お行儀が悪いと食べさせてもらえなかったのだという。
その教育方針をあっさり曲げて一緒に買い食いしても良いものなのかと思わなくもなかったけど、僕の賤しい口はケバブと聞いただけで口の中に肉汁を待つ始末だったので、あっさりとその誘惑に負けて彼女の言うケバブのお店に向かい、ドネルケバブを一つずつ買い、食べながら歩いた。
半分くらい食べただろうか、その時僕は、
「ヨシ、久しぶり」

と呼び止められた。振り返るとそこには中学時代の同級生の佐々木がいた。
「久しぶり、元気だった？」
「おう、まあまあな。なんとかもぐりこんで会社員やってるよ。ヨシは」
「うん、僕も似たようなもん」
と僕たちはお決まりの挨拶を交わす。すると、佐々木は絵梨紗ちゃんに眼をやって、
「ところで、横にいるのは、妹……じゃないよな。おまえんち男ばっかだったもんな。カノジョ？」
と言った。僕は男ばかりの3人兄弟の末っ子だ。佐々木はそれを知っている。
「うん、ああ」
と、それに僕は適当に相槌を打つ。すると、僕を横目で見ていた絵梨紗ちゃんが、
「はじめまして、宮本美久の婚約者の櫟原絵梨紗（いちはらえりさ）です。宮本がいつもお世話になってます」
と言って、佐々木に頭を下げる。見るとちょっぴりふくれっ面だ。恋人として紹介してもらえなかったのが不満らしい。
「こ、婚約者ぁ！」
一方、それを聞いた佐々木は信じられないというのがありありと判る顔をしている。
「うん、一応」
別に隠したい訳じゃないんだけどね、やっぱり婚約者って響きは照れくさいから。僕がそう思いながら頭を掻いていると、佐々木は俺の腕をとって強引に5〜6メートル向こうに引っ張っていくと、
「お、お前、婚約者って、あの子いくつだ」
とひそひそ声で聞く。
「うん？　12」
この間誕生日がきたから、12歳になったはずだ。

「１２！？」
絵梨紗ちゃんの歳を聞いて佐々木がまた素っ頓狂な声をあげる。
「お前それ、犯罪だろ」
「人聞きの悪いこと言わないでよ、アブナイことなんかしてないから、犯罪じゃないよ」
佐々木の言いぐさに、僕は不満がましくそう答える。
「でも、婚約者なんだろ」
「結婚してるわけじゃないし」
「結婚できないの間違いだろ」
佐々木はそう言ってため息をついた後、ニヤリと笑うと、
「それにしてもヨシがロリだったなんてな」
と言った。
「な、何だよ、それ。そんなんじゃないよ」
「じゃぁ、政略結婚か？」
「そんな政略立てるほどの金持ちじゃないよ」
「だろ？　何にしたって、自分の半分の歳の娘と結婚しようなんて考える時点でロリ決定だろうが」
「あ、これにはさ、いろいろと深い訳があって……」
絵梨紗ちゃんはエリーサちゃんで、エリーサちゃんは最初マシューで、僕は彼女が大男だったときから好きだから、決してロリコンなんかじゃないと心の中では言いつつ、でもそんな夢の話をするわけにもいかず、口ごもった。僕の答えに佐々木は、
「ま、な。小学生ならお前より背が高いなんてことないもんな、でもあの子ハーフっぽいじゃん。その内逆転するんじゃね？」
と返す。ううっ、内心気にし始めてることをさらっと言うんじゃない！　そうさ、愛情は身長じゃない、身長じゃない……と思いたい。
「ねぇ、ビクいつまでお話してるの！」
そのうち、男たちのひそひそ話に痺れを切らせた絵梨紗ちゃんが仁王立ちで怒っている。
「あ、悪ぃ。引き留めちゃったみたいだな。それにしても『ビク』

なんて呼ばれてるわけ？　ヨシ」
すっかり今から尻に敷かれてんじゃんと、佐々木は吹き出した後、
「俺はやっぱ、きれいなおねーさんの方が良いな。カノジョにおねーさんとかいないの」
「いるよ」
「おっ、その子いくつ」
「２５」
「俺らより年上？　いやぁ、歳離れてんだな。けど、年上もそそられるねぇ、是非紹介してよ」
佐々木はにやにやしながら、僕にそう言う。
そう、絵梨紗ちゃんには確かにお姉さんがいる。僕、ウソは言ってない。
だけど、その人僕の先輩の奥さんなんですけど。先輩に殺されてもいいんなら紹介くらいはしてあげるけどね。
（先輩今、超デレモードだからね、何されても責任持てないよ。それでも良いんだったらね）
僕は心の中で佐々木にそう言って、口角をあげた。

綺麗なお嬢さんは好きですか？（後書き）

タケちゃんがほとんど作家業にいそしむ中、きりきり舞いしている美久と絵梨紗の水族館デートでした。何か、美久食い気で動いてましたけど……

で、このお話はここで閉じようと思います。新章は別枠でＲ－１５（ってほどにはならないかも知れませんが、保険です。その方が思いっきりはじけられますから）フラグを立てることにしました。

幸太郎が宗旨替えして超デレモードになっている理由がそこで明らかにされる……はず。

よろしければお付き合いください。

天使様との出会い

「さ、最悪だわ……」

私は、某高級ホテルの廊下で動けなくなっていた。着物を着ていたせいで、ホテルの毛足の長い絨毯に足を取られて、私は豪快に転んでしまったのだ。こっそり出ようと人気の少ない駐車場に向かっていたので、誰にも見られなかったのが幸いだけど。

考えたらママ、朝から挙動不審だったのよね。

「引き出しの奥からママの若い時の着物が出てきたのよ、着てみる？」

って、鼻先に突き出された。呉服屋の娘だったママはたくさん着物を持っていて、確かにそれはママの若い頃のものだったけど、持っているだけにちゃんとカテゴライズされていて、思い出したように出てきた代物じゃない。

先生の先生がお見えになるから、迂闊な格好はできないのでママも着物で行くっていうし、私も呉服屋の孫娘、基本的に着物は嫌いじゃない。

ただ、たかがカルチャースクールの発表展示会がこんな有名ホテルで行われる訳ないってことにもっと早く気づくべきだったわ。

そう、用意されていたのは、ママのカルチャースクールの発表展示会じゃなく、私のお見合いだった。向かおうとしているラウンジに展示物が一つもなく、ちょっと頭の薄くなった男性が座っているのを見てことを察して激怒した私に、ママはしれっと、

「だって、３６にもなるとお話を持ってきてくれること自体が稀なのよ。それに更紗ちゃん、最初からお見合いだなんて言ったらにべもなく断るでしょ」

と言った。だからって、だまし討ちはどうかと思う。

それで仕方なく私は席についたんだけど、この相手の男性がまた、

くてくてしててどうも煮えきらないのよね。話を聞いていてイライラしちゃう。
で、私はトイレに行くフリをしてその場を抜け出してそのまま逃走を図ろうとしていたのに……マズった。

「お嬢さん、大丈夫ですか」
その時、頭の上で声がした。
「はい、Ｙｅｓ，」
そこにいたのは、スーツを着た外人男性。下から見上げているので、豪華なホテルの照明に照らされて、まるで天使様みたいだ。あわてて英語で話そうとするけど、言葉が出てこない。
「えっ、僕ちゃんと日本語で話しましたよね。心配しないで、僕半分は日本人ですから」
すると、天使様は困ったような顔でそう言った。は、ハーフなんだ。顔から火が出そう。
「あ、すいません」
「いいえ、最近でこそあまりなくなりましたけど、結構よくそういう反応はされてるので、慣れてますよ」
天使様はそう言いながら、私に手を貸してくれた。
「イタッ」
だけど、立とうとした私は、左足首に激痛を感じた。
「ああ、足捻っちゃったみたいですね」
天使様はそのまま屈んで私の足袋を脱がせると左足を見た。あちゃー、どうしよう、やっちゃったわ。でも、
「どうしよう、早く逃げなきゃいけないのに」
思わず口を出た（最近思ってることをついつい口に出しちゃうのよね、歳かしら）言葉に天使様は、
「えっ、君も逃げなきゃいけないの？」
驚いてそう言った。でも、「も」って何？

その時、
「タケちゃん、タケちゃん！」
と焦ったような男性の声がした。
「や、ヤバい。見つかる」
天使様は舌打ちしながら小声でそう言うと、
「君も逃げなきゃいけないんですよね」
と言いながら、軽々と私を抱き上げ、
「じゃぁ、このまま一緒に逃げますか」
と、駐車場に向かってスタスタ歩きだした。

天使様との出会い（後書き）

はーい、「赤パニ」で最後に美久が言っていた武の小ネタ入ります。

武が逃げている理由は……もう、お解りですよね。

尚、これはファンタジーではございません。

ま、５０歳と３６歳の恋愛はある意味ファンタジーなのかも知れませんが。

こんなのでよかったらお付き合いください。

拉致られた？

「あ、あの……下ろしてください」
確かに一刻も早くホテルを出たかったのは事実だけど、お姫様だっこはちょっと勘弁してほしい。しかも、天使のような容貌をしていたとしても、彼は全く見ず知らずの男性だ。『天使の皮を被った悪魔』かもしれないもの。それに対して天使様は、まったく歩く速度を落とさないで、
「なぜですか？」
と聞く。
「お嬢さんは逃げなきゃならないんでしょ。僕も逃げなきゃならない。利害は一致してます」
と何とも優雅な微笑みを浮かべながら駐車場を目指す。

そして、3ナンバーの国産車の前で一旦私を下ろすと、ドアを開け、助手席のシートを可能な限り後ろに下げて再び私を抱えあげた。よく考えたら、コレ、相当ヤバいんじゃない？　私は今更ながらに逃げ出そうともがいた。
「どこに連れていくんですか！」
「暴れないでください、落ちたらもっと怪我しますよ。
そうですね、どこに行きます？
とりあえず病院に行きましょう。どこに行くかはその時決めましょうか」
天使様は暴れる私を再度がっちりと抱え込むとそう言った。
「ただ捻っただけだから、病院なんて良いですよ」
病院？　大袈裟な。こんなの、湿布貼って大人しくしてればいいのよ。
「ダメです！　今見ましたけど、お嬢さんの足、既に腫れてきてますよ。

それに、捻挫をバカにしちゃいけない。骨折と違って歩けるからって無理に歩いたら、骨と筋の間に隙間ができるんです。そうなったら、もう元には戻らない」
それに対して、天使様は即答でだめ出しをした。
「隙間ができたらどうだって言うんです」
そんなの別に外から見えないし。私がそう言うと天使様は、
「普通にしているなら何にも問題はないですよ、でも長時間歩いたり、立ちっぱなしで作業すると痛んできます。
五体満足に生んでもらった身体でしょう？　なら、大切に使いましょう」
なんて説教を垂れながら有無を言わせず、私を助手席に押し込んで自分も乗り込むと、すぐに発進した。これじゃ、拉致じゃない。
　でも、天使様はそこから何分も行かないコンビニに車を停めると、喉でも乾いたのだろうか、
「ちょっと待っててくださいね」
と言って一人で車を降りてしまった。
　このとき確かに、国産車の助手席では左足に力が入らないと難しいとは言え、どうしてもと思えば私は逃げられたはずだ。
　でも、結局私は待った。どうせ逃げたところでこの足だ、すぐに追いつかれてしまうだろうし、私にはこの天使様がなんだか悪い人にはどうしても思えなくて。

　しばらくして戻ってきた天使様の手には小さなビニール袋が二つ握られていた。一つは私の予想通り飲み物で、
「コーヒー大丈夫？」
と言われて頷いた私に手渡されたのは、甘いカフェオレだった。
「あ、ブラックとかの方が良かった？　僕、いつもこういうのしか飲めなくて、つい同じもの買っちゃったんだけど」
と言う彼が持っているのも、同じものだった。
「いえ、コーヒーなら何でも飲みますよ」

カロリーが気になるからいつもはブラックだけど、甘い方が本当は好き。
　そしてもう一つには、サンダルが入っていた。
「病院でテーピングしてもらって、このサンダルでなら松葉杖ついて歩けるでしょ」
「あ、ありがとうございます」
「それから、何か服を買いに行きましょう」
「へっ」
だけど、何故に服が要る？　私が天使様の言葉に首を傾げると、
「帯をしていると、椅子の背に身体を預けられないでしょ。そしたら足、きつくないですか」
と逆に質問してきた。
「いいえ、普段からよく着物は着ますから」
「そうですか、でもその着物はちょっと……」
この着物の何がいけないのだろう。それに対して天使様は、
「えっ、僕たち一緒に逃げるんでしょ。だったら、その着物は目立つし、もっと逃げやすい格好をした方が」
と、真顔で言う。
　逃げやすい格好って……そりゃ、確かに逃げなきゃって言ったのは私だけど、それはお見合い場所からであって、別に国外逃亡とかするつもりはさらさらないんだけど。
　それにしても、天使様は何で逃げようとしてるんだろう……そう考えたとき、私はある重要なことに気づいた。
……私、天使様の名前も知らないんだってことに。

お名前は？

「あの……今更なんですが、あなたのお名前は……」
私がそう聞くと、
「あ、ああ、すいません。僕名前も言ってなかったんですね。それは警戒されても仕方ないな。
僕は……た、いえ、マイケル。そうマイケルです」
天使様改めマイケルさんは、真っ赤な顔になってそう答えた。警戒していたこと、気づかれてたか。けれど、名前のところで若干口ごもったのが気になる。それで、マイケルさんが私に、
「あなたの名前も教えてくれますか」
聞き返したとき、私の本名は更紗（さらさ）なんだけど、
「私ですか。さらです」
と、答えた。実際、私の学生時代の友達なんかはさらちゃんって呼ばれているし、コレくらいなら偽名にはならないよね。それにしてもぴったりだな。マイケルって、大天使ミカエルの英語読みでしょ。
「さらさんか、かわいい名前だ。そのね、最近ではミシェルと呼ばれることも多いんだ。新しい義母（はは）がフランス語圏で育ったんで、マイケルとは呼んでくれなくて。義妹や義弟はそれに倣うしね。だから、マイケルでもミシェルでもどっちでも良いですよ」
と、マイケルさんは私が訝っているのを察したのか、そう付け加えた。それにしても新しい義母（はは）って……口調は全然寂しそうじゃないんだけど、そんなハードな話を見ず知らの私が聞いちゃっていいのかな。それで、
「あなたはどちらで呼ばれたいですか」
私は少し考えてそう聞いた。
「うーん、どっちでも良いけど。さらちゃんが呼びやすい方で」
するとマイケルさんはそう即答する。本当のお母様との思い出とかあるかなとか思ったんだけど、その口振りを聞くと、ホントにどう

でもいいみたいだ。
　にしても、いきなりさらちゃんって呼ぶ？　確かに、５つ？　７つかな、くらいは年上みたいだけど。

　そうこうしている内に車は近くの救急病院に着いた。休みの今日は救急外来から入る。でも、せっかくサンダルまで買ったというのに、私は相変わらずお姫様だっこのままだ。
「サンダルも履いているんだし、もう下ります」
と言っても、ダメだの一点張り。案の定、待合いの椅子に着くまでに、ナースの人から、
「事故ですか？　歩けないんでしたら車いすをお持ちしますよ」
と言われてしまう。それで、
「い、いえちょっと捻っただけですから。歩けます」
そう返して、再度着地しようとするけど、マイケルさんはそれをがっちりとホールドして、
「何度言ったら解るんですか、捻挫の方が実は骨折より質が悪いんですよ。すいません、僕は一向構わないんですが、この人が歩きたがるので、お願いします」
と、勝手にナースさんにお願いしてしまって、ナースさんはクスっと笑って車いすを取りに行ってしまった。
　そして、すぐにやってきた車いすに乗せられる。何だか格好だけは大けがしてるみたいで恥ずかしい。

　中に入ると、冷却シートをおでこに張り付けてぐったりしている小さい子とか、いかにも辛そうなお年寄りとかがいて、なんか場違いな感じがする。マイケルさんは待合いの椅子の横に車いすを停めて、
「さらちゃん、保険証持ってる？　あったら、受付に出してくるよ」
と言ったので、持っていたバッグをさぐった。今日は着物だから財布ぐらいしか持っていないけど、保険証は、カード化されてから財

布の中に入っている。車に乗れない私には、これが身分証明書のメインだし、どうせ今日は休日料金だけど、それでも保険証を出さないよりはマシ。私は保険証を取り出して、マイケルさんに手渡した。
でも、受け取った彼は、ちらっとそれを眺めると、
「へぇ、月島……あれ、コレでさらって読むの？」
と聞く。
あ、あああっ！　しまったぁ！！
……保険証って、ばっちり本名が書いてあるんだった……
私のついた軽ーい嘘は、こうして一時間も経たない内にバレてしまったのだった。

お名前は？（後書き）

実年齢５０歳のタケちゃんもとい、マイケル君ですが、ムダにバイタリティーのある彼は、更紗ちゃんに４０代前半に見られているようです。

究極の選択

「いえ、更紗(さらさ)です」
私は蚊の鳴くような声でそう答えた。
「へぇ、そう」
とだけ言うマイケルさんの視線がイタい。
「マイケルさんこそ、本名なんですか？」
私はそれに負けまいと、マイケルさんを睨みながらそう返した。
「ぼ、僕はもちろん本名だよ」
それに対して若干噛みながらマイケルさんが言う。
「じゃぁ、名字は？」
「櫟原(いちはら)。櫟(くぬぎ)の木に原っぱの原でいちはらって読むんだ」
「ホントですか」
「正真正銘、マイケル・櫟原だよ、君と違って」
そして、念を押す私にマイケルさんは少しふくれっ面でそう答えた。
だけど、
「何か証明できるものは？」
と尚も私が食い下がると、
「証明できるものって……」
と、明らかに難色を示している。怪しい……私と違ってマイケルさんの場合、絶対に携帯しているはずの身分証明書があるはず。
「免許証、見せてください」
「それは……」
案の定、マイケルさんはしどろもどろになる。
「見せられないんですか？」
「良いです。見せますよ、見せれば良いんですね」
それでも私が詰め寄ると、マイケルさんは観念したようにため息をつき、ちょっぴり逆ギレしながら私に免許証をみせた。そこには、櫟原武と書かれていた。やっぱりマイケルは本名じゃなかったのね。

だけど、予想外に日本人っぽい名前だ。
「やっぱり、マイケルさんも本名じゃないじゃないですか」
と、私が口をとがらせて抗議すると、
「ちゃんとと本名だよ。母がイギリス人だから、英名も持ってるんだ」
と言い訳する。
「だからって、何で日本名を隠すんですか？　『いちはらたけし』って（名字がちょっと難読だけど）普通じゃないですか」
そうよ、何で隠す必要があるんだろ。
「たけし……そうだね、そうだよね。僕、何を怖がってたんだろうな。うん、更紗ちゃんの言う通りだよ」
私がそう言うと、マイケルさんはそう言って笑った。明らかにホッとした様子だ。私、何か彼を安心させるようなこと、言ったかな。

「月島さん、月島更紗さん、診察室にお越しください」
そのとき、診察室から声がかかった。マイケルさんは当然のように私の車いすを押して診察室に向かう。そして私が、
「いいですよ、車いすも借りてもらったんだし、私一人で大丈夫です」
と言っても、
「慣れないとまっすぐには行かないでしょ。それに今、僕にはすることないし」
と言ってその手を離さず、お医者様の前まで押していった。
「月島さん、かなり強く捻ってるね。今日は救急でサポーターとか用意できないから、しっかりテーピングしておくけど、必ず明日整形に行ってね」
そこにいたのは、私ぐらいかそれより少し若い位の男の先生。先生は、クスクス笑いながら私に、
「それにしても、とんだデートだったね」
と言った。で、デートですとぉ！

「いえ、デートなんかじゃありません」
あわてて否定した私に、先生はなおも、
「違うの？　お姫様だっこされてきたって聞いたし、二人ともおしゃれしてるから。じゃぁ、転んだのがホテルだって言うから、お見合い？」
と続ける。お見合いと言われて、私の頭の中に、あの『髪の毛風前の灯火』さんが浮かぶ。
「お見合いなんかじゃありません！！　あたっ！」
私は、その発言に、思わず立ち上がって抗議したとたん、足に激痛が走って車いすに逆戻り。
「失礼じゃないですか、ここは他人のプライバシーにまで関わるところなんですか」
なんなら法的処置も辞さないと、マイケルさんもえらい剣幕で怒る。
「いや……お二人を見ててほほえましいカップルだなと思ったから言っただけで。そうじゃないんだったら謝ります」
すると、先生は相変わらずへらっと笑いながらそう答えた。おまえ、口では謝ってるけど反省してないだろっ。
　だからといって、休日の混んだ病院でこれ以上ゴネるのもなんだし、私は頭だけ軽く下げて、隣の処置室で足にミイラのようなテーピングをされて、かいほうされた。でも……
「あの……できたら松……もごもご」
テーピングを受けながら、松葉杖を借りようとした私に、マイケルさんは私の口に手を当ててそれを制した。そして、耳元で囁くように、
「ここで借りたら、また返しに来ないといけないよ。いいの？」
と言った。あのへらこん医師が整形医かどうかはわからないけど、顔なんか合わせなくっても、電車の沿線が違うからかなり遠回りしないとこれないし、できれば来たくない。私は頭を振った。それを見てマイケルさんはクスっと笑う。
　ん？　何でそこで笑う？？　私、なんか大事なこと忘れてるよう

な……

あああーっ、松葉杖を頼まないってことは、またあの『お姫様だっこ』をされて帰るってことなの！？

イヤだぁ！　返しに来るのもイヤだけど、お姫様だっこはもっとイヤ。だけどまてよ、もう既にやられてるんだから、今更もういいか……いやいや、やっぱ恥ずかしいし。

さぁ、どうする？　私。

究極の選択（後書き）

タケちゃんが名前を言わなかったのは、音だけだと、櫟原武が作家市原健につながるのを怖れてでした。

なので、更紗ちゃんが『たけし』と読み間違えてホッとした訳ですね。

青木賞受賞時は、タケちゃんが元櫟原の社長であることをワイドショーなんかでさんざんやってたんですが、もうそれからずいぶん経っていますし、仕事をしている更紗ちゃんはあんまりそういうものを見ませんので知らなかったのでした。

紳士の国の血？

プルプル震えながら首を振る私に、ナースさんが、
「あら、痛かった？」
と聞く。
「あ、いえ」
痛くはないです。あ、ある意味痛いかも……心が。それで、
「そうですね、テーピングもしたんだし、肩、貸してくだされば」
私がそう言うと、マイケルさんは、
「ムリ」
と秒殺した。
「何でですか」
そんなに私をお姫様だっこしたいんですか、マイケルさん。だけど、マイケルさんは私の質問には答えず、
「じゃぁ、聞くけど更紗ちゃん、何ｃｍ？」
と、いきなり私の身長を聞いた。
「ひゃく、１５７ｃｍ」
本当は１５６．２ｃｍだけど。マイケルさんは、やっぱりそれくらい？　と言った。
「僕、１７８ｃｍあるんだよね。肩を貸すのってある程度同じぐらい身長ないと、高い方がきついんだよね」
その差２１ｃｍ。私がマイケルさんの肩に手を回すとなると、マイケルさんはずっと中腰で歩くことになる。それは確かにハードかも。
マイケルさんは、
「それに行きほど大変じゃないと思うよ」
と私に言った後、ナースさんに向かって、
「あ、後で返しに来るんで、この車いす車まで押していって良いですか」
と聞いた。おおーっ、その手があったか。もちろんそれは快諾され、

ちょっと一安心。
　処置室を出てしばらくすると、会計に名前を呼ばれた。するとマイケルさんは、
「ちょっと待ってて、僕が払ってくるから」
と、当の本人の私をおいて一人でさっさと会計に行く。私は慌てて慣れない車いすを漕ぎながら後を追った。
「マイケルさん、私が払いますから」
別にマイケルさんが私を怪我させた訳でもないのに払ってもらう筋合いなんて全然ないから。なのに、マイケルさんは、
「いや、病院に連れてきたのは僕だしね。ここは僕が払うよ」
と、まるで当たり前のようにお金を出そうとする。さすが、紳士の国の血を引いてる、フェミニストって奴ですか。私が、
「この怪我は私の不注意で、マイケルさんには何にも関係ないですから」
と言っても、
「何で？　一緒にいる女性にお金なんて出させたりできないよ」
と、まったく払う姿勢を辞さない。何度か押し問答の末、自由に身動きできない私が押し負けた。
　駐車場まで車いすを押しながら上機嫌のマイケルさん。今日会ったばかりの他人の治療費払って、何がそんなに嬉しい。
　私を乗せた後、玄関先に待機していたナースさんに車いすを返して、マイケルさんはどこに行くとも言わずに走り出した。

キ、キャラ違うんですけど……

マイケルさんは信号待ちの間に素早くインカムを取り出すと、どこかに電話をかけた。スマホは乗った直後に専用のポートに差し込んである。たぶん、普段からこんな風に電話することが多いのだろう。

「……ああ、櫟原だが。今からそちらに向かうんで、駐車場に車いすを用意してもらいたい。連れが怪我をしているんで。じゃぁ、15分後ぐらいにそちらに着くのでよろしく」

それにしても、いったいどこに行くつもりなのだろうか。でも私は、電話のマイケルさんの口調が思いの外高圧的なのにびっくりして、それを聞くことができず、マイケルさんも何もしゃべらない。電話のためのか、カーオーディオのボリュームを切ってある静かな車内には微妙な空気だけが流れていた。

そしてついたのは都内の有名デパート。駐車場に着くと、デパートの偉いさんらしき人が、車いすを持って待ち構えていた。

「櫟原様、いらっしゃいませ。お待ちしておりました。こちらのお嬢様をお乗せすればよろしいでしょうか」

デパートの人はマイケルさんにこやかに挨拶をすると、素早く助手席に回り込んでそのドアを開けたけど、

「いや、彼女は私が乗せる。それよりも彼女が動きやすい服を見繕ってもらいたいのだが」

「かしこまりました」

マイケルさんはこちらに回り込み、私を抱き上げると、デパートの人が持ってきた車いすに私を座らせた。デパートの人は、部下の人らしき男の人に、

「和光さんを外商に」

と指示を出した。すぐさま部下の人が和光さんを呼びに走って行く。

そして、

「すいません、櫟原様ご自身のお買い物だと思いましたので、中村を来させたんですが」
と恐縮しながら頭を下げた。
「いや、女性の買い物だと言わなかった私が悪い」
「とんでもございません。お電話を頂いたとき、まずこちらがお伺いするべきでした」
大体、デパートの人って低姿勢だけど、この人の姿勢は更に低いような気がする。それだけマイケルさんが普段このデパートで買い物しているのだって解る。でも、相変わらずマイケルさんの口調は高圧的で、私には話しかけてもくれない。どうしちゃったんだろう。
いつもとは違うエレベーターで最上階に上がると、そこは応接室のようなところだった。これが噂の外商部って奴なのね。私には一生縁のないとこだと思っていた。
デパートの人が両開きのドアを開けると、そこには、既に和光と書かれた名札をした女性が衣類ハンガーに服をいっぱい吊り下げて待機していた。そして、
「初めまして、和光と申します」
と完璧な角度でお辞儀をした後、
「お御足のことを考えますと、ストッキングを穿くことも難しいと思いまして、パンツスーツを中心にご用意させていただきました。トップスは7号でボトムスは9号でよろしいでしょうか？　それでしたらこれなどいかがでしょうか？」
とたくさん吊ってある中から、ワインレッドのものを取り出す。たぶん私が今着ているエンジに小花柄の着物を見てのチョイスだろう。でもこれは、ママから『見合い』の為に着せられただけなんだけど。それに気づいているのかどうかは別として、和光さんはさらに私が目で追っているの場所を素早く見て取って、
「それからこちらなどもよろしいかと」
と、目線の先にあったスカイブルーのものも取り出した。
それにしても、体型がわかりにくい着物を着て車いすに座ったま

まの私を見て、どうして即座にサイズが判る？
「それでいいのか」
とマイケルさんが聞く。まぁ、男の人は女の人の服になんか興味ないもんね。私はそれには答えず、
「うーん……」
と言いながらプライスタグを探す。見た目からして、私が普段バーゲンのワゴンで漁っているような奴の3倍？　5倍？？　もっとかなと思いつつ。
　だけど、残念ながらタグは外してあるのか、はたまた最初からこんなとこに用意するものにはついていないのか見つからなかった。しつこくプライスカードを探し続ける私に、
「決まらないなら、両方買えばいい」
マイケルさんはこともなげにそう言った。折角私はどちらが安いかで品定めをしてるっていうのに、あなたはその努力をムダにするって言うんですか？
　大体、私はちゃんと着物を着ているんです。新たに洋服を買ってもらう必要性を感じません。しかも、こんなフランスだかイタリアだかわからない高級ブランドの服、買ってもらう謂われはありません。
　だけど、私は声高にそのことを言うことができなかった。ここにいるマイケルさんは、何だかさっきとは別人かと思うくらいに顔つきまで違っているし、なんだかんだと言ってもここまで来てしまった手前、私がギャーギャー騒いだらマイケルさんに恥をかかせてしまうような気がしたからだ。
　結局、
「お嬢様はお色が白いですから、この方がお顔映りがよろしいかと」
という和光さんのトークに押し負けて、エンジ色に決定。男性陣にはしばしご退出願って、私はそのパンツスーツに着替えた。
　ただ、その時、ぜんぜんそれまで話題にもしていなかったファンデーション（ブラ・キャミソール）までコーディネートして差し出

されたのには、驚きを通り越して寒気すら感じた。さすがデパートの外商員、怖そるべし。

もちろん、そのサイズがブラに至るまでジャストフィットだったのは言うまでもない。

キ、キャラ違うんですけど……（後書き）

病院を出た途端、人が変わってしまったような武君。

さて、その真意は？

実は国際級の犯罪者？

「ありがとうございました！！」
最初に応対してくれた人はもちろん、和光さん、中村さん、果ては呉服部門の人まで深々とお辞儀する中、マイケルさんの車は駐車場を滑るように走り出した。そして、そこを出てしばらく一般道を走った後、はぁーっと大きく息を吐いた。そして、
「素敵だ。本当によく似合っている」
と目を細めながら言ってから、ぷっと吹き出した。それ見て、私は、
「ウソつき」
と言ってマイケルさんを睨んだ。
　どうせ本当は全然似合ってないって思ってるんでしょ。解ってますよ、チビ（それでも同世代の中では、そんなに低くないのよ）で童顔の私には、こんな大人のパンツスーツなんて似合いませんよーだ。するとマイケルさんは慌てて、
「ウソじゃないさ。もちろん、今まで着てた着物も本当によく似合っていたけど、何て言うのかな……落ち着きすぎてるって言うのかな」
と取り繕う。でも、それって暗に私が童顔だってことを肯定しただけ。フォローに全然なってません！　私の表情が硬いまま返事もしないので、マイケルさんは、
「ごめんごめん、笑ったちゃったのは更紗ちゃんのせいじゃないから。僕、実はあそこ苦手なんだよね、ほんとデパートって疲れる。でも、女性用の服を売ってるとこなんて他には知らないしさ」
と言い訳を始める。
「苦手なら行かなきゃよかったじゃないですか。婦人服を売ってるとこなんて、デパートじゃなくても、それこそ上野にだって、浅草にだって、巣鴨にだってありますよ」
それにデパートでだって、あんな外商みたいなとこじゃなきゃ、も

っと買いやすいですよ。でも、マイケルさんは、私の台詞の若干の棘にも全く気づかず、
「そりゃあるだろうけど、僕、女性の服なんて買ったことないもんでも、更紗ちゃんってすごいよね。あの着物、収納用の紙だけもらって、たったと自分で畳んじゃうし」
と、暢気に私のヨイショを始める。
「畳紙（たとうがみ）です。畳む紙って書いて畳紙」
マイケルさんみたく、半分イギリスの血は入ってませんからね。１００％　ネイティブ日本人だし、呉服屋の孫娘をなめんなよ、小学生の時の浴衣から畳み方はママからしごかれてるんだから。
『きちんと畳んでおかないと、着物の価値が下がる』
って、そりゃもう煩いのよ。マイケルさんは、それを聞くと、
「へぇ、畳紙っていうの。畳う紙、で畳紙。たとうしとは言わない。あ、そうか、『し』って音読みだから……
あ、じゃぁ、こんな展開なんかも面白いよね」
と、ぶつぶつと訳の分からないことを言い出し、
「ねぇ、更紗ちゃんこれからカラオケ行かない？　ネッカフェのペアシートじゃ、更紗ちゃんはやることないだろうし、変にパソ使うと足つくかもしれないもんね」
と私をカラオケに誘った。そう言えば、マイケルさんは何かから逃げてたんだっけ。
　でも、ネッカフェのパソで足がつくって何。実は国際級の犯罪者か。あ、だからデパートで普通に買い物できなかった？　いやいや、国際級の犯罪者は外商のコネとか持ってないでしょ。
　私がそれに返事しないでいると、しばらくしてマイケルさんはある有名なカラオケボックスのチェーン店に車を停めてダッシュボードを開けると、
「更紗ちゃん、これ持っててくれる？」
と携帯ゲーム機のようなもの（だけど、ケースがそれっぽくなかった）を取り出して私の膝に乗せた。そして、もうそれがお決まり事

のように私をお姫様だっこすると、そのカラオケボックスの中に入っていった。

実は国際級の犯罪者？（後書き）

武君……うん、年齢詐称という意味では犯罪かもですが、国際級ではありません。

ちなみに彼が更紗ちゃんに渡したのは、私も使っている『アレ』です。

不思議なカラオケボックスの使い方

マイケルさんはとりあえず私をその辺の待合い用のいすに座らせ、手続きをした。ちゃんとカードを出しているところを見ると、ここ（あるいは系列店）の常連らしい。確かに、声は高めだけど、悪くはない。だったら歌うのは……洋楽なのだろうか。だとしたら、私はやっぱり退屈で寝てしまいそうだ。

それで案内されたのは、入り口手前から三つ目のごく普通の部屋。

「ＶＩＰルームじゃないんですね」

と言う私に、

「ＶＩＰルームが良かった？　二人ならここだって充分広いし、あっちのソファーは柔らかいから、足、きついかもしれないよ」

と言うマイケルさん。さりげなく足を気遣ってくれるのは嬉しかったけど、ＶＩＰルーム利用したこと、やっぱりあるんかいっ！　と、関西のお笑い芸人さんみたいなツッコミを心の中で入れる。

マイケルさんは、私からさっきの携帯ゲームもどきを受け取ると、

「更紗ちゃん、何でも良いから歌ってて。あ、おなかが空いてるんだったら、好きなもの注文してくれて良いよ。僕用にカフェオレも注文してくれると嬉しいな」

と言って、携帯ゲームもどきのケースを開く。中身は、キーボードが折りたたみになっている極小サイズの、パソコンだ。マイケルさんは起動するとすぐ、

「これ、フラァさんの回だ」

と満面の笑みで訳の解らないことをつぶやいて一心不乱にパソコンのキーをたたき始める。私はリモコンでとりあえずマイケルさんのカフェオレと、自分の分のミルクティーを注文するが、そこで動きが止まる、何を歌っていいのかわからない。それを見て、

「あれ、更紗ちゃん歌わないの？　カラオケしない人だったのかな」

だったら、ネッカフェとあまり変わらなかったかなと、マイケルさんが申し訳なさそうに言う。
「い、いえ。そんなことないですよ」
むしろ、学生時代の女友達とは今でもよく行くほうだ。ただ、今はもう大抵子持ちになって、子連れでくる彼女らとは……いやそうじゃなくても、昔から歌うのはコアなアニソン。とてもマイケルさんが知ってるとは思えない。私がもじもじしていると、マイケルさんは、
「いつも歌ってる曲でいいんだよ。普段はさ、一人でそのまま流してBGM代わりにして書くんだけどさ、折角歌える人がいてくれるんだもの。僕、更紗ちゃんの歌、聞いてみたいな♪」
小首を傾げてさらっととんでもないお願いをする。仕事の書類だか何だか知らないですけど、マイケルさん、会員証まで作ってそんな寂しい使い方してるんですか？　それに頼むから、その破壊力満点の笑顔は止めなさい、破壊的な笑顔は……って、一体マイケルさんに何を破壊されるんだ？　私は、
「あ、いえ、その……」
と、意味のない言葉を繰り返すしかなかった。すると、マイケルさんは（自分がそのハードルを上げてるとはついぞ気づかず）軽くため息をはくと、
「ま、いっか。じゃぁ僕が好きな曲をBGMで何曲か入れとくから、その間に決めといて」
と言って、選曲用のタッチパネルをとって、IDとパスワードを入れた。BGMで歌っていないとか言うけど、相当使い慣れているぞ、こいつ。
　そして、私は彼が入力を終えて表示された曲名を見てまたびっくり。
「えっ、『月夜の伝説』……」
思わず曲名を口に出してしまったほどだ。そ、それって、もしかして、いや、もしかしなくてもあの大ヒットアニメ、「ビューティー

戦士ムーンライトレディ」の。しかも、第二作目の劇場版エンディングテーマじゃないの！　どこからこんなマニアックな選曲が。……いや、私も大好きで絶対に一回は歌う曲だったりするんだけどね。よもや、天使顔のハーフ男性から出てくるラインナップとは思わないじゃない。

「更紗ちゃん、知ってるのこの曲！　じゃぁ、歌って歌って！　やった、この曲歌っているの聞くのは、ＣＤ以外では初めてだよ！！」なお悪いことには、マイケルさんの耳は私が曲名に反応したことをしっかり捉えていて、喜々として私に歌うことを強請る。その様はまるで幼稚園児が先生に絵本を読めと言ってるかのよう。どうしようかな……

ええい、歌っちゃえ！　もう、足挫いた時点で、一番格好悪いとこ見せちゃってるんだもん。それに、この曲なら歌詞のテロップを見なくても歌えるし。私はマイクをひっつかんで、早速流れてきたスローバラードを歌った。

歌い終わった後、マイケルさんはすごい勢いで拍手をした。

「更紗ちゃん、上手いよ。ＣＤみたいだった。僕、もっと聞きたいな」

と真っ赤な顔でまくし立てた言葉も、歯の浮くような台詞なのに、マイケルさんが子犬のような瞳で言うので悪い気はしない。何を歌おうかと思っていると、

「ねぇねぇ、じゃぁ、この曲は知ってる？」

と、マイケルさんがまた履歴から一曲入れた。それは『ＧＯＬＤ』と言う曲で、某公共放送の魔法少女アニメの、３番目のオープニングテーマだ。私は返事の代わりに、マイクを握った。

それから2曲ほどはマイケルさんが入れたけど、後は私がタッチパネルを取り上げて自分で入れて歌いまくった。マイケルさんは、「うわっ、『雲へ……』！　それ、「マリオの白い雲」の主題歌だよね。更紗ちゃんもマニアックだね。「子供名作劇場」で、唯一原

作を読んだことがなかったし、設定何気に暗かったじゃん」
など、その一曲一曲すべてに反応した。けど、どっちがマニアックなのよ、その言葉そのまま返すよ。（作者注：五十歩百歩だと思いますけどね）
マイケルさんは、私の歌にそうやってコメントを差し挟みながら、滑らかにキーボードを操っていく。
そして……
「終わったぁ～、更紗ちゃんありがとう。助かった。おかげでものすごくさくさくっと書けたよ」
と言いながらマイケルさんが大きく伸びをしたのは、三杯目の飲み物のウーロン茶も飲み終わって、そろそろ本格的に声が枯れるかもという2時間半後のことだった。
マイケルさんは軽く欠伸をして、プチサイズのパソコンの電源スイッチに手をかける。私は何となく覗き込んだディスプレーに現れた終了画面に目を瞠った。
「じ、自動戦士バンタム！？」
それは、私でも知っている往年のアニメ、「自動戦士バンタム」の一コマだった。その後、設定資料めいたモノが一瞬映って電源が切れる。徐にマイケルさんがパソコンのふたを閉めると、そこには「バンタム」のロゴがしっかりと入っていた。ひえーっ、「バンタム」仕様のパソコンなんて始めて見た。
「バンタム知ってるの？　オンエアされた頃はまだ生まれてなかったんじゃない」
すると、マイケルさんが驚いてそう聞く。
「リアルでは見てないですけど、何度も再放送してますから」
そうよ、こんな国民的なアニメ、知らない方がおかしい。（作者注：それは更紗ちゃんもアニオタだからだと思いますけど）
「僕、ロボットアニメとか基本的にあまり好きじゃないんだけど、これは別。ものすごく人間がちゃんとかかれてたから」
マイケルさんは照れながらそう言った。そして、少し間を空けて、

「……大好きなんだ」
と言った。私の胸はそれだけで跳ね上がった。絶対にそれは、私じゃなくて「バンタム」のことなんだけれど。
今日のお見合い……マイケルさんだったら良かったのにな。そしたら、私もあんな風に逃げ出したりしなかったのに。

「ま、ここにいるのも何だし、食事に行こうか。更紗ちゃん飲み物ばっかで何も食べてないから」
と言うマイケルさんに従って、と言うか依然歩かせてもらえない私にはそこに選択肢はなく、マイケルさんは私にまた「バンタム」パソコンを渡すと、私をお姫様だっこしてカラオケルームを出た。
だけど、その足がエントランスにたどり着く直前で止まる。
「あーあ、見つかっちゃった……」
と小声で囁くように言うマイケルさんの目線の先には、彼のことを睨む、年は２５？　３０？　判らないけど、彼よりまだ背の高いイケメン男性がいた。　私はそのイケメン男性の、
「親父、そう毎回毎回逃げてんじゃねぇ。こっちは折角のたまの休みなんだぞ」
という台詞に固まった。

あ……こんなに大きなお子さんがいるんだ。

そりゃそうだよね。こんなに素敵な人なんだから……

不思議なカラオケボックスの使い方（後書き）

ここでのアニメタイトルと、曲名はそのまま出せないので伏せ字にせず、実在のモノをもじってあります。

さて、皆さんは元のアニメが何だか分かりますか？　（そんなもんどうでも良いって？）

でも、「自動戦士バンタム」って弱そ～

ちなみに私が持っている『アレ』もガ〇ダム仕様です。この原稿も『ソレ』で書きました。（はははは）

マイケルさんの家族

逃げ回っていたマイケルさんを捜していたのは、彼の息子さんだった。マイケルさんはプリプリ怒っている息子さんに、
「だって、じっとしてても展開が浮かばなかったんだもん」
と、小さな子のように、口をとがらせて答える。息子さんは、
「おまけに他人様怪我させてあちこち連れ歩くなんざ、どういう了見なんだよ。すいません、義父(ちち)がご迷惑をおかけしまして。あ、俺はこのボンクラ親父の息子で、幸太郎と申します」
と、マイケルさんにだっこされたままの私にそう言って挨拶した。
「違うよ、幸太郎君」
「何が違うよ」
「違います！　マイケルさんは私が足を挫いて動けなくなっているのを助けてくださって、親切に病院に連れて行ってくださっただけです」
マイケルさんに怪我をさせられたなんてとんでもない！　これは、正真正銘私が一人で転んだんだもん、情けないけど。
「ま、病院は良いとして、そのあとデパートで服買って、ここに来る必要があるか？　おかげで、あのデパートならここだって渡りを付けられたんだけどさ」
「あ、デパートでバレたんだ。しまった、なら更紗ちゃんの言うように巣鴨に行けば良かった」
「へっ、巣鴨？」
デパートで足がついたと聞いて、マイケルさんはそう言って、舌打ちする。でも、巣鴨と言うと幸太郎さんは驚いた顔をした。
いや、私は別に巣鴨に行きたかった訳じゃない。もっと庶民的なところでお買い物できないかって言っただけだ。
巣鴨に素敵なお店がまったくないとは言わない。だけど、ジモティーじゃない私やマイケルさんにそれを見つけられるかどうかわか

らないじゃない。
「あそこから一番近いなじみのボックスったら、ここだろ？　女連れならどっかにしけこんだのかもとも思ったけど、店長から連れの女性が怪我してるって聞いてたから、親父の性格じゃそりゃないなって思った」
続いて幸太郎さんはマイケルさんをここで見つけた根拠を説明する。あの人、偉そうなと思ってたけど、やっぱり店長だったのね。それにしてもしけこむって……か、顔が熱い。
「お持ち帰りだなんて、僕はそんなことしないよ。幸太郎君とは違うんだから」
マイケルさんもムキになって反論する。だけど、
「ひっでぇ、人が血眼になって探してたってのにその言種はねぇだろ。んなこと言うんだったら、奏禁止令発動するぞ」
マイケルさんは幸太郎さんの言う、『奏禁止令』を聞くとぴしっと固まってしまった。そして、
「えーっ、かなちゃん禁止令は勘弁して。かなちゃんのあのかわいいほっぺをぷにぷにするのが今の僕の生き甲斐なのに。はい、ごめんなさい、僕が悪かったです」
と、ペコペコ謝りだす。それを見た幸太郎さんは
「解りゃ、良い。解りゃ」
と、したり顔でそう言って笑った。
だけど、そんな微笑ましい親子（ちょっと立場が逆転してる感は否めないんだけど）の会話に、私の心は冷えていった。
会話の内容から察するに、幸太郎さんの言う『奏ちゃん』は彼のお子さん。つまり、マイケルさんにはお孫さんにあたるのだろう。
そして極めつけに、
「なぁ、これからしばらくためないでくれよな。来月は結婚式なんだぜ。父親不在の結婚式なんてしゃれになんねぇ。
それにしても、女どもってどうしてああ、結婚式でもりあがるかねぇ。英雄や奏の服にまで大騒ぎだしさ、お袋なんて、当日の薫の支

度ができないってぶーたれてやんの。新郎の母親が新婦の支度ができるかってぇの」
と、幸太郎さんの口から、彼の母親（つまりマイケルさんの奥さん）の話が出てきて、
「そりゃ鮎さんはプロだからね。櫟原（くぬぎはら）が絡んでなきゃ、もう少し彼女の自由にさせてあげるんだろうけど」
マイケルさんは済まなそうに幸太郎さんにそう返す。その口振りでマイケルさんが奥さんのことを愛されているのがしっかりわかってしまう。幸せな幸せな家族の情景。そこに私が入る隙は一ミリもない。
　そうだよね……一人寂しくカラオケをBGM代わりにしながら仕事してるからと言っても、だからってそれが独身の証明にはならないのだから。
……って、私何を期待していたんだろう。マイケルさんは今日会ったばかりの人、名前以外お互い何も知らないのに。

マイケルさんの家族（後書き）

幸太郎登場で、更紗ちゃんは一気に誤解の嵐。一気に屋上まで上ってしまいそうな勢いです。

マイケルさんの仕事

「っと、こんなとこでムダ話してる間にちゃっちゃと書いてもらわなきゃな。えーっと……ところであなた、何てお名前でしたっけ」
ちょっと脱線しかかっていた話を元に戻すように、軽くため息をはいて、幸太郎さんがこう言った。
「月島……月島更紗です」
やだ、幸太郎さんにだけ挨拶させといて、自己紹介がまだだったわ。
「じゃぁ、月島さん。まだお時間大丈夫ですか？　大丈夫だったら、俺の方の車に乗って欲しいんですが、親父の人質として」
人質って、何？　その物騒な言い方。さっきから幸太郎さんが『書け、書け』と言うところをみると、マイケルさんは作家さんか何かなのかな。
「私は……帰ります。家族が心配するんで」
それに、今日あったばかりの私になんて、人質効果なんてありませんよ。
「ねえ、更紗ちゃん、逃げてるって言ったよね。家に帰って大丈夫なの？」
そしたら、マイケルさんが、そう言って私を心配してくれた。
「ええ、マ……母とケンカしただけですから」
そう言いながらママの顔を思い浮かべる。うう、怒ってんだろうなママ。帰りたくないと言えば帰りたくないよぉ。でも、ママが騙してお見合いなんかするのが悪いんだからね。
「えっ、お母様とケンカしたけだったの？　じゃぁ、急に更紗ちゃんが消えて、お母様心配してるかな。ホントいきなり連れ出しちゃってごめん、元のホテルまで送るよ」
でも、私がママとケンカしただけだと聞くと、マイケルさんは蒼くなって、土下座しそうな勢いで謝る。マイケルさんが悪いんじゃないよ。逃げたいって言ったのは私だもの。

「そうだよ、バカ親父。下手すりゃ誘拐だぞ。心配するな、月島さんは俺が送っていく。だから、親父はさっさと続きを書く！」
「ヤダ！　更紗ちゃんは僕が送って行く。更紗ちゃんのお母様に僕がちゃんと謝らなきゃ」
「何だだこねてんだよ、会社俺に投げてまでやりたかった仕事だろっ！」
私を送ると譲らないマイケルさんに、幸太郎さんはぴしっとそう言った。それにしても会社を投げてって……マイケルさんやっぱり社長さんだったんだ。それも結構大きい会社じゃないだろうか。だったらあの店長の態度も解る。
「ちょっと待ってよ。原稿ならちゃんとできてるよ。さっき、ここで書き終えたから。
更紗ちゃん、幸太郎君にそのバンタム渡して」
私はそう言われてあわててバンタムを幸太郎さんに渡した。私は行きと同じように既に待合い用の椅子に座っていたんだけど、バンタムは握ったままだった。幸太郎さんはそれを受け取るとホッとした表情になって、
「それを先に言えって。で、どうすりゃいい？」
とマイケルさんに聞いた。
「マイクロSDだとどっか行っちゃいやすいし、何が入ってるか書きにくいんで、普段はUSBメモリーに焼きなおして渡してるんだけど……」
とUSBメモリーをポケットから取り出す。
「さっき書いたからまだ、最終話は入れてないんだ」
「最終話を一旦ドキュメントにぶっ込んで、ここに落としゃいいんだろ？」
「うん、でもパソコン持って歩いてないよ」
「俺の車に乗ってるよ。OKわかった。んじゃ、親父は親御さんに捜索願いを出されない内に早く行ってこい」
すべての段取りを聞き終えると、幸太郎さんはそう言って、親指を

前に立てて笑った。
「うん、ありがとう。じゃぁ、お願いね」
「じゃぁ月島さん。俺はこれで。親父を頼みます」
幸太郎さんはそう言うと、感涙もので抱きつかんばかりのマイケルさんをあっさり振り払って、とっととカラオケボックスを出て行った。
　でも、幸太郎さんが最後に言った『頼みます』ってなんだろう。幸太郎さんみたいな立派な息子さんもいて、（たぶん）すてきな奥さんもいるのに、何を私に『頼む』必要があるの？

マイケルさんの仕事（後書き）

はい、武君の仕事がバレました。だけど、家族のことはまだ絶賛誤解中。

ホントは月島家まで着く予定でしたが、時間切れ（リアルの）で次回に続く……

傷付いた瞳

「じゃぁ、送っていくよ。あのホテルでいい？」
幸太郎さんの『頼みます』発言に、戸惑いＭＡＸになっていた間に、マイケルさんはカラオケの支払いを終え、私を再び抱き上げた。
「いえ、もうさすがにもうあそこにはいないと思います」
それに対して私は首を振ってそう答えた。ホテルのラウンジになんてそう長い時間いられる訳がない。
「とにかく、どこにいるか電話してみたら？」
と言ってくれるマイケルさんに、私は、
「今日は携帯を置いてきたんです」
と答えた。
実は着物用のバッグは小さいし、旦那持ち子供持ちの友達たちが休みの日に連絡なんてしてくることなんてないから、携帯置いてきたのよね。
「じゃぁ、僕のでかければいいよ。きっと心配されてるから。それで怪我をしたことをまず話せば、少しは怒られるのもマシかもしれない」
いきなり現れるよりずっといいよ、とマイケルさん。
「でも、携帯はメモリーに頼ってるから番号なんて覚えてないです」
「じゃぁ、自宅にかけて。そこにいらっしゃらなかったらホテルに戻ろう」

それで私は、おそるおそる自宅に電話した。そしたら、いつもはなかなかでないのに、電話はたった3回でつながった。
「はい、月島です」
ママの声が少しうわずっている。きっと知らない電話番号だからだ。いつもなら知らない（しかも携帯の）番号の電話には、ママは怖がって一回目から出ないのだ。

「……私……」
「更紗ちゃん？　更紗ちゃんなの！？　あなた、無事なの。どこにいるの」
ママは私だと判ると、矢継ぎ早にそう畳みかけた。その口調は怒っていない。心底心配してるって感じだ。
「私ね、ホテルで足挫いちゃって」
「ホテル足を挫いた？　でも、ママホテル中探したのよ」
「うん、それで偶然通りかかった友達が、病院に連れってってくれたの」
とても見ず知らずの人とは言えなかった。
「じゃぁ、今は病院？　どこなの、正巳（まさみ）が来てるから迎えに行かせるわ」
げっ、正巳が来てるって？　正巳というのは私の二つ下の弟で、一年半前、姉の私より先に結婚した。
　それに、あいつは絶対に私を姉だと思ってない。いつも『更紗』って呼び捨てだし。
「ううん、その人がついでに家まで送ってくださるって。もう、車にも乗ってるの」
ああ、マイケルさんの車で送ってもらえて良かった。じゃなきゃ、今日も私を見つけた途端、指さしてさんざんにバカにされるに決まってるわ。
「そう、ならここで待ってればいいのね。もう、本当にドジなんだから」
そう言うママの声ちょっと涙声で、私はがんがん怒られるよりぐっときちゃった。
「今日は、……ごめんね。あと、大変だったでしょ」
おかげで、素直にママに謝れた。そしたらママは、
「良いわよ。ママが更紗ちゃんに内緒であんなお話進めたんだし、あなたが怒るの無理ないわ。
それに渋井さん、バツイチだったのよ。子供までいるって言うんだ

もの。きっとバレなきゃずっと隠し通すつもりだったんだわ。
騙されたと思って、ママもテーブル叩いて帰ってきちゃったわよ。
ホント、更紗ちゃんが逃げ出してくれて正解」
と、あの後の顛末を語りだす。
　えっ、あの人バツイチだったの？　ふーん。私はそれを聞かされてもべつに衝撃は受けなかった。まぁあの人なら奥さんも逃げだすだろうなぁなんて、妙に納得しちゃったし。おかげで、怒られずに済んだのだから、むしろラッキーかもしれないと思ったくらいだ。
「混んでなければあと15分くらいでつくから」
私はそう言って電話をきった。

「どう、お母様怒ってなかった？」
「ええ、とっても心配してました。電話ありがとうございます。かけてよかったです」
「だろ？」
そう言いながらマイケルさんは、今スマホに入れた電話番号を今度はナビに入れて我が家を検索する。出てきたデータを見てマイケルさんは、
「良かった、この辺なら分かるよ。着いたら声もかけないで病院に連れていったこと、一緒に謝ってあげるね」
と言った。
「こちらの方がお世話になったのに、そこまでしてもらったら悪いです」
結局、病院から服にカラオケ代まで全部出してもらっちゃったもんね。すると、マイケルさんは、
「だって、僕また一緒にカラオケ行ってほしいから。更紗ちゃんのお母様に嫌われたらもう行くなっていわれちゃうでしょ。じゃぁ、これ僕の携帯番号。家に帰ったら、更紗ちゃんの携帯から電話して。僕が数字で入力するとどうしてか番号間違っちゃうんだよね。だから、更紗ちゃんがかけてくれたらそれ、登録するから」

ニコニコとそう言った。でも小学生じゃあるまいし、ママに言われたからってカラオケに行けなくなる歳でもないんですけど。
そうね、お子さんはもちろん、お孫さんまでいるマイケルさんにとっては、私なんて小さな子供とそんなに変わらないのかもしれない。だから奥さんがいても簡単に誘えるんだ。
急に黙ってしまった私に、
「どうしたの、長い時間振り回して足痛くなっちゃった？」
と心配げにのぞき込むマイケルさん。私は黙って頭を振った。

妙な沈黙が流れる中、マイケルさんの車はウチの家にたどり着いた。あ、家の前に誰かいる。玄関先に仁王立ちしているのは……うわっ、正巳だ。なんでママじゃないのよ。
正巳は、車から降りると当然のように助手席を開けて私を抱き上げたマイケルさんを睨み上げると、
「あんた誰？　一体、更紗のなんなのさ」
言って、私を強引にマイケルさんから取り上げた。
「ま、正巳！　何すんのよ！！」
正巳危ないよ！　私、物じゃないんだよ、生身の人間なんだからね。落とされたらさらに怪我するじゃないのさ！！　マイケルさんは、
「櫟原武（いちはらたける）と申します。今日はお声もかけずに更紗さんを連れ回したりして、すいませんでした」
その言葉にそう言って、正巳に深々と頭を下げた。その時、
「まぁまぁ、今日はどうもありがとうございます。どうぞ上がってお茶でも飲んでください」
遅ればせながらママが慌てて走り込んできた。ママを見るとマイケルさんは、
「いえ、車ですし、これから仕事先に顔を出さないといけませんので今日はこれで失礼します」
と言うと、また深々と頭を下げて助手席のドアを閉めた。そして、

車に乗る直前、
「更紗ちゃん、今日はありがとう。ホントに楽しかったよ。
あ、それからさっき渡したメモだけど、やっぱり捨てておいてくれる？　それじゃぁ」
と言ったのだが、その表情は泣きそうなとても傷ついた顔をしていた。さっき渡したメモって電話番号のことだよね。どうしていきなり捨ててって……ビックリして返す言葉も出せないまま、マイケルさんの車はあっという間に走り去ってしまっていた。

傷付いた瞳（後書き）

更紗ちゃんに続いて、正巳君も武君も誤解の嵐。誤解スパイラルになっております。

次回、更に思ってもいなかったことが更紗ちゃんを襲います。

男が女に服を贈る理由（前書き）

ああっ、切れない……

男が女に服を贈る理由

「更紗、重っ。いつまでも抱きついてないで下りろよ」
「言われなくても、下りるわよ。あ、ママ手を貸して」
マイケルさんが走り去ったとたんそう言う正巳を睨みながら、私はママに手を貸してもらってやっと地に足をつけ、二人に支えながら家に入った。とりあえず一番座りやすい椅子のあるダイニング向かいながら、
「正巳、マイケルさんに何であんな失礼なこと言うのよ」
と正巳に文句を言う。あんたは私のなんだって言うんだ、弟でしょうが。いまさらあんたに敬ってもらおうなんて思ってないけど、せめて人のことを持ち物みたいに扱うなって言うの。
「更紗こそどういうつもりなんだよ。あんなやつがいるんだったらなんで見合いなんてしたんだ」
そしたら正巳はそう反論した。
「それはママが勝手ににセッティングしたんだから。私のせいじゃないわよ。それに、マイケルさんとはそんな関係じゃないわ」
それに対して、私はむくれながらそう答え、
「そうなのよね、更紗ちゃんに内緒でお話進めちゃったのよ」
とママがちゃんとフォローを入れてくれたけど、それでも正巳は納得しない。
「マイケル？俺には武（たける）って言ってたぞ」
あ、そうか。マイケルさんは日本名を名乗ったんだっけ。
「マイケルさんのママはイギリス人だもん。英名も持ってんの」
私はそう説明する。知ってるのはとりあえずそれだけだけど、それだけでもマイケルさんと私が以前から知り合いっぽく聞こえるから不思議。それを聞いた正巳は、
「へぇへぇそうですか。けどな、あいつさっき着いたとき、更紗を待ってた俺をものすごい眼でにらんでたぞ。あれは完全に飢えた雄

の眼だね。更紗は天然だから気づいてないだけさ」
と面倒臭そうに言う。でも、飢えた雄の目って、何。それはあんたの目が腐ってんでしょうが。
「そんなことないって」
そうよ、マイケルさんにはちゃんとすてきな家族がいるもん、悲しいけど。その時、改めて私を見たママがいきなり素っ頓狂な声を上げた。
「あら、更紗ちゃん、着物はどうしたの？」
「えっ、着物？　あ、マイケルさんの車の中だ。病院の後、着替えたの。足が不自由だと着物じゃつらいだろうって……」
それを聞いた正巳の目が怪しく光る。
「あいつが買ったのか」
と言われて、ちょっと悪寒が走った。
「う、うん……」
私は、ぎくしゃくっと頷く。
「ほらみろ、あいつ更紗落とす気満々じゃん」
それを聞くと、正巳はにやっと笑ってそう言った。
「どうしてよ」
「男が女に服を贈るのは脱がすのが目的だってのは、心理学では常識だろ」
「そんなの統計上の問題でしょ。すべての人に当てはまるって訳じゃないわ」
「いや、俺なら間違いなくそれ目的だぞ。それに、この服どうみてもブランドの一点物じゃないか」
う、鋭い。まさしくブランドの一点物ではあるんだけどね。男のあんたが、なんでそれを知ってんのよ。
　そうか、あんたは会社のかわいい部下の退路を用意周到に絶って囲い込むようにゲットした腹黒上司だもんね。それくらいはリサーチしてあるってことか。けど、それがすべての男の常識だとは思わないでね。マイケルさんはお店を知らないからの外商買いなんだか

ら。
「ねぇ、更紗ちゃんそれで着物はちゃんと畳んであるの？」
そこでママが私たちの会話にそう割って入る。
「デパートでちゃんと畳紙もらって、畳んであるわよ」
私がそう言うとママは、
「それなら良いわ」
とホッと胸をなで下ろす。どうでも良いけど、拘るとこそこ？？
「ったく、更紗の貞操の危機だってのに、何をのんきなことを……」
と正巳も頭を抱えている。
「貞操の危機も何も、それでまとまってくれるのなら、いいんじゃない。相手の男性が救世主に見えるってもんだわ」
それに対して、ママはしゃらっとそう言った。天使顔だけに救世主って……何気に酷くない？

「ま、とにかくご飯にしましょ。更紗ちゃん、マイケルさんには連絡着くんでしょ。着物のこと、食べたら電話しておきなさいよ。正巳くんも食べるでしょ？」
と言うと、正巳は、
「いや、俺は美奈子がちゃんと用意してるだろうし帰るよ。あー、一日ムダに振り回されたぜ」
と言ってとっとと愛妻の待つ自宅へと帰っていった。おお、おお帰れ帰れ、幸せ者めが！

この後パパが仕事（パパの仕事はカレンダーに関係ないシフト制）から帰ってきた。ママはこのお見合いをパパにも言ってなかったらしく、（パパに言ったら絶対に反対するだろうから）パパには私がお出かけした先で怪我をしたことにした。たぶん、ことの顛末を正直に話せば、きっと正巳と同じかそれ以上の反応をするだろうから、私にとってもその方が都合が良かったし。
そして、この日、この足で二階に上がっても下りるのが大変だろ

うということで、私はリビングのソファーベッドで寝ることになった。
夜中、慣れない空間で眠れない私は、マイケルさんの携帯番号を見つめながらため息をついていた。確かに着物は返してもらわなきゃいけないんだけど。でも、
『渡した紙、捨ててください』
という言葉と、あの傷付いた様な瞳を思い出すと、私はその夜、マイケルさんに電話をかける勇気はついぞ持てなかった。

……そしてその翌日……
「おい更紗、起きろ！」
私は朝６時、と叫ぶ正巳の電話に叩き起こされた。
「何なのよ、正巳」
「おまえ今、リビングだよな。今すぐテレビつけろ、４チャンだ」
まぁ、準備に時間がかかるけど、今日は病院に行ってから出勤するつもりだったから、もう少し寝ているつもりだったのに。そう思いながらとりあえずママが枕元に置いてくれていたテレビのリモコンのボタンを押す。

私は、そこに映し出されたテレビのエンタメコーナーの話題に思わず息を呑んで固まった。
何故かと言うと、
『あのイケメン青木賞作家、市原健の熱愛発覚。怪我をした彼女を実家まで優しくエスコート』
という見出しの下、エンタメボードに、家の前で私をお姫様だっこしたマイケルさんの写真が掲載されたスポーツ紙が張り付けてあったからだ。

男が女に服を贈る理由（後書き）

更紗を襲うさらなる試練は最後の『ワイドショー』攻撃でした。

まぁね、病院→デパート→カラオケボックス→自宅と、結構派手に『イベント』ありましたからね、そりゃスポーツ紙に撮られてもしょうがないでしょう。

武君も遅咲きですから、自分が有名人だという自覚がなかったりしますしね。

では、次回。

熱愛報道（前書き）

ああ、進まないっ

熱愛報道

私は目の前のテレビで自分が取り上げられていることが信じられなかった。確かにマイケルさんも幸太郎さんも原稿がどうとか言っていたから、マイケルさんは作家なのだろうと思ってはいたけど、青木賞を受賞しているような有名な作家さんだとは思っていなかったから。

私のこともう調べられているらしく、『お相手は３６歳。着物の似合う一般女性』というテロップが差し込まれている。ま、ウチの前で撮られているんだから、近所に聞き込みすれば、生まれたときから住んでいる私の情報なんて簡単に手に入るだろうけれど。

「ったく、芸能人なんだったらあんな派手なことすんじゃねぇってんだ」

と、まだ切ってなかった電話の向こう側で正巳が舌打ちする。私はそれに、

「正巳、それを言うなら文化人だよ。それに、普段テレビになんか出てないから、自分がそんな風に取り上げられると思ってなかったのよ」

と一応フォローを入れる。マイケルさんもたぶん、自分がこんな風にワイドショーを賑わせるとは思っていなかったに違いない。

そして、続々入ってくるマイケルさんの情報に、私は驚くばかりだった。

何より一番驚いたのはマイケルさんが独身で、一度も結婚したことがないと報道されていたことだった。じゃぁ、幸太郎さんやアユさんの存在は？　隠し子というには、幸太郎さんは堂々と親父呼ばわりしていた。

程なくして起きてきたパパがいつものように食事を済ませ、仕事にでかける。あ、ママは低血圧で朝起きられない人なので、夜の間に用意してあったものを勝手に食べている。いつもなら私がご飯ぐ

らいはついであげるのだが、今日はそれができない。

そして、ごくふつうに出ていったパパが、１０分ぐらいした頃、ムッとした声で携帯から電話をかけてきた。パパは、出たのが私だと判ると、

「お前、作家の市原健（いちはらたける）とつきあっているのか」

と言った。でも、パパがワイドショーを見たときにはもうそのコーナーじゃなかったのに、何でそれを知ってるの？

「今、家を出たとたんにリポーターって奴だと思うが、『いつ知り合ったのか』とか『結婚はあるのか』だとか、しつこく聞かれたぞ。それで、今駅について新聞を見た。

昨日はママと出かけたんじゃなかったのか」

げっ、さっきのテロップを見る限り、私の素性もリポーターにはバレているのはわかっていたけど、まさか家まで張ってたのか。

「いえ……あの……その、ママとちゃんと出かけたよ。それでさ、怪我したときにね、動けなくなってる私をマ……その人が親切に病院に運んでくださっただけなんだ。ただ、それだけ。私も今テレビ見てビックリしたとこ」

私はマイケルさんと言いそうになるのをすんでの所で堪えてそう説明する。アブナイアブナイ……今親しげにマイケルさんなんて呼んだら逆効果だ。

「そうか、それならいいが、パパは１５も年上の男なんぞ、いくら賞を取った作家でも反対だぞ」

パパは案の定、不機嫌な口調でそう言って電話を切った。

そうなのだ。４２～３歳だと思っていたマイケルさんの歳は、実際は５１歳だという。

でも考えてみればそうだろう。私が思っていた４０代前半だと、幸太郎さんの正確な歳はわかんないけど、とんでもなく若いときの子供になってしまうもの。

それにしても困った。家を張っているとなると迂闊に出られない。

たとえタクシーで病院に行くにしても、だからこそ目立ってしまう。顔にぼかしが入ったって、近所の人にはきっとちょんばれだ。
仕方ない、今日は休もう。どうせ動かさない方が足のためにも良いのだから。ただ、何日も休めないだろうしな……
そんなことを考えていると、まだ電話が鳴った。ディスプレーを見ると……良かった、正巳だ。
「もしもし正巳？」
「更紗、家張られてるんだって？」
正巳も出勤途中なのだろう、がやがやと外の音が聞こえる。
「うん、そうみたい。どうして知ってんの？」
「父さんがこっちに電話してきた」
「パパが？　なんで」
パパ、私だけじゃなくて、正巳にも電話してたの？
「市原健ってどんな奴かって聞かれただけさ。んなこと聞かれたって俺も知らないって答えるしかないけどさ」
それを言うなら、正巳どころか私だってそうだ。もちろん正巳には内緒だけど。
「けど、このままじゃさ、病院どころか仕事にも行けないだろ。連絡先教えろ、俺がガツンと文句言ってやるから」
続けて正巳はそう言ったが、私は、
「いいよ、別に……」
と答えた。別にマイケルさんが悪い訳じゃないから。そしたら正巳が、
「更紗、着物のことは連絡したか？」
と聞いた。
「ううん……まだ」
「ちょうどいい、怪我が治って更紗が行くとしても、あいつが持ってくるとしても騒ぎになるだろ。だからそれも含めて俺が電話して取りに行ってやるから。ほら」
確かにもう目をつけられているのだから、私たちのうちのどちらか

でも動けばまた撮られてしまう確率は高い。度々報道されれば、マイケルさんとアユさんとの中にヒビを入れてしまうかもしれない。私が原因でそんなことになってほしくない。私は、

「解った、えっとね、０９０の……」

と、マイケルさんのスマホの番号を正巳に告げた。

熱愛報道（後書き）

あーあ、更紗ちゃん正巳君に連絡投げちゃいました。自分で連絡してれば誤解は解けたかも知れないのにねぇ。

てな訳で、彼らの誤解スパイラルはまだ続くのでした。

ただ、助けられただけの……

正巳との電話を切ってから今度は私の会社に電話を入れた。
私が勤めるのは、作業ロボットを作っている会社。作業ロボットというと大手の企業が独自に作っているように思われるだろうが、実は割と小さな会社が手作業でということも多い。相手のニーズをいかに形にできるか。それは施設の規模ではなく、開発者の発想能力に負うところが多いからだ。
工業高校の機械科をを出た私は、そんなオーダーメイドな物づくりに惚れ込んでこの会社に入った。
だけど、だからと言ってロボットアニメはあまり見ない。小さい頃はともかく、少し大きくなってからは特に。 何故かというとメインを張るロボットたちは結局がとこ兵器として扱われていることがほとんどだからだ。
ロボットは人を幸せにするものじゃなくっちゃ。誰かが不幸になるような使い方は『彼ら』とってもかわいそうだと思う。
そして、その台詞も実は社長吉田直也の受け売りだ。彼は私の遅ればせながらの初恋の相手。だけど、12歳も年上の社長に私が淡い思いを抱いたときには、既に奥様の由佳さんとの結婚が決まっていて、私はいきなり失恋してしまったのだけど。

「はい、吉田工作所です」
由佳さんがハキハキと明るい声で電話に出た。
「あ、由佳さん、月島です」
それに引き替え私の声はどよんとしている。足が痛いせいもあるけど、それだけじゃない。正直どう言って休もうか悩んでいる。納期の差し迫った仕事があって、本当なら休んでいる暇などないのだ。
「あ、あのね……昨日、足怪我しちゃって……いま動けないんです。今日……休ませてもらえませんか」

続いて、びくびくとそう切り出した私に、
「足怪我して動けないって、入院しちゃったの？」
由佳さんは驚いてそう聞き返してきた。
「い、いえ入院はしてないんですけど。昨日日曜日だったでしょ、まだ松葉杖がないんですよ。こんな足じゃ運転できないですし、ウチの母は免許持ってなくて」
と、私が由佳さんに事情を説明していると、
「月島、怪我したって？」
電話の声が急に社長に変わって、
「月島、今すぐ着替えて出られるように準備しておけ」
社長がそう言った。
「へっ？」
「俺が迎えに行ってやる」
えっ、わざわざ？
「良いですよ。ミュートスの納期もうすぐでしょ？　私にかまけてる間に動作確認しておいてください」
「だからだろうが。こいつは月島の女性的な発想のおかげでモノにした奴だ。月島が動作確認しないで、誰がやる」
確かにこの仕事は私が女としていつも疑問に思っていたことをふと口に出したことで一気に形になった『子』だ。
「でも……」
「お前、怪我したといってホントはサボりたいのか」
口ごもる私に社長がちょっと怒った様子でそう言う。
「違いますよぉ。ただ、家の前今……」
だけど、そこで私ははたと困った。マスコミが家に来てますとストレートに言っても、私は一般人。鼻で笑われそうだ。
「月島の家の前がどうだってんだ」
その時私は川崎ブルージーンズの大ファンである社長が愛読しているスポーツ紙が今回熱愛報道を取り上げた「毎朝スポーツ」だということを思い出した。

「社長、今日のスポーツ新聞見てください」
「なんだ、藪から棒に」
「三面開いてください」
バサバサと耳元で新聞をめくる音がする。
「ん？　釣りがどうかしたか。まさか、その下のエロい小説じゃないだろうな」
釣り？　ああ、社長本当に3面目を開いちゃったのか。しかもエロい小説って……そんなもん見せて何を説明するって言うんですか。
「違います！　裏の方、芸能欄ですよ」
「おお、ならそれを早く言え。なんだ、Ｔｅｔｒａの武道館コンサートか？　違う？　ああ、青木賞作家の熱愛報道って奴か。それがなんだ」
「そのお姫様だっこされているのが私です」
「これが、月島？　確かに言われれば似てないこともないな」
私は、怪我をして動けなくなっているところを助けられて家まで送り届けてもらっただけなのにスポーツ紙にとられたと、この写真の状況を掻い摘んで説明した。
「じゃぁ、まだ表にリポーターがいるってんだな」
「はい」
「由佳、俺は月島を病院に連れていくから」
「外にはリポーターが張ってるんですよ」
それを聞いて私が慌ててそういうと、
「張ってるからってどうだってんだ。それは月島のせいじゃないだろ」
と、社長が言った。そりゃそうですけど。
「あっちも仕事だろうが、こっちも仕事だ。堂々と出てくりゃいいんだ。ただ、月島単独で行動するのは大変だろう。だから、今日は俺が行ってやる」
そう言われればそうだ。何も、私が逃げ隠れする必要はないのだ。
私は本当に怪我したところを助けられたそれに過ぎないのだから。

私は少ししてからやってきた社長の車で家を出て病院に行き、松葉杖を借りて会社に出勤した。

病院に行っていた分、段取りがくるっていつもより遅くなったお昼休みにつけたテレビのワイドショーで、マイケルさんが緊急会見を行っていた。私との関係を取りざたされて、

「彼女が怪我をされたところを偶然通りかかり、車で来ていたので病院に連れて行って自宅まで送っただけ。恋人とかそういうものではないです」

マイケルさんは関係各所にファックスを送って済む内容を、みんなの前に出て拳を握りしめて力説していた。でも、

「本当に彼女とは何の関係もないんです。ですから、くれぐれも彼女の所には取材をしたりしないでください」

そう土下座せんばかりに頭を下げるマイケルさんの姿を見て、奥さんに誤解されて大変だったのかもしれないな思った私は、これで良かったと思いながら何となくもやもやしていた。

その効果があったのかどうかは知らないが、雨が降ってきたこともあり、帰りは後輩の庄司君が贈ってくれたのだが、行きにはいた報道陣がもう見あたらなくなっていた。

そして、帰宅後、正巳から

「俺がガツンと言ってやったから。なかなかまともな会見してやがったじゃん。これで更紗も安心だろ」

と、言われたけど、それを聞いても私のもやもやはとれなかった。

訪問者

そうして、翌日は全くいつも通り（怪我しているから全くとはいえないのかもしれないけど）の朝だった。でも、私にはそれがなんだか寂しかった。別に芸能人のように追いかけられたいわけじゃない。ただ、それが二度とマイケルさんと会えないんだなと改めて実感しただけだ。

「月島さん、今朝も芸能レポーターいたんですか？」
朝から無言で仕事を続ける私に、まだ見習い中の智くんがそう言った。
「ううん、どうして」
「だって、月島さんいつもなら誰が聞いてるわけでもないのに、作業工程を説明しながら、ニコニコして仕事してるから。
それが今日はため息ばっかだし、なんか顔も変です」
「昨日櫟原さんが会見開いてくれたから、今朝は誰もいなかったよ」
智くんの答えに、私はムリに笑顔を作って答えた。確かに、大好きな仕事だから社長にも『お前、作業してるときは気持ち悪いぐらい笑顔だな』と言われたこともあるし、段取りを口に出しながらやる方が作業効率が上がるのよね。にしても、『顔が変』って……何気に酷い。
「お前な、先輩に言って良いことと悪いことがあるだろ」
その言葉に庄司さんがすかさずツッコミをいれる。でも、智くんは、悪びれる様子もなく、
「じゃぁ、顔が怖いって言えばいいんですか？」
と庄司さんに返している。さすが平成生まれと言うのか何というのか。
「お前な、機械いじるのより先に日本語もっと勉強しろ」
という庄司さんに智くんは

「へいへい～」
と言いながら表の方に逃げて、ちょろっとドアから首だけ出している。その様子がまるで叱られた犬みたいで、私は声を出して笑ってしまった。庄司さんもそれを見て、
「しょうがねぇなぁ、あいつは。まぁ、更紗ちゃんを笑顔にしたんだから、由としてやっか」
そう言って苦笑している。

「あ、どうも」
そんな智くんがドアに手をかけたまま頭を下げて、
「社長、お客さんです」
と、大きな声で社長を呼んだ。でも、
「すいません、月島さんという方がここにお勤めだと思うんですが」
という声が外から聞こえて、私を含めた作業場にいる全員の顔がこわばった。
「あんたマスコミの人？　だったら今すぐ帰んな！　こういうのをプライバシーの侵害って言うんだろ」
智くんも一旦は中へと導いた手を一杯に広げて私をガードしつつ、中の面々にそう尋ねる。その場にいた全員がその言葉に頷いた。
「違います。私は月島さんにこれをお届けに上がっただけですから」
すると、その人はそう返した。
「何だ？　それ」
智くんが胡散臭そうに荷物を見つめる。座っている私にはドアの外側にいるその人は全く見えない。でも、智くんの様子からして、宅配の業者さんではなさそうだ。
「一昨日、お預かりしたものですので、月島さんにお渡しいただければそれで」
続いてその人はそう言った。一昨日と言えばあのお見合いの日だ。まさか、マイケルさんが着物を返しに来た？　智くんが受け取るのを戸惑っていると、その人はその荷物を智くんの鼻先ににゅっとつ

きだした。
「うへっ」
と智くんが後ずさりする。その勢いに任せて作業場に入ってきたのは……マイケルさんではなく、幸太郎さんだった。しかも、入ってきた幸太郎さんといきなり目が合ってしまった。
「幸太郎さん……」
「あ、月島さん。そこですか。昨日弟さんからお電話いただいて、取りに来られるってことでしたけど、何か双方に誤解があるみたいなんで、お話がてら私が伺いました。今お時間頂戴できますか」
幸太郎さんは、あのときとは打って変わってすごく丁寧な言葉遣いだった。そう言えば、幸太郎さんって、マイケルさんの後を継いで社長してるんだっけ。
「誤解……ですか？」
双方に誤解ということは、私にもマイケルさん達にも誤解があるということだ。一体、何を誤解してると言うんだろう。
「ええ、すいませんお仕事中申し訳ありませんが、月島さんをしばらくお借りします」
幸太郎さんは肯きながらそう言うと、奥にいる社長の所まで行き、
「私、こういう者です」
と言って、社長に名刺を差し出した。すごい、ちゃんと社長のとこに行っちゃった。庄司さんの方が年上に見えるから（実は社長の方が2つ上だけど）、初めてきた人はみんな庄司さんの所にいっちゃうのに。社長が幸太郎さんの名刺を読み上げる。
「株式会社櫟原（くぬぎはら）　代表取締役社長　櫟原（いちはら）幸太郎……ちょっと待て！
いちはらってことは、市原健の関係者か」
「はい、息子です」
社長に聞かれて、幸太郎さんは迷いもなくそう答えた。
「息子？　確か、市原健は結婚してないんじゃなかったのか」
テレビ報道とは違うと、その発言に社長がそう言って幸太郎さんに食ってかかる。

「ええ、義父は独身です。実は義理仲なんですよ。会社を継ぐために、姪の婿である私が養子に入ったんです。義父は一度も結婚したことがありません」
それに対して、幸太郎さんは笑顔そうで答えた。えっ、幸太郎さんとマイケルさんって本当の親子じゃないの？　しかも、結婚したこともないって……　じゃぁ、アユさんは??　私の頭の中は疑問符で一杯になった。
「やっぱりご存じなかったようですね。来て良かった」
その様子を見て、幸太郎さんはそう言って微笑んだ。

幸太郎さんから着物を受け取る。その時、幸太郎さんのポケットで携帯が鳴った。その着信音はなんと「月夜の伝説」！　幸太郎さんは、
「あ、親父ですよ。何なら直接本人から聞きます？」
と言いながら携帯を取り出した。だけど、
「はい、幸太郎。何だ薫？　お前何で親父の携帯で電話してんだよ。えっ？　親父が！　うん、ああ、ああ、泣くな。それで……どこに？　うん、解った。すぐ行く」
笑顔で電話を取った幸太郎さんの表情が見る見る曇っていく。そして、電話を切った幸太郎さんは、涙目でため息を吐くと、
「月島さん、一緒に来てくれませんか」
と言った。薫さんというのは今の話から考えると、幸太郎さんの奥様ではないだろうか。マイケルさんの携帯で奥様からの電話。すごくイヤな予感がする。続けて幸太郎さんは、
「親父が倒れました。原因はまだ聞いてませんが、危篤状態だそうです」
と震える声で絞り出すようにそう告げた。私は自分の予感が当たってしまったことに、目まいがした。

マイケルさんの生い立ち（前編）

危篤状態って、マイケルさんが死んじゃうかもしれないの？　私はキュッと胸が締め付けられたようになって、体から力が抜ける。ああ、立ってなくて良かった。

「すいません、少しお話をさせて頂くだけのつもりできましたが、月島さんをこのままお連れしてもよろしいでしょうか。もしかしたらしばらくかかるかもしれないですが」

幸太郎さんがそう言って社長に頭を下げる。でも、しばらくかかるって……そうよね、症状が落ち着くまでは時間がかかるはずだわ。決して幸太郎さんがお葬式まで想定しているわけじゃないよね。

「ああ、ウチの方は構いません」

それに対して社長はそう即答した。

「で、でもそれじゃミュートスの納期が」

「ミュートスのは月島がメイン張ってるだけであって、お前一人でやってる訳じゃない」

そりゃそうだけど……

「あ、あの、差し出がましいようですが、ミュートスというと、ミュートス工業のことですか？」

それを聞いた幸太郎さんが社長にそう聞く。

「ええ、ミュートス工業ですが、それが何か」

それに対して、社長がうなづきながらそう言うと、

「それでしたら、あちらの専務は私の舎弟（ゴホン）……いや、旧知の仲ですので、少しくらいなら納期の融通はつけさせます、もといお願いできます」

幸太郎さんは、そう言って、ミュートスに口添えする（というにはちょっと相応しくない単語が若干混じっていたような気もするけど）とまで言ってくれた。それを聞いた社長は、

「いや、そこまでお気遣い頂かなくても」

と、幸太郎さんに言った後、私に向かって、
「月島、行って来い。行かなければ、持ち直してもそうじゃなくてもきっと後悔するぞ。
それにな、上の空での仕事は事故の元だ。ウチみたいな小さな会社は、ムダな金も人も置いとける余裕はないんだからな」
と言った。確かにそうかもしれない。今の私の精神状態ではきっと今日は仕事にならないだろう。行って、その目でマイケルさんの無事を確認しなきゃ。
「は、はい……行ってきます」
私はそう言って、深々と頭を下げる幸太郎さんに続いて会社を出た。

駐車場に着くと、幸太郎さんは黒のボックスタイプの車の助手席のドアを開けて、
「その足では乗りにくいかもしれませんが、後ろでもやはり同じだと思うので」
と言った。そう言われて後ろの座席を見ると、運転席の後ろにはチャイルドシートが装着されている。小さな布のおもちゃも置かれていた。幸太郎さんは私を支えて車に乗せると、自分も乗り込んで走り出した。
途端に、カーオーディオから童謡が流れる。
「奏のＣＤが入れっぱなしだった」
幸太郎さんは慌ててボリュームをゼロにした。
「別に良いですよ」
「そうですか？」
「気分が和みます」
私がそう言うと、幸太郎さんはまたボリュームをさっきより少し落としたくらいにまで戻した。

「親父はね、小さい頃いじめられっこだったんですよ」
それから幸太郎さんは、ぽつぽつとマイケルさんのことを話し始め

た。

「喘息持ちだった親父は小さくてひょろっひょろで、そばかすだらけね、目だけが光ってるような子供だったんですよ。

『お前の顔は日本人離れしてるんじゃなくて、人間離れしている』よくそう言われていたそうです。

気弱な親父は、3つ年上の姉、嫁の母親の絵美奈と、後に嫁の父親になる幼なじみの紀文（のりふみ）以外とは口も利けないようなそんな子だったそうです。

そんな親父は現実ではない世界、本やアニメなどに逃げ場を求めました」

マイケルさんがいじめられっこだったなんて信じられないな。でも、昔はハーフということだけでいじめられることもあったみたいだし。ただ、本やアニメが好きなことは別に悪いことじゃないんじゃない？　逃げるって、何かヤな言い方だな。そう思ったけど、私は口を差し挟まずに幸太郎さんの話の続きを聞いた。

「思春期を迎えてみるみるその容姿が整っても、親父の心は小さないじめられっこのままだったんです。

ちょうどそのころ、タイミング良くというのか悪くというのか、祖父の事業が成功し、櫟原は飛躍的な成長を遂げました。甘いマスクと、大会社の御曹司というステータス。

幼い頃とは打って変わってモテるようになった事に一番ついて行けなかったのは、当の親父自身でした」

マイケルさんの生い立ち（前編）（後書き）

今回と次回でマイケルさんが結婚しなかった理由（できなかった理由とも言う？）をお送りします。

ミュートス工業というのは「赤パニ」で出てきた彰教の会社。『のりちゃん』舎弟扱いされちゃってます。

それに、幸太郎の車も……ふふふ、こいつ企んでます。

マイケルさんの生い立ち（後編）（前書き）

生い立ちというより、青春時代かな。

マイケルさんの生い立ち（後編）

「大体、そういうのは本当に親父の外見だとか地位だとかに惹かれている者が大半でしたから、親父も適当にあしらっていたのですが、一人だけ、華子さんという女性だけは違っていました。
ちょうど生みの母を失ったばかりの親父の心をしっかり支えてくれる優しい女性で、親父は真剣に結婚を考えていたようです。
しかし、妻の死をきっかけに一層仕事人間と化してしまった祖父は次々に事業を拡げ、二人は会うこともままならぬようになっていきました」
やっぱり、そんな人いたんだ。そうよね、外見だけを見る人ばかりじゃないもの。そうは思っても、私は胸の奥の方がちょっぴり痛かった。
「そして、ある日突然、華子さんは別れを切り出しました。
『もう待つだけの日々はいやだ。自分だけを見てくれる人の所にいく』
と。もちろん、親父だって止めました。
『もう少し待ってほしい。今の仕事が片づいたら父親に話すから』
と。でも、華子さんから返ってきたのは、
『あんたその年で「ビューティー戦士ムーンレディ」だって？　キモいよ。あんたがお金持ちだと思って私、今まで何とか合わせてたけど、もう限界。オタクのお守りなんてもうコリゴリだわ』
という、今までの優しい彼女からは考えられない手のひらを返したような言葉でした」
「ひどいっ、その人マイケルさんのこと騙してたの！」
あきれた、お金目当てだなんて最低っ！
「その言葉に傷ついた親父は華子さんと別れ、祖父と共に仕事三昧の日々を送るようになったのです。
実はその頃、さる代議士のお嬢さんが親父を気に入り、華子さんに

身を引くように強要していたこと。華子さんもその方が親父のためになると自分から身を引いたことが判るのはずっと後の話です。
結局、親父はその代議士の娘との縁談もゲイだと偽のカミングアウトをして自分の殻に閉じこもってしまいますが」
なんて、寂しい話なのかしら。それじゃぁ、結婚もできないよね。ん？　で、でもちょっと待って？　その話って……
「映画化された『コーラルブルー』じゃないですか」
確かに原作はマイケルさんだけど、それ小説じゃないですか。
「ええ、親父（主人公の圭のように）は死んでないし、本当はゲイではなく、自分のオタク趣味を誇張して相手を引かせて破談に持ち込んだり、代議士ではなく、銀行の頭取のお孫さんだったり。人物が特定されないように巧く脚色されてますが、これ親父の実話から生まれた作品です。親父は華子さんに謝罪の意味も込めて、あの時彼女がどんな気持ちでいたのかを、彼女の気持ちになりきって書いたものなんですよ」
「華子さん、文句言ってこなかったですか」
自分がネタにされて。
「同じように、相手方の報復を心配してくれて、『ありがとうと』言ってくれたそうですよ」
ホントに優しいいい人だったのね。
「それで元の鞘には収まらなかったんですか」
「事の真相を聞いたのが、華子さんの（もちろん別の男性との）結婚式ですからね。親父が『コーラルブルー』を発売したのがその１８年後です」
そ、それじゃムリだね。
「その……それじゃ華子さんはともかく、頭取さんがなんか言ってこないんですか？」
「あれから２５年以上経つんです。頭取はもうとうに引退されておられるし、当のお嬢さんも別の方と結婚して久しいですし、自分だと特定される要素がなければ敢えて『藪から蛇』を突っつき出した

りしませんよ」
そんなものかしら。あれは自分のことなのよなんて、ミーハーにいえる種のエピソードじゃないけどね。

「着きましたよ」
そうして、マイケルさんの昔話をしている間に、私たちはマイケルさんが運ばれたという病院に着いた。無事でいてほしいな。私は玄関の前でゴクリと唾を飲み込んだ。私の表情をまじまじと見た幸太郎さんは、
「ああ、お連れして良かった。
すいません、怒らないでくださいね。
シャイで不器用な親父がああまでしてきっかけをつかもうとしたんです。息子としては是が非でも今度は成就してやりたいと思うじゃないですか。
過去のことは気になるかもしれませんが、生理的にいやじゃなければ、改めて月島さん、親父をお願いします」
と、さわやかな笑顔で意味不明なことを言って、病院の中に入っていったので、私は首を傾げながら後に続いた。

マイケルさんの生い立ち（後編）（後書き）

韓流ドラマも真っ青な純愛エピソード？　しかも実話ベースかよっ！

「実話をそれと見せずに書く」作家の皆様、そういう経験ありませんか？

『コレ、時効だよね』とか言いながら……

そうじゃなくても、この浅慮なたすくのこと、そこら中にたすくキャラ充満してますが。

意趣返し

病院に入った幸太郎さんは受付にも寄らずまっすぐエレベーターホールに向かった。着いたエレベーターに乗った幸太郎さんは、迷わず7階を押す。あれっ、あの電話の口振りでは、あわてて奥さんが電話してきたっぽかったんだけど、なんで部屋まで知ってるの？

「ふふふ、何で部屋まで知ってると思ったでしょ」

すると、幸太郎さんがそう言っていたずらっぽく笑った。で、でも何で私の考えてること分かるの？　実は幸太郎さんってエスパー？？　そう思った途端、幸太郎さんは私の顔を見て吹き出した。

「今、俺のことエスパーと思ったでしょ」

そして、また私の思っていたことを言い当てる。

「な、なんで分かるんですか」

「月島さんって分かりやすすぎです。ま、そこがあなたのいいところなんですけどね。

でも、これは超能力でも魔法でもありません。言わばちょっとした手品かな」

「手品……ですか」

「コレですよ」

幸太郎さんはそう言って私に携帯を見せた。そして、メニューキーからアラーム画面を出す。そこには2番目のアラーム設定に、ウチにいた時間が表示されていた。あれって、かかってきたんじゃなくてただのアラーム音だったんだ。

「じゃぁ、マイケルさんが倒れたって言うのはウソだったんですか？」

それを見て私は、プリプリ怒りながらそう言った。内心ではウソで良かったって思ってたけど。でも、幸太郎さんは私に、

「いや、ウソではありません。ウソだったら病院になんて来る必要なんてないですよね」

と返した。
「本当……なんですか？」
「ええ、実際に倒れたのは昨日の夜ですが」
「じゃぁ、何故こんな芝居みたいなことをしたんですか」
普通に昨日倒れたからきてくださいで良いじゃない。私がそう言って怒ると、
「えっ、それはほんの意趣返しですよ。それと、再確認もあるかな」
幸太郎さんは、そう言って笑顔で答えた。それにしても笑顔で『意趣返し』って何？　く、黒い……黒すぎる。正巳も黒いけど、負けてない。幸太郎さんは、
「意趣返し？」
と聞き返した私の言葉には返事せず、
「さぁ、着きました」
と言って病室のドアを叩いて開いた。
冷蔵庫にクローゼットとソファー、窓際に置かれているベッドこそ病院仕様だけれど、それ以外は病室というよりどっかのワンルームマンションのような部屋。おそらくは特別室ってやつなのだろう。
ソファーにはマイケルさんと同じ栗毛の髪の若い女性が憔悴した様子で座っていて、私たちが入ってきたのを見ると顔を上げて、
「パパ、遅いよ。たった今……」
と言って、うるうるの瞳を幸太郎さんを見てから、マイケルさんのベッドに目を移した。その仕草に私の脳は一瞬でフリーズした。

……えっ、たった今って何？　幸太郎さん、笑って『意趣返し』だって。マイケルさん、ホントに死んじゃったの？　それって、何かの悪い冗談だよね。　ウソ、ウソだって言って！！
「ま……マイケルさん死んじゃイヤぁ～！　お願い、もう一回目を開けて！　また、一緒にカラオケ行って！！」
私は松葉杖を投げ捨てて、マイケルさんのベッド際に倒れ込むように縋りついて泣いた。

意趣返し（後書き）

更紗ちゃん、完全にとっちらかってしまっていて、何度書き直しても、ちゃんと語ってくれないので、もうそのまま放り出し。ま、この子は元々こういう子ですけど。

で、意地の悪い作者はここで次回へ。さて、武君は無事なのでしょうか。（黒笑）

誤解スパイラル

私が、おぼつかない足でタックルするようにマイケルさんにすがりつくと、
「ゲホン、ゴホン……」
と激しく咳き込む音がして、
「く、苦しい……」
という弱々しいうめき声が聞こえてきた。見るとマイケルさんは赤い顔で息も荒いけど、生きていた。
「マイケルさん……」
マイケルさんが生きている！　私はただ、彼がが生きていたことが嬉しくて、思わず自分から彼を抱きしめた。でも、マイケルさんは身を捩ってもがき、その仕草でまた咳き込む。その様子を見た幸太郎さんが、
「重いんですよ、月島さん」
と言って、慌てて持ってきた折りたたみの椅子に私を座らせた。そして、『重い』というワードに私の顔がひきつったのを見て、
「すいません、決して月島さんが太ってるとかそういう事じゃないんですよ。元々気管が弱いし、肺炎で負担がかかってるから、今は着ている布団ですら重いと感じるようなんです」
と補足した。マイケルさん、肺炎だったのね。すごい病気とかじゃなくてホッとした。幸太郎さんは、私が体型を気にして顔に出したと思ったらしい。確かにボトムの方が大きい下半身デブだけど。実はそうではなく、私は私の気持ちが重いと言われてしまったのだと思ったのだ。

そして、座って改めてまじまじ見たマイケルさんは何とも複雑な表情をしていた。
「更紗ちゃん、どうして来たの？

どうせ、幸太郎君が大げさな事言って連れて来たんだよね。ごめんね、昨日はちょっと酷かったけど、今日はもう大丈夫だから」
心配しないで早く帰ってと、マイケルさんはそう言うと、また2～3回咳をして私から目を逸らした。
「迷惑ですか？　私お見舞いに来てもダメなんですか？」
私なんて、マイケルさんからすればがきんちょみたいなものだろうけど、私たち、お友達にもなれないの？　悲しくて涙があふれてくる。ぐすっと鼻をすすった私に、
「な、泣かないで。迷惑だなんてとんでもない。……僕は嬉しいよ。でも、ここに来たことが分かったら、更紗ちゃんが旦那さんに怒られちゃうでしょ？　電話で僕もう会いませんって彼に約束したもの。だから、僕に妙な期待を持たせないで」
と、私の涙に慌てた後、マイケルさんは沈痛な面もちでそう返した。妙な、期待って……私もそういう期待してもいいのかな。ただ、さっきのマイケルさんの言葉の中に聞き捨てならないワードがあったんだけど。
「は？　旦那さん？？」
独身の私に旦那さんなんていない。誰と勘違いしてるんだろう。待てよ？　今、電話って言ったよね……
「旦那さんって誰のですか？」
私は改めてマイケルさんにそう聞くと、
「もちろん、更紗ちゃんの旦那さんだよ。『俺の更紗に洋服なんて贈るな』って、すごい剣幕だった」
マイケルさんから予想通りの答えが返ってくる。間違いない、犯人は正巳だ。私は、
「それ、正巳って言う2つ下の弟です。あいつ、姉を姉だと思ってなくて、いつも呼び捨だから。私は正真正銘独身ですよ」
と言った。付け加えないけど、彼氏いない歴＝年齢だよ。
正巳め、絶対にわざとだわ。わざと弟だと名乗らずに電話したのに決まってる。こんなことなら自分で電話すれば良かった。

まったく、自分はさっさと嫁をもらっておきながら、人の恋路は邪魔するなんて、最っ低。腹黒だとは思ってたけど、『まっくろくろすけ』じゃん。しかも、かわいくないし。

すると、マイケルさんも私が独身だと分かってすごくホッとしたよな泣きそうな表情になった。

「更紗ちゃん、独身だったの？　彼、玄関先まで迎えに来てたし、すごい目で僕のことをにらんでたから、てっきりそうだと思ってた」

あのとき、マイケルさんから私をひったくったしね。だから、電話番号も捨ててって言ったのか。私の中で一つ一つの誤解が解けていく。

「でもね、最後に直接一言だけでもお詫びが言いたくて、僕、記者会見の後、こっそり電車で更紗ちゃんの家の前まで行ったんだ。だけど、いざ着いてみるとインターフォン押せなくて……ずっと、あの近くをうろうろしてたんだ。

そしたら、夜、更紗ちゃんと旦那さんが仲良くお家に戻ってきたから……望みはないって解ってたけど、それを見たらなんか糸切れたみたいなって、後は、どこをどう歩いたか覚えてない。で、気がついたら、ここにいたんだ」

だから、私に夫はいませんって。それに、昨日は正巳にも会ってないんですけど。一体、誰のことを勘違いしてる？

あ、昨日は庄司さんに送ってもらったんだっけ。そう言えば庄司さんと正巳とは背格好が似ている。ぜんぜん別人だけど、夜の暗がりでは正巳も庄司さんも同じように映ったのかもしれない。

「俺が見つけたとき、親父は朦朧としてしきりに月島さんに謝ってました。

で、ピンときました、弟さんのことだなって。今後のこともあるから、月島さんの家族構成は調べてありましたし、俺にも実の姉貴がいますからね、気持ちは分かるんです。でも、これはおイタが過ぎます。俺が見つけるのがもう少し遅ければ、命に関わることだったんですから。

それで、そっちがそうくるなら絶対にくっつけてやるって思った。
親父の気持ちは分かってましたから、あとは月島さんがどう思ってるか。それを確かめるために、今回こんな芝居を打ってみました。
月島さんも、親父のこと……」
「パパ、それは武叔父様に任せたら。パパは武叔父様にちょっと過保護すぎるわ」
私の気持ちを確かめようとした幸太郎さんをそう言って制した奥さんは、
「あ、自己紹介が遅れました。私、この櫟原の妻の薫です」
と、立ち上がって私に深々と頭を下げた。
「あ、月島更紗です」
私も慌てて立って挨拶しようとしたら、薫さんにやんわり止められた。
「お怪我されてるんですからそのままでどうぞ」
「あ、すいません」

「ってかさ、薫、おまえさっき俺に何言おうとしてた？」
そして、薫さんに『過保護』と言われた幸太郎さんは、ムッとしながら彼女にそう尋ねた。
「そうよ、パパ、何でもう少し早く帰って来てくれなかったのよ。大変だったんだから」
それに対して、薫さんはため息混じりでそう答える。
「一体何があったってんだよ。親父、落ち着いてるじゃん」
「今は終わったからよ。さっきまで看護師6人がかりだったんだから」
私も手伝ったから7人よと薫さんが言う。7人がかりで一体何をしたって言うんだろう。しばらく首を傾げた幸太郎さんは、答えに気づいた途端もっと不機嫌な顔になって、
「親父、いい加減注射器に慣れろよ。ただの採血だろ」
ぼそっと、そう吐き捨てた。ち、注射器？　採血？？

「だって、怖いんだもん」
幸太郎さんにそう言われて、マイケルさんはしゅんとなりながらそう答えた。
「だからって、全力で逃げないで欲しいわ」
薫さんが呆れ顔でそう言う。
「怖いんだもん！」
マイケルさんは涙目でもう一度そう言った。５０歳を過ぎた大の大人が注射器から逃げてる図って……でも、マイケルさんならなんとなくそれもアリかもしれないって思うから不思議だ。吹き出してげらげら笑いだした私に、
「あ、とんでもないこと聞かせちゃったかな」
と蒼くなる薫さん。マイケルさんも、
「そうだよ、フロリーちゃん。コレで更紗ちゃんに嫌われちゃったらどうしてくれるの」
と、真っ赤な顔で薫さんをたしなめる。
「嫌わない嫌わない。なんだかマイケルさんらしいですもん」
それに対して私がそう言うと、マイケルさんの顔がぱぁっと輝いた。だけど、
「月島さん、甘やかさない。そうだ、次の採血には月島さんもいてもらおう。そしたら、親父頑張れるよな」
間髪入れずそう言う幸太郎さん。マイケルさんは、
「うっ、それは……頑張ってみる」
口をへの字に曲げながら、渋々肯いた。相変わらず、この親子は逆転してるな。でも、本当に良い親子だ。ずっと、側で見ていたいと思う。
「そう言うわけで、月島さん、こんなヘタレな親父ですけど、面倒看てもらえないですかね」
私は相変わらず『過保護』な幸太郎さんの発言に笑顔で頷いた。

誤解スパイラル（後書き）

ホント『過保護』な幸太郎です。
でもなぁ、こうでもしないと、武くんと更紗ちゃんじゃ一生くっつきませんから。

残り福

私が頷くのを見た途端、幸太郎さんは、
「月島さん、俺、仕事があるんで会社に戻ります。夕方、またここに迎えに来ますんで、それまではごゆっくりどうぞ。ほら、薫行くぞ」
と私に頭を下げ、ソファーに座っていた薫さんの手をとって外に向かう。いきなり帰ると言い出したことに首を傾げた薫さんも、少し考えてウンウンと首を縦に振ると、
「へっ、それなら私が送って……ああ、ええ。私も奏が心配なんで帰ります。じゃぁ、叔父様頑張ってね」
と、マイケルさんにウインクを投げて幸太郎さんと一緒に病室を後にした。所謂、お見合いで言うところの「後はお若い方同士で」って奴だ。ただ、状況を考えてみても、みためでも私とマイケルさんの方が年上なんだけどね。
「ごめんね、幸太郎君が勝手なこと言って。あれでもね、普段は会社の事を考えるいい社長さんなんだよ」
マイケルさんは幸太郎さんがいなくなったとたん、そう言って私に謝った。幸太郎さんはたぶん、本当にマイケルさんに幸せになってもらいたいだけだ。だけどこんな風に私に父親を売り込むことができるのは、義理仲だからかもしれない。

「更紗ちゃん、本当に結婚してないんだったら、僕のお嫁さんになってくれる？
更紗ちゃんはまだ2回しか会ってないって言うかもしれないけど。そうやって、待ってたら別の誰かにとられちゃうかもしれないから。そうなったら、僕今度こそ死んでしまうと思う」
　それから、マイケルさんは改めて自分の口でプロポーズしてくれた。開発部門の女は私だけだけど、周りは妻帯者とうんと若い智く

んだけ。黙ってたって誰も寄ってこないですって。だけど、
「そんな私はもてないですよ」
と言っても、
「ううん、更紗ちゃんかわいいもん。僕、心配で」
とゆずらない。
「私の方がマイケルさんのお嫁さんになんかなっていいんですか」
マイケルさんなら、もっとすてきな人が選り取り見取りだと思うけど。
「もちろんだよ。受けてくれるの？」
「私でよければ」
マイケルさんは私の返事を聞いて、
「やったぁ！！　じゃぁ、一刻も早くここから抜け出さなきゃ」
と言って大喜び。すぐにでも点滴の管（これは意識を失っているときにつけたものなので、大丈夫だったと後から聞いた）を抜きそうな勢いだ。
「ダメですっ、ちゃんと体を治さないと。私はどこにも逃げませんから」
私は慌ててマイケルさんにそう返した。
「解ってるよ。そうじゃないと、弟さんとちゃんと闘えないもん。弟さん、絶対に阻止すると思うから。幸太郎君じゃないけど、僕にも解るんだよね。フロリーちゃんと幸太郎君のことは素直に認められたけど、ベス……あ、僕の母親の違う妹のことなんだけどね、ベスと美久君のことはなかなかね。
僕の場合は、年の離れた妹だからなんだと思ってたけど、お姉さんでもやっぱりそうなんだと思って。弟さんに親近感感じたくらいだから。
それに、できるだけ早くご両親には挨拶しておきたいし。病弱だと思われたくないからね、きっちり治すよ」
「いいですよ、正巳の肩なんか持たないでください。あの子のせいでマイケルさんがこんな大変な目に遭ってるんですから。あいつに

は私が文句なんか言わせません」
正巳には何も言わせない。言わせるもんですか。でもパパは……ちょっとヤバいかも。
それから、私たちはお互いの家族の話をした。
仕事一辺倒だったマイケルさんのお父さんが今の奥さんと知り合ったのが15年前、あちらはなんと、私たちの倍の31歳の年の差なんですって。だから、お義母さんと言っても、8歳も年下だとか。
仕事人間だったはずのお父さんは、そのお義母さん……クラウディアさんと結婚した途端、マイケルさんに会社を任せて社長を辞任。一応会長として籍は置くものの、家庭第一のマイホームパパに。これにはマイケルさんも驚くやらあきれるやら。
それはともかく、そうやって新しい幸せを掴んだ父親を見てて自分もやりたいことをやろうと思ったんだって。それで、マイケルさんは若いときのあの苦い思い出をベースに「コーラルブルー」を書いたという。あくまでも仕事の合間の楽しみだったそれは、それを見せた友人のライターさんが出版社に売り込み、編集者さんも気に入って、あれよあれよという間に本になり、ベストセラーとなり、ついには映画化までしてしまった。
そうなってしまうともう、社長業の合間に執筆というわけにも行かなくなり、ちょうどそのころまとまった姪の薫さんの（マイケルさんが薫さんのことをフロリーと呼んでいるのは、英名がフローリアなんだって）結婚相手が櫟原の社員の幸太郎さんだったことから、彼を養子にして社長につけたということだった。
それにしても、お嫁さんかぁ。なんか実感がわかない。　別に結婚するのがイヤだったわけではなく、好きな仕事をして、時々友達と遊んでそれで十分満たされていたから、焦ってしようと思わなかっただけだけど。

そして、夕方私を迎えに来てくれたのは、社長秘書の宮本美久さん。実はマイケルさんの妹さんの婚約者だ。

ちなみに、年の離れた妹のベスちゃん（日本名は絵梨紗というらしいが）は、１３歳でその彼氏の美久君が２５歳とこちらも一回り違う。

マイケルさんは、美久君のことをなかなか認められなかったって言ってたけど、そりゃそうだ。一回りの年の差より、中学生が婚約の方があり得ない。しかも、政略結婚とかではなく、彼が彼女の命の恩人だというロマンチックな理由だと言うからびっくり。彼の口からも、

「タケちゃん（会社を引退した後は、みんなにはそう呼ばせているらしい）には幸せになって欲しいんです」

という言葉が聞かれた。本当にマイケルさんはみんなに愛されている。

何で今まで結婚しなかったんだろうと思う反面、今まで一人でいて、一人でいてくれてよかったと思った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1006r/

道の先には……

2011年12月17日01時48分発行